
和の水氷輪

夜桜 冬樹

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

和の水氷輪

【Nコード】

N1674R

【作者名】

夜桜 冬樹

【あらすじ】

普通の高校生活を送る和月水裳の前に突然現れた天国の使い風丸矢箒。水裳を脱走した天国の姫だと勘違いした矢箒は、水裳を連れて帰ろうとした。そこからいきなり天国の姫に何故だか命じられ、天国の者となってしまうた。だが、高校生活が壊れることもなく、普通に学校にいたり、因縁のある地獄と戦ったりと、バトルあり、おそらく笑いありのお話です。この作品は毎週金曜日18時に更新されます。

一・水氷心を持つ者（前書き）

新たな逃げ道……ははは！！

自身初の女主人公です！

どろろぞろろ

一・水氷心を持つ者

私の名前は、和月水氷わつきみずひや。普通の女子高生。普通に勉強して、普通に部活やって、普通に生活している。更に特徴を言うならば、茶色の髪の毛で、ポニーテールで、勾玉のピン止めしてて、鞆の持ち方は、肩にかけてる。リュック背負いなんていう、ヤンキーな持ち方じゃないんだ。

ともかく、普通の女子高生なのだ。

しかし、今日だけは普通じゃなかった。

何故なら……

「姫！　お迎えに参りました！！」

「……は？」

「は？　じゃありませんよ。さあ、天国に帰りましょう！」

「あの……人違いですよ。それに、私死んでません」

「へ？　でも、その腕輪……」

「これ、ミサンガです。水と氷をイメージして作っただけですけど……」

……

「そんな説明は、どうでも良いのです。さあ！　姫！」

「あの……帰ってください」

「ぐは……ん」

しばらく沈黙が続く……

「……なるほど……つまり先日、天国の姫が家出して、この町を探してた」

「うんうん」

「それで、私を姫と錯覚した」
「うんうん。納得いったようですね！ 姫！！」
「いってねー！！！」

必殺ちゃぶ台返し発動！！

「だから……私は姫じゃねえって言ってるでしょーがー！！」
普通の女子高生！！」

「しかし……やはりその腕輪……」

「これは、ミサंगा！！」

「水氷輪に……そっくりなんです」

「水氷輪？」

「説明しましょう。水氷輪とは、姫が身に……」

こいつに言わせると面倒くさくなるので、夜桜が説明いたします。

水氷輪とは、いつも姫が身につけている腕輪。

この腕輪には、特殊な能力があるらしい。

それは、この男も知らないという。

「……というわけです」

「へえ……」……って、何聞き入っちゃってるんだろ、私！」

「噂では、医療や回復などに使われるとか」

プルルル……

「おーい、電話なってるよ」

「おっと、失礼」

男は、受話器らしき物を取り出し、話しかけていた。

「何！？ 姫が見つかった！？」

「だから言っただじゃん。私じゃないって」

「分かった……すぐ帰る。……失礼しましたっ！！！」

そう言つて、男は歸つていった。

水袋は、ほっぺをつねつてみた。

（……痛い……いや、もしかしたらリアルな夢かもしれない！ 凄いな！今の技術は……）

しぶしぶベッドに寝転んだ。

くその頃天国く

「姫！！ しっかりしてください！！ 姫！！」

天国では、事件が起こっていた。

姫が重病にかかっていたのだ。

「……やはり、地上の空気がまずかったのだな…… 全く、体が弱いのに……」

王も頭を抱えている。

「そうだ、王！！ 水氷輪を使えば……」

「あれは、特殊な者にしか使えん」

「その特殊の条件は……」

「和の水氷心わのすいひょうしんを持つ女だ。地上の日本にしかない心だ」

「……探してきます。和の水氷心を持つ女性を」

「頼んだぞ…… 矢筈やはす……」

く地上・日本く

矢筈とは、まぎれもない、さっきの男だった。

（あの、ミサंगाとやらを持っていた女子おなこだ…… あの者は持っている！！和の水氷心）

く水袋の家く

「……で、今回は何の用？」

「頼む……天国に来てくれ……」

「だから私は……」

「姫が死にそうなんです！！！」

「！？」

「お願いです……その髪、その勾玉のピン止め、その……青と水色の物を身につけている……持っているんだ！！ 和の水氷心を！！」

「……大事な人なの？」

「はい……とつても」

しかたない表情を浮かべて、水袋は言った。

「分かった……行くよ天国に」

「本当ですか！？」

「ただし！ 1回だけね」

「ありがとうございます……」

二人は、天国へと向かった。

く天国く

「つれてきました。王様」

「その者……姫と瓜二つじゃないか……」

本当にそっくりだった。目、髪、身長、ピン止め、何もかもが。

「お主……これをはめておくれ……」

王が水氷輪を渡した。

「これをはめて、手を姫の方にかざしてくれ」

水裳は姫に手をかざした。

すると、姫が青と水色のベールで包まれた。
顔色がだんだん良くなっていく。

しばらくベールに包まれると、姫が目を開けた。

「姫……」

「やったー！！」

「目を覚ましたぞー！！」

周りは、大喜びだ。

矢筈が水裳の方に来て言った。

「……本当にありがとう……えっと……」

「和月水裳……」

「ありがとう、水裳……申し遅れたが私は、風丸矢筈だ」

「つーわけで、帰るからね」

「ああ……ありがとう……」

水氷輪を外し、送ってもらおうとしたその時！！

「待たれい！！」

王が呼び止めた。

「何ですか？」

「その水氷輪……お前に渡そう。」

「は！？」

「貴様は、次期天国の姫に任命する！！」

水裳は、ほっぺをつねってみた。

（痛い……リアルだな……）

というのも通用せず……

果たして、水袋は天国の姫となっちゃうのか……

一・水氷心を持つ者（後書き）

よければ次話も読んでください。

1 / 8 追記

何やらバグが何かが発生し、うまく改稿が出来ていません。
読みにくいかもしれませんがよろしく願います。

二・地獄の使者（前書き）

テストが始まるので、土曜日くらいまで更新できません。
ご了承ください。

二・地獄の使者

「私が何で姫しなくちゃならないんですか!!」

やはりそう否定する、当たり前だ。

「大体!! 現に今姫がいるじゃないですか!! 別に私がやらなくても……」

「こいつも年だしな」

「若いじゃないですか!! この人!!」
姫が口を開く。

「あの……私、50歳ですよ」

「こんな綺麗な50歳いるか——!!」

「ここにいるじゃないですか」

「……」

王が、もつともの理由を言う。

「年より、こいつの体が心配なのだ。これ以上負担をかけるのは、避けたいのだな」

「だからって何で私が……」

「だって似てるし」

こいつは後でぶん殴ってやる。

「王!!」

矢筈が声を上げる。

「どうした? 矢筈?」

「この人は恩人です。その人の言うことは聞くべきでは?」

「まあ……そーだけど……」

いちいち喋り方のうっとおしい王だ。

「では参りましょう。地上へ」
「うん」

水袈は、地上へと帰っていった。

く地上く

「先ほどは、王が大変失礼しました」
矢筈が頭を下げる。

「いや……別にいいんだけど……」
「本当にありがとうございました。ではっ!!」
そっぴい残して、矢筈は天国へ帰っていった。

「あっ!!」

水袈の手には受け取った水氷輪があつた。

「返し忘れた……」

ひとまず、それをタンスに保管しておいた。

く天国く

「あれくく!!?」

「どうしました?王?」

「水氷輪が無いよくく!!」

「水氷輪なら水袈さんが持って行つたじゃないですか」

「もしかして……あのままもって行つちやつた?」

「はい」

王は、顔を真つ青にした。

「いますぐ返してもらえ!!」

「何ですか？」

「あれ持っていたら……あの女死ぬぞ!!」
「はぁ!？」

く地上・水裯の家の前く

「おいおい……本当にこの奴が水氷輪持ってるのか？」
「ああ、反応している」
「じゃっ、乗り込みますか!!」
「ああ」

く天国く

「地獄の者が水氷輪を狙ってる!？」
「ああ、そうだ!! あいつらは元々、水氷輪を狙って天国をのつ
とろうと宣戦布告を行った!!」
「だから……水裯さんが狙われるのも……時間の問題じゃないです
か!!」
「矢筈!! 私を連れて、水裯の元へ!!」
「はい!!」

急展開!! 水裯の命が危ない!!
矢筈と王は水裯を救えるか……

二・地獄の使者（後書き）

何かグダグダですいません。

質問等は、感想にお願いします。

三・純白の背中（前書き）

テスト終ってからはこの小説の更新は初めてです。

なんか色々設定いれすぎて、自分で混乱しかけています。
という訳で、3話どうぞ。

三・純白の背中

水袋は何も知らずに寝ようとした。

その時、すごい勢いで部屋の窓が割れた。

「何!？」

水袋は勢いよく起き上がった。

「ふいっあいつが持つてんのか、水氷輪？」

「そのようだな、和の水氷心が感じられる」

入ってきたのは、2人の男だった。

でも、背中に暗黒の翼を持っている。

「悪いことはいわねえ。水氷輪を渡せ、女」

「あんたたちは……？」

「名乗る必要ねえだろ。さっさと水氷輪渡せ」

（何でこの人たち水氷輪の存在知ってるの!？ いったいこの人たちは……）

「ほら、早く渡せ」

「そんなのでき……」

その時、水袋の前がぼやけた……が、一瞬で戻った。
ただの立ち眩みだったようだ。

それと……何でだろう。何故か息切れがする。

「できないようなら、力づくで奪うぞ」

地獄の者は暗黒の翼を広げ、水袋に襲い掛かってきた。

暗黒の刃がそこまできていた。

あゝあ……こんな形で死ぬとは……もう少し普通に逝きたかったな。んでもって、最後までくらい普通の高校生活を送りたかった……ある意味、それが夢だったしな……

「姫……！」

すでに死を考えたいた水袋の前には、純白の翼を持ったたくましい背中があつた。

「ご無事ですか!？」

「矢筈……」

暗黒の刃と純白の刃がギリギリと音をたてる。

「矢筈……てめえ……」

「襲うのがちよつと遅かったようだね」

「……王もいるようだな」

「恩人をみすみすと見殺しにするわけにはいかん」

地獄の者が一步後ろに退いた。

「だがな……きつと守れねえぜ、お前らじゃ」

「絶対に守る……」

「戦闘の地獄、医療の天国で有名じゃねえか」

「くっ……」

水袋が不思議そうに王に聞いた。

「王……あれってどういう意味ですか？」

「天国は元々、医療や回復が盛んな国なんじゃ。その最高傑作が水氷輪。一方地獄は攻撃に使う武器や、防御の盾などが盛んな国。だからこういった戦闘は……圧倒的に地獄側が有利となる。」

「じゃあ……矢筈が勝つ確率って……」

「ほぼ0じゃ」

「そんな……」

「地獄にはまだ恐ろしい物がある。天国に最高傑作があれば、地獄にもある。おそらくこれは……歴史にずっと残る大技。『地獄刀奥義 黒暗定紋風雷斬』という技。これをくらった物が生き残れる確率も、ほぼ0」

「もし……矢筈がそれをくらったら……」

「命は保障はできないな」

「それじゃあ今すぐやめた方が……」

「あいつの背中を……素直に見てくれんか？」

「え……？」

「あいつが守ると決めたら守り通す。そういう男なんじゃ。お前さんを守るためにあいつは、戦場に立っている」

「矢筈……」

三．純白の背中（後書き）

次話は、矢筈VS地獄の者です。

四・和の水氷輪（前書き）

4 話です。

どうぞ

四・和の水氷輪

矢筈と地獄の使者がすさまじいバトルを繰り広げていた。

「強くなつたじゃねえか」矢筈」

「そうか？ お前が弱くなつたんじゃないのか？」

「なめやがって……！！」

暗黒の剣と純白の剣が交じり合う。

「俺が弱くなつたんじゃない、お前が強くなつたんだ。……だが！」

「何だ！？」

「水氷輪の使えない天国の連中は、所詮ザコなんだよ！！」

そう言った後、地獄の使者の剣が黒く光りだした。

「あの技は……」

「矢筈！！ 逃げろ！！」

王が思いつきり叫んだ。

水氷はびっくりしていたが、すぐに状況を理解した。

「まさかあれって……」

「黒暗定紋風雷斬だ！！」

「まじか！！」

「遅いぞ……、矢筈！！」

暗黒の剣が矢筈を斬った。

そこに見えたものは、赤い血だった。

矢筈はその場に倒れた。

「はっ、矢筈もおしまい。やっぱり水氷輪が使えない天国はカスだな」

地獄の使者は高らかに笑った。

「矢筈！！ 大丈夫か！！」

王が必死に声をかけるが、返事が返ってこない。

「矢筈……」

王は泣きながら、矢筈の名を呼び続けた。

「王！！」

水裳が王を呼んだ。

「どうした？水裳？」

「私が水氷輪をはめて、矢筈を回復させれば……」

「だが、もう1回水氷輪をはめると、お前は完全に天国の姫となってしまう」

「へ？ どういうこと……？」

「代々、水氷心というものは受け継がれていく。受け継ぎ方法は、水氷輪をはめること。1回目なら少し受け継がれる程度だが、2回目は完全に受け継がれてしまう。おそらく、私たちが来るまでに1回立ちくらみをしただろう。それは、今の姫の体の弱い水氷心が、少し受け継げられている証拠だ。よって、もう1回水氷輪をはめると、今の平凡な高校生活は送れない。だから、無理にとは言わん。こいつは、すばらしい仕事をしてくれた」

（私が水氷輪をはめて姫となれば、矢筈は助かるかもしれない。でも、はめないとそのまま矢筈は死ぬ……）

水裳の表情が変わった。

水裳の腕が光りだした。

「あ……あの型は……忘れはしない……」

水裳の格好は一変した。

和服を着ていて、扇を持っている。

「和の水氷輪！！」

「あ……あいつが……だと！？」

四・ 和の水氷輪（後書き）

次話は、和の水氷輪の説明ばつかになると思います。

五・氷の舞

水裳が水氷輪をはめた途端、姿が変わった。

青と水色と白が混じった綺麗な和服。

氷と水を基調にした扇。

「王……あれは……？」

「忘れはせん。あれは『和の水氷輪』だ。昔、『陽月火裳』やづきみほろという姫がいた。その者が一回見せた姿……それが和服に扇と、和の格好をしていたため、和の水氷輪と呼ばれている。その姿は、見てるだけで冷気が伝わってくる美しさだという」

（見てるだけで冷気が伝わってくる美しさ………どんなんだよ……！）
矢筈は心の中でつつこんだ。

「はっ、姫か何か知らねえが……勝つのは地獄だ……！」

地獄の使者は暗黒の剣を空に上げた。

「黒暗定紋風雷斬……！」

暗黒の剣が水裳を襲う。

「姫……危ない……！」

矢筈が叫ぶ。

水裳は扇を前に突き出した。

その扇を使って扇あおぎだした……

すると、扇がれた黒暗定紋風雷斬の波はたちまち凍っていく……

「あれは……氷の舞……！」

「氷の舞だと!？」

「王……氷の舞って……」

「氷の舞……扇で扇いで出した風は、水氷輪の影響で、凍りつくような温度の風となる。それは、何もを凍らすという……」

凍って動かなくなった黒暗定紋風雷斬。

封じられた地獄の使者は驚いた様子だった。

その地獄の使者に水氷は寄って行った。

「もう終わりにしましょう、この戦いは。あなたたちの負けです」

「ちっ……氷の舞とは……予想外だ」

「一旦退くでしょう」

「最後に名前を名乗ってやる。俺は黒沢風定^{くろさわふうじょう}」

「僕は暗上雷紋^{あんじょうらいもん}だ……」

「じゃあな。今度は絶対水氷輪を奪ってやる」

そっぴい残して、2人は帰っていった。

水氷は、水氷輪の能力を使って矢筈を回復させた。

「ありがとうございます、姫」

「いえいえ……」

「バタッ!!」

「姫!!」

「完全に姫の水氷心が受け継がれたようだな……」

「え? じゃあ……」

「ああ。こいつは、天国の53代姫だ」

「53代姫か……あつ、そっぴい……」

「どうした? 矢筈」

「王って陽月さんの時代に和の水氷輪を見たんですよね？」

「ああ、それがどうした？」

「歴史で習いましたが……陽月姫って……16代目ですよね……」

「王っていったい……何歳なんですか!？」

王は後ろを向いて言った。

「乙女に年を聞くんなんて最低よ……」

そのまま天国に帰っていった。

(男じゃねえか……)

矢筈は、水袋を抱えて天国へ行った……

五・氷の舞（後書き）

次話からやつとあらずじに書いているほのぼの生活っぽくなります。
次話は……まあ今週中には更新したいと思っています。

六・学校に戻ろう（前書き）

やっとほのぼの生活です。

色々ギャグつめていききたいと思います。

では、和の水氷輪6話、どうぞ！！！！

六・学校に戻ろう

「天国」

「ん……」

「あっ！目が覚めましたか？」

水裳と矢筈、王は天国に帰ってきていた。

「……何この和服？」

「和の水氷輪という能力だそうです。よくは知りませんが……」

「そっぴやさ……水氷輪はめたから私、姫なんだよね？」

「ええ、そういうことになります」

「じゃあ……もう学校には……」

「いけるぞ……」

王が向こうからやって来た。

「行けるぞ、学校とやらの」

「まじ！？」

「という訳で、これをやる」

そう言つと王は、白色の光の球を水裳に投げつけた。

「ちょ……ちょ……！！」

水裳の背中に直撃！！

「ぐわ………痛い！　痛い！　……痛くない！」

水裳の背中には純白の翼があつた。

「これでいつでも天国と地上を行き来できる。学校は毎日いけばいい。姫が望むならな」

「ありがとうございます！」

「いいわよ〜ん」

（王は何で最近ちょっとオネエ入ってるんだろ……）
矢筈は心の中で疑問に思った。

「では、学校に行くにあたつての約束がある。はいひとーっ!」
「ひとーっ!」
「学校から帰ったら1回は天国に来る。はいふたーっ!」
「ふたーっ!」
「勾玉のピン止めは外さない。はいみーっ!」
「みーっ!」
「水氷輪は常にはめておく。以上!」
「分かりました!」
王と水裳は、3か条の御誓文? を約束した。

〽翌朝〽

「じゃっ、行つてきまゝす!」
「いつてらっしゃい!」
水裳が翼を広げ地上に行った。
王と矢筈は見送った。

〽学校〽

(何か久しぶりな感じがするな……)
そんな気持ちで校門を入って行った。
「おっはよゝ水裳!」
「おはようゝ八千代」
この人は幼馴染で親友の如月八千代^{きづきやちよ}。
元気で優しい……少し馬鹿。
「もうすぐテストだけど……八千代大丈夫?」
「大丈夫!! 794ウグイス、鎌倉幕府!」
「^{なくよ}」

訂正しよう。ものすごい馬鹿だ。

「それはそうと……何？ そのブレスレット」

「ああ、これは……ブレスレットだよ」

言っているのは水氷輪のことだ。

でも、そう言ったらどう誤解を解く？

「いや……綺麗だなんて思ってた」

「そう？……ありがとう……」

～21Dクラス～

先生が教室に入ってくる。

「え、突然ですが転校生を紹介する。入ってください」

「は……い」

水氷は目をこすった。

どこかで……いや天国で見たことある。

「転校してきた『風丸矢筈』です！ よろしくお願いします……！」

こんな展開どっかの漫画で見たことある……

六・学校に戻ろう（後書き）

次話、転校生矢筈君と水袋が対談です。（予告）

七・補習（前書き）

前回の後書きで書かせていただいた予告とかなりそれてしまった……
すいません！！

自分なりにギャグ詰め込みました。
では、七話どうぞ

七・補習

「じゃあ風丸君はあそこの席に座って」
「はい」

矢筈の隣は八千代だった。

「よろしくね、風丸君。私は如月八千代」
「よろしく願います。如月さん」

「数学の授業」

「じゃあ、この問題を……風丸。解いてみる」
「はい！……」

（分かってないな……あいつ）

そんな時、八千代が紙に書いて渡すのが見えた。

（あいつ死んだな……）

「x＝アルファベットです！！」

「あほかー！！」

鈴木先生の必殺チヨーク投げ発動！！

「そんなこと知ってるわ！！じゃあ八千代！！」

「x＝xです！！」

「でしようねー！！」

鈴木先生の必殺チヨーク投げ発動！！（本日2回目）

「x＝xなんて当たり前だろーが！！んじゃあ和月！！」

「x＝5」

「正解です！！」

鈴木先生の必殺チヨーク投げ発動！！（本日3回目）

（何故投げる……）

こうして波乱の数学の授業が終わった。

「ったく……何で2人は中学生レベルの問題が分からないんだ……」

「作者が理解してないから？」

「悲しいことを言うな。八千代」

3人は昼休みなので、屋上で昼食を摂っていた。

「それよりさ水糺。風丸君と知り合いなの？」

「ん……まあ……ちよつとね……」

天国で知り合いました！！なんて言えない……

「そ……それよりさ八千代！！モタモタしてたら焼きそばパン売り切れるよ？」

「それは大変だ！！行ってきます！！」

八千代は売店を目指してダッシュして行った。

「……で、矢筈。理由を聞こうか」

「姫の側近であるからには、常に側にいなきゃいけないじゃないですか！！」

「だからってわざわざ学校に来なくても……」

「だって王が行けって。僕も学校に来てみたかったですし」

「はあ……まあいいけどさ、地上の勉強分かるの？」

「八千代さんという心強い味方がいます！！」

（分からないんだな）

そう思った水糺は教科書（歴史）を開いた。

「何をしてるんですか？姫」

「放課後、八千代と一緒に勉強するぞ」

「お願いします！！」

「あと地上では、姫って呼ぶな。和月さんか水糺さんでよろしく」

「じゃあ、水袋さんで」

昼休みは終わり、授業が始まった。

↓放課後↓

教室に残った水袋と矢筈と八千代は早速勉強をし始めた。

「んじゃあいくぞ。鎌倉幕府は何年？」

八千代の解答。

「794ウグイス鎌倉幕府!!」

矢筈の解答。

「定年」

「あほか、お前らは。いい国つくろう鎌倉幕府でしょうが。八千代はこの前もこう答えたよな」

「だってさ、794年でしょ？」

「それ平安京。そして矢筈だが……何だ？退職でもするのか？」

「しませんよ」

「がちでそう答えるとは思わなかった」

「続いて第2問。聖徳太子が定めた役人の心構えを示すものを何というでしょう？」

八千代の解答。

「役人の心構え」

矢筈の解答。

「憲法」

「矢筈が意外とおしくてびっくりしたけど、正解は十七条の憲法。八千代はもう論外だ」

「そんなことないよ。作者でも分かるんだよ？」

「お前は作者より馬鹿だ」

「めっちゃシヨック……」

「……思った以上に……馬鹿だったことが分かった」
「ズズズン……」
「これは、あの人に協力してもらっしかないな……」
「あの人？」
「ああ、生徒会長の、『朝希雛流』あさきひなるとにな」
「まじですか……」

七・補習（後書き）

生徒会長登場！！！！

理由は、生徒会長って人気なイメージがあるから！！！！

3連休中には1回更新したいと思っています。

では！！！！

P.S.

僕は八千代と矢筈ほど馬鹿ではありません。

八・生徒会長（前書き）

遅れてすいませんでした。

八・生徒会長

3人は生徒会室に来た。

「おゝい、雛流ゝ。入るぞゝ」

水裳が声をかけ、生徒会室に入った。

「珍しいね、水裳から来るなんて。恋しくなったのかしら？」

「あほか。お前の事が恋しかったらこの世の全員が恋しいわ！」

「はいはい。で、何の用？」

「こいつらに勉強を教えてやってくれ。重症すぎて、私には出来ない」

「いいけど……あんたに無理だったら……どこまでバカなの？」

『バカなの？』という矢が2人に突き刺さった。

「んゝゝ……の○太よりは断然酷いな」

「それは、かなりのレベルね」

「つーわけで、頼む」

「はいよー!!」

矢筈と八千代は生徒会長からの授業を受けていた。

「じゃあね……理科をやるうか。では、問題!!背骨がある動物を何ていう？」

八千代の解答

「内骨有動物」

矢筈の解答

「というか、無い奴いるの？」

「……正解はせきつい動物です」

その後も何問か一緒にやっていった。

「……凄いね2人とも!!」

「えへへ……」

「凄い重症ね!!」

「ズーン」

雛流いわく、ヘキ○ゴンより凄い珍解答だったようだ。

「じゃあ私、部活あるから。じゃあね」

そう言っ て雛流は生徒会室を出て行った。

「綺麗な人だね、雛流会長」

「そうか?そうとは全く思わないけど」

「水袋さんは、見慣れているからじゃないですか?」

「そうかも……」

3人は帰りの途中だった。

綺麗な夕日が出ていた。

「じゃあね2人とも。また明日」

「ん。じゃあな」

「さようなら……」

ここからは八千代とは別々。

よって天国の話はお構いなく出来る。

「姫……」

「ん?どうした?」

「さっきの……朝希会長でしたっけ?」

「雛流か。あいつがどうしたのか?」

「彼女が入ってる部活って何ですか?」

「弓道部だよ」

「なるほど……」

気のせいだろうか。矢筈が笑ったような気がした。

まさか……………

「雛流に……惚れたんじゃ……」

「ん？何かいいましたか？」

「いえ何も！！」

（うわ………知ってはいけない事を知っちゃったな………）

こいつはこいつでバカである。

水袋と矢筈は翼を広げ、天国へと行った。

雲をつき抜け、天国が見えてくる。

～天国～

「おお、おかえり。2人とも」

「おかえりなさい」

王と元姫が出迎えてくれた。

「「ただいま」」

「ささ、姫はあそこでお休みください」

王が指さしたところには、マンションのようなものがあつた。

「あの最上階が姫の My Room です！」

（英語で言う必要があるのか………）

「では、行つてきて～ん」

（またおねえが入つて………）

そう思いつつ、水袋は部屋に行った。

「………で、矢筈。どうだった？」

「ぴったりの人がいました。あの人は………持っています」

「今回は色々と復活揃いだな」

「朝希雛流さん………持っている。『知の水氷心』を………」

八・生徒会長（後書き）

感想や評価をください。
参考にさせていただきます。

3月29日訂正

誤字がありました。ご迷惑をかけて申し訳ございませんでした。

九・知の水氷心と天国護廷7（前書き）

遅れてすいませんでした。
9話です。

九・知の水氷心と天国護廷7

（翌日・学校）

今日も3人で普通に登校していた。

そんな中、水氷と矢筈が話していた。

「あのですね姫、じゃなくて、水氷さん」

「どうした？」

「今日帰ったら、天国の王の所に来てください。大事な話があります」

「ああ、分かったよ」

でもって天国……

「で、大事な話って何？」

「朝希雛流さんの事ですが……」

「まさか……告白……」

「彼女は知の水氷心を持っています」

「知の水氷心？何だそりゃ？」

「まあ、その前に天国護廷7てんごくこていセブンについてお話ししよう」

「天国護廷7？」

「はい。では説……」

こいつに言わせると混乱するかもしれないので、v a zが説明します。

陽月火災時代にのみ存在した天国護廷7。文字通り、天国を守る者たちだ。その中でもこの7人は、天国を守るのに大きな力を持つ

ているため、姫の1番の側近たちと言えるんです。

「……というわけです」

「なるほどな……で、雛流をスカウトしろと……」

「はい！そういうことです！」

「それでさ、和の水氷心の私みたいにさ、特徴とかあるの？」

「はい。それはで……」

ここもv a zが説明いたします。

知の水氷心を持つ者の特徴は、長い髪の毛。いわゆるロングヘア
ーというやつです。それと、鉄砲や弓矢などの射撃が得意な人。そ
して何より、優れた知能を持っている人です。

「見事に雛流にぴったりだな」

「というわけで、スカウトしましょう！」

「まあ、そうしょっか」

その話を話し合ってから2人は就寝した。

～翌朝・学校～

朝休み、2人は生徒会室の前に来ていた。

「雛流～。入るぞ～」

水袋が生徒会室に入っていた。

「めずらしいわね。1週間に2度も会いに来るなんて。寂しい事でもあったの？」

「お前と話がしたくてな……」

「へえ……で、何？」

「天国で天国護廷7やらね？」

「……八千代さんの何かに影響された？」

もちろん信じるはずがない。

いきなり天国だの言われて信じる方がおかしい。

「あのさ……冗談抜きでいつてんの!!」

「はいはい。天国ごっこはまた今度。からかいに来たのなら教室に戻りなさい」

「はいはい。分かったよ」

そう言って水滌は、生徒会室を出て行った。

帰り道……

「矢筈。やっぱり信じてもらえるようなイベントがないと無理だ」

「イベントですか……」

「例えばいきなり地獄の奴らに襲われるとか。っていうか襲われる」

「酷いですね。それでも友達なんですか？」

「一応な」

面倒くさそうに答え、水滌はふと掲示板に張ってあったポスターを見た。

「矢筈……これいけるんじゃない？」

「ん……和服美人コンテスト……？」

「美人はおいておいてさ……和の水氷輪の型で出場すれば……」

「和服……そうか!! いけますよ!!」

「うっし!やるか!」

「おー!!」

九・ 知の水氷心と天国護廷7（後書き）

次話もよろしくです。

十・ 知の雷電銃（前書き）

十話達成です。

これから頑張ります。

では、十話どうぞ！

十・知の雷電銃

「和服美人コンテスト!？」

「そう!一緒に出ようよ!！」

水裳は生徒会室で、生徒会長の雛流と話していた。

「今度は何をたくらんでるの？」

「何もたくらんでないって」

「絶対たくらんでるで」

「バツ!！」

雛流が「しょ」までを言う前に、水裳が和服美人コンテストのポスターを見せた。

「どうだい?生徒会長さん。この優勝商品」

「こ……これは……」

「出る?出ない？」

「出る!！」

「よし!」

何が賞品かはいずれ、明らかになるだろう。

帰り道、矢筈と水裳……

「「やったあああ!」」

「凄いですね!姫!」

「ふふふ!まああね!」

「まさか雛流さんが賞品に食いつくとは……」

「だから、観客じゃなくて、出場者でもいいかって思ったわけ」
「なるほど……」

「よし！コンテスト頑張るぞ！！」
「おー！！」

「和服美人コンテスト当日」

「おはよゝ水裃」

「おはよう、雛流」

出場者の楽屋で、2人は合流した。

「可愛い和服ねゝ水裃」

「これは、天国の物で……」

「まだやってるの？天国ごっこ」

「だから！まじなんだって！」

結局、この姿でも信じてもらえない。

「続いて、エントリーナンバー12番、朝希雛流さんです」

ピンクの和服を着た雛流が、ステージに上がった。

とても可愛かったのか、男性女性問わずに、大声援が飛び交う。

と、その時！！

タコの足のような物で、雛流が捕まった。

ってか、まじでタコだった。

そのタコは、会場を壊してゆく。

「おい！矢筈！何だよあれ！」

「あれは、ピンク色の長い髪の毛の生徒会長うばっちゃん星人！」

「無理あんだろ！それ！」

「つまりは、ピンク色の長い髪の毛の生徒会長が大好きな星人です」

！」

「そんなこと聞いてたら分かるわ！」

「とりあえず助けましょう！」

「そうだな！」

矢筈は天使の羽がついた剣を構えた。

水袋は和の水氷輪を発動させる。

「行きますよ！」

矢筈がピンク色の長い髪の毛の生徒会長**うば**っちゃ**う**星人（以下：**ピン星人**）に斬りかかった。

しかし、めちゃくちゃ凄い弾力で跳ね返された。

「うっ！」

「矢筈！どうした！？」

「ボヨンとしてて、斬れません！」

「そうか、じゃあ私が！」

すいひょうせん
水氷扇を取り出し、ピン星人に向けて扇ぎだした。

「氷の舞！」

氷の風がピン星人を凍らせてゆく。

ピン星人は力チコチになったが……

「姫……雛流さんも凍ってます」

「しまった！」

「どうしますか姫！？もう方法がないですよ！？」

「こうなったら……こうするしかねえ……」

ピン星人を解凍してから叫んだ。

「雛流ー！！！」

「えっ！何！？」

「緊急事態だ！！天国の事信じるー！！」

「こんな時にまでそんなことを……」

「いまの私の技を見ても信じてもらえねえのか！」

「あたりまえでしょ！天国なんて存在しないもの！」

「ごちゃごちゃ言ってる場合じゃない！！あの場所もこのままだつたら壊されるぞー！！」

「くっ……」

「さあ！早く！」

「……分かったわよ！信じる！」

「雛流……」

「でも私、戦えないわよ？」

すると、矢筈があるものを取り出した。

「雛流さん！これをはめてくださいー！！」

矢筈はそういつてあるものを投げた。

「このグローブ……はめればいいの？」

「はい！」

そういわれて、雛流はグローブをはめた。
すると、雛流の手に、銃が現れた。

「矢筈、何あれ？」

「あれは……知の雷電銃ですー！！」

十・知の雷電銃（後書き）

次話、生徒会長戦います！！

十一・電磁砲（前書き）

遅れてすみませんでした。
十一話です

十一・電磁砲

とあるグローブをはめた雛流の手には、ツインガンが出てきた。それを、知の雷電銃という。

「これ……鉄砲？」

「ピン星人に撃っちゃってください!!」
「分かった!」

雛流は、ピン星人に向けて発砲した。その弾は見事にピン星人に命中した。ピン星人は思わず雛流を離した。

「やるな、雛流」

「当たり前でしょ。生徒会長だよ?私」

「んじゃあ、コンビネーションと行きますか!!」

「了解!」

「了解です!姫!」

水袋は水氷扇を前に突き出した。

「氷の舞!!」

水氷扇を、華麗に扇ぎ、氷の風を送った。

ピン星人は力チコチに凍る。

「よし!次は私が!」

「待ってください!雛流さん!」

矢筈が雛流を呼び止めた。

「何ですか?」

「ツインガンを前に突き出してください」

「はあ……」

言われた通りに、雛流はツインガンを前に突き出した。
かみなりけん

「雷剣！！」

矢筈は、剣に雷をまとわせた。

その雷を、雛流のツインガンにまとわせた。

「これって……」

「撃ってください。電磁砲」
レールガン

「電磁砲か……」

雛流は、前にツインガンを突き出した。

「いっけー！電磁砲！」

雛流のツインガンから、一筋のビームが飛び出す。

その電磁砲は、ピン星人にクリーンヒットした。

ピン星人はその場に倒れた。

「やったじゃん！雛流！」

「やりましたね！雛流さん！」

「うん……あのさ、水袋」

「何？」

「信じなくて……ごめんね」

「いって。もう信じただろ」

「うん！」

「優勝はエントリーナンバー12、朝希雛流さんですー！」

忘れている人も多いかもしれませんが、和服美人コンテストです。

「おめでとうゝ雛流」

「ありがとう」

「やったな！賞品！」

「うん！」

矢筈がこっそり水袋に聞いた。

「あの……賞品って何だったんですか？」

「ん。ふるふる茶1年分」

「……そんな物のために出てくれたんですか？」

「おう！」

雛流は喜んで帰っていった。

「はあ、一件落着だな」

「そうですね」

「これで天国護廷7は……あと6人か」

「いえ、5人ですよ」

「バカか。雛流しかいねえじゃねえか」

「いや、僕も天国護廷7の一員なんですよ」

「……うそん」

「本当です。では、今度雛流さんも一緒に、天国護廷7について、詳しく話しましょう」

「ん、分かった」

2人は、天国へと行った。

十一・電磁砲（後書き）

次話は、月曜日～火曜日あたりになるかもしれません。

十二・水氷心と歴史（前書き）

久しぶりなぐせに、説明だらだらで申し訳ございません。
十二話です。

十二・水氷心と歴史

生徒会室

「入るぞ〜雛流〜」

水裳が生徒会室へと入った。

「あら、水裳。今日は何？」

「今日さ、1回天国来てくれ。大事な話があるんだ」

「……いいけど、行き方知らないんだけど……」

「それはな、背中 of 翼を使って、天国に……」

「そんなもの持ってないわよ」

「……あとで2-D教室に来てくれ」

「うん、分かった」

んでもって、2-D教室

雛流が2-D教室に行くと、矢筈が笑顔で白い物体を持っていた。

「……水裳。来たけど……何？」

「矢筈！！行け！！」

「了解！！」

矢筈が笑顔で言うつと、白い物体を雛流に思いっきり投げた。

「ちよっ……待っ……」

雛流はもちろん対抗出来ずに、白い物体をモロに受けた。すると、あの時の水裳と同様、白い翼が背中から生えた。

「ん……何これ？」

「それが朝言つてた翼だよ。というわけで、今日は一緒に下校しよう」

「はあ……分かったわよ……」

そして3人は天国へと行った。

「ただいまです、王」

「おう、お帰り。矢筈と姫。……そちらのお嬢さんは？」

「朝希雛流です」

「うへへへ……なかなか可愛いじゃないか……」

「斬りますよ、王」

矢筈が剣を取り出す。

「じょ……冗談だよ」

「では、あちらのテラスでお話しましょう」

矢筈が指差した場所は、それはそれは綺麗なテラスだった。

3人ともがイスに座り、矢筈が話し始めた。

「では、話しますよ。天国護廷7は、文字通り7人の者がいます。

そして、僕と雛流さんがその一人。他には、『笑』、『明』、『暗』、『体』、『音』の水氷心があります。雛流さんは『知』、僕は『力』です」

「そんなにあるのか……」

「はい。天国護廷7は元々天国を守るために作られた組織でしたが、これが存在した唯一の時代、陽月火災時代の時、あまりにも姫と天国護廷7が仲が良すぎるので、姫を護衛するものとなったそうです」

「……と、まあ知ってることはこれくらいなんですけど……」

「ねえ矢筈君。ちなみに陽月火災っていう姫は、どれくらい姫に就任したの？」

「6ヶ月……半年ですね。なので、天国護廷7についての情報がそれほど多くありません」

「そっか……」

話している間に、あたりはすっかり暗くなっていた。テラスから見

る星がとても綺麗だった。

「んじゃあ、私たちは地上の家に戻るよ」

「了解です。お2人とも気をつけて」

「ん。ありがとな」

く地上

地上に戻った2人は、夜の道を歩いていた。

「ねえ、水袋」

「何？」

「笑か明のどちらか……八千代さんじゃない？」

「八千代!？」

お忘れの方のためにご説明。

八千代というのは水袋の幼馴染で、とってもバカだった奴です。紫色の短い髪の毛で、ピン止めをしていて、ほんわかった空気が絶えない奴だ。案外モテる。

「どう考えても笑だろ」

「スカウト……やらないの？」

「やりたいの？」

「ぜ……ぜひ……」

「……んじゃあ、矢筈に聞いてみよう。特徴」

「うん!」

そうして、1日を終えた……………

十二・水氷心と歴史（後書き）

次話は、なるべく早くできるように頑張ります。

十三・ 明の水氷心（前書き）

なんとか調子を取り戻せた……
十三話です！

十三・明の水氷心

〈学校〉

他から見たら珍しい光景だろうが、水氷、雛流の2人で登校していた。

それは、もちろん八千代をスカウトするためなのだが……

「……遅いね。八千代さん」

雛流が待ちくたびれたように言う。

それもそのはず。八千代は凄まじい遅刻回数の記録保持者。この高校、影月高校のギネス的なものにも載っている。

「雛流……ここは一時休戦だ。昼休みにしよう」

「それがいいかもね……」

〈2・Dクラス教室〉

八千代が来ないまま、朝のSHRが始まった。

担任の鈴木先生が話し始める。

「よし。出席をとる」

ほとんど呼ばれていく中、八千代の名前が呼ばれる。

「如月八千代……は、どうせ遅刻だろ。はい次」

教師の癖にその扱いはいいのだろうか。

すると、後ろのドアが勢いよく開く。

「おっはようございま……す!!」

「うるせー!!」

鈴木先生の必殺チョーク投げ発動!!（久しぶり）

そのチョークは見事に八千代のでこに命中した。

「いたたたた……ごめ〜んね」
本当のバカだと水袋は思った。こいつはただの笑としか思えない。
そうして、大波乱の午前中は終了する。

↓昼休み・屋上↓

水袋、矢筈、雛流、八千代は屋上にいた。
そして八千代は思いつきり宣言する。

「今から私は、必殺焼きそばパンを買いに行ってくる！」
何の宣言をしているんだこいつは。

「では！」

八千代はダツシユで購買に向かった。

それに残ったのは3人だ。

「でさ、矢筈。笑の水氷心の特徴は？」

「えっとですね……皆を盛り上げらせるムードメーカーで、面白い人ですね」

これは、意外と八千代にはあてはまらない。あいつは、冗談でなく本気であれだからだ。

「じゃあ、明は怎なの？矢筈君」

「明は……いつも明るくて癒し系なんです」

「ほら！これなんじゃない？」

「あいつ癒されるか？逆にストレスを感じるんだが……」

水袋にとって八千代は、ストレスの原因だと言う。

すると、矢筈が喋りだした。

「あの……まだ続きがあつてですね……」

「「続き？」」

2人とも疑問そうな表情だったが、矢筈によると、癒し系ともう1つ特徴があるらしい。

「それは……姫ととっても仲がいいんです」

つまり今回で言うと、あくまで仮だが、水袈と八千代はとても仲が
いいことになる。

「陰ながら支えてくれる優しい人だったそうです」

「……それならあてはまるかもな……」

水袈はうつむいたまま答える。

「あいつは小さい頃からいろいろと助けてくれてるからな」

それは小学生の頃………

十三・ 明の水氷心（後書き）

気に入っていただけたらお気に入り登録お願いします。
次話は過去編ですね……

十四・ビー短(前書き)

サブタイトルなかなか思いつきませんでした。
何か色々とつめすぎちゃって……

展開早すぎる14話どうぞ！

十四・ビー短

入学したての頃……私の悩みは人見知りなところだった。友達も全然できずに、ずっと1人で本読んでただけ……そんな時に、八千代と出会ってさ……

「水袋ちゃんだよな？一緒に鬼ごっこやらない？」
「え？」

その時は、声をかけられた事が信じられなくて、断っちゃったんだ。でも、あいつはいつでも話しかけてくれて……次第にあいつの明るさに惹かれていったんだな……

＊

「他にもさ！一緒にドッジボールやって、あいつの投げるボールが糞弱かったり……」

水袋はとても嬉しそうに話していた。それほどに大好きな親友なのだろう。

「姫！これはもう八千代さんしかありえませんよ！」

「そうね。彼女が適任だと思うわ」

全員一致の答えだった。しかし……

「問題は、どうやってスカウトするか……よね……」

「ですよ。あまりやりやすそうなイメージが……」

矢筈と雛流は、考えに考えているが、水袋は余裕の表情だった。

「簡単じゃん。あいつは極度にバカなんだぞ？」

「「え！？」」

水袋がまさかの作戦を決行する……

必殺焼きそばパンを買えた八千代は、ご機嫌で屋上に戻ってきた。
「じゃ〜ん！いいだろう〜水袋く〜ん」

相変わらずのテンションの八千代。

そして、水袋が作戦を決行する。

「なあ、八千代。天国で明の水氷心の天国護廷7やらね？」

「何それ？」

「色んな武器を使って、姫である私と天国を守る仕事」

「おもしろそうだね！やる！」

あっさりOK。

「うそ〜ん！」

隣では2人が呆然と立ち尽くしていた。

矢筈がかばんから、短剣を取り出した。

「これが明の水氷心を持つ者の武器、ビームソード（短剣）！略してビー短！」

雛流の時と同様に、武器を渡す。

「うわあああ！かっこいい〜！」

八千代も嬉しそうにビー短を見つめる。

明の水氷心を持つ八千代と、同じくらいの明るさがあった。

プルルル！プルルル！

「電話ですね」

矢筈の天国独特の電話になった。水袋がこれを見るのは2回目だ。

「あつ、もしも王？何でしょう？」

普通に電話に出た矢筈だが、だんだんと顔色が悪くなっていく……

「分かりました。すぐに向かいます」

そういつてすぐさま電話を切った。

「皆さん！緊急事態です！天国に行きましょう！」

「何があつたんだよ！？矢筈！」

「説明は後です！八千代さん！」

「何？」

「うおりゃー！！」

矢筈が白い物体を八千代に投げつけた。純白の翼が背中に生える。

「行きましょう！天国へ！」

4人は天国に飛び立った……

十四・ビー短（後書き）

次話は早めに更新したいです。

十五・手紙

王からの電話により、4人はすぐさま天国へ向かった。

「王！緊急事態って何のことですか！？」

天国に着いた矢筈は王に緊急事態の事について聞いた。

「この事じゃよ……」

そう言っ出て来たのは1通の手紙だった。なにやら真つ黒で怪しすぎる封筒で、中には白い紙が入っていた。

「これは……地獄からのじゃ」

「地獄！？」

地獄といえば、水氷輪を狙っている攻撃の国だ。

「なあ、矢筈。内容を読んでくれよ」

水袋が言う。

言われた通りに矢筈は読み出した。

『天国の諸君。こんにちは。今回は予想もしていない出来事で失敗したが、準備が整う1ヵ月後に水氷輪を奪うべく、天国に攻撃を開始する。これはそれを報告するために書いたものだ。いわゆる宣戦布告というやつだ。そのために心して準備するがいい。楽しみにしているぞ』

上の内容がそのものだ。そもそも地獄は、攻撃や防御などを重視した国であり、回復能力がとて劣っている。そのために、水氷輪を狙っているのだ。

「それでじゃ。姫、矢筈、雛流、……えっと……」

「こちらは八千代さんです」

「では八千代。お主らに頼みがある」

「頼みですか……」

「そうじゃ。1ヶ月。つまり、地獄が攻めてくるまでに天国護廷7を完成させてくれ！」

地獄に勝つには天国護廷7を完成させるしかない、王は考えたのだろう。

皆、しっかりとうなずいた。

そして、立ってる時間さえも無駄に感じた3人（八千代を除いた）は、すぐさま地上に戻り、スカウトを始めた。

まずは矢筈が整理する。

「残っているのは、『笑』『暗』『体』『音』の4つですね」

「まずは笑がいいんじゃないか？ いちいち説明しなくていい」

「そうね」

笑は八千代の時に聞いてるため、説明の手間が省ける。

「そうそう、天国って何？」

八千代が言う。

（（こいつがいたんだっただけ……！！））

全員が心の中で思う。

結局説明係りは水袋になり、矢筈と雛流がスカウトに回った。

こちらは、スカウトの風景です。

「では、生徒会長の雛流さん。生徒のことなら大体知ってるんですね」

「ええ。大体はね」

こういうときに熱心な生徒会長は役立つものだ。

「笑はたしか、ムードメーカーで面白い人よね？」

「ええ、そうです」

「だったら、すながりゆうき須永竜輝君がいいかもね」

「須永さん……」

「なるほど……よく分かりません！」

「神様！何でこいつをバカにしたんだ！」

「あ！そうそう水袋。これがこの話の最後の会話だよ」
「嘘だろ！」

十五・手紙（後書き）

次話も頑張ります。

明日は休みだ！（振り替え休日）

十六・球技大会（前書き）

少し遅れてすいませんでした。

十六・球技大会

矢筈と雛流は、笑の水氷心を持つものを探し、2 - B教室に来ていた。

雛流いわく、須永竜輝という奴がおもしろいという。

「あ！あれが須永君」

「あれがですか……」

雛流が指さした先には、笑顔で皆と話している男子の姿があった。その男子が須永竜輝だという。

「雛流さん。授業の様子とかも見ないと分からないですが……2 - Bクラスの人っていないですね？」

水袋、矢筈、八千代は2 - Dクラス。雛流は2 - Aクラスだ。

「そこには問題はないと思うわ。今度の球技大会とかいいんじゃないかしら？」

「球技大会ですか」

1年に1度行われる球技大会。

そこで、ユーモアさを拝見しようという。

「球技大会は……1週間後ですか」

「ええ。かなり時間の無駄になってしまうわね……」

「では、他の水氷心を持つものを探しましょう」

「うん」

「分かったか！八千代！」

「大体！」

屋上では水袋と八千代が話し合っている。

やっとこさ八千代は理解してきたようだ。

「まあ、いいだろう。何とか理解したみたいだし、あの2人に協力するか」

「おー！」

矢筈と雛流は、その他も色々とスカウトを試みたが……

「なかなかいいところにいけないですね……」

「球技大会を待たなきゃいけないのかしら……」
「なかなかうまくいってないようだ。」

1ヶ月という期間はかなり短いように思える。

1週間後の球技大会まで待つとなると、残りは3週間。あきらかに間に合わない。

「少しでも仲間は多い方がいいです。今は須永竜輝君に専念しましょう」

「そうね」

そうして4人は、もったいないが普通に1週間を過ごした。
そして球技大会の日……

「さあ！ 始めました球技大会！ 司会の朝希雛流です！」

生徒会長としての雛流が、しっかりとした司会をしている。
競技はドッジボールだ。

最初は2 - A 対 2 - B だ。

雛流がいきなり須永竜輝と対決する。

「よし！ やるぞ！」

『おーー！！』

2 - B は一致団結している。しかし緊張気味だ。
そこに須永が入ってくる。

「あ！ そうそう。勝ったら生徒会長がキスしてくれるって」
『何だとー！！』

野郎共のテンションが一気に上がった。

ある意味ムードメーカーなのか……

（絶対しないけど……）

心の中でそう思う雛流であった。

結局Aクラスが圧勝した。

野郎共のテンションが一気に下がった。

そこでまた須永が入ってくる。

「ま！いいじゃない負けても。生徒会長が慰めてくれるって」

「何だとー！！！」

「嘘だけど」

「須永ーーーーー！！！」

思ったよりバカの集まりのようだ。2 - Bは。

しかし、須永はかなりムードを盛り上げている。

おもしろさはまだ見えないが、ムードメーカーというのに関しては
ぴったりだろう。

次は2 - C対2 - Dの対決だ。

Cクラスはかなり運動神経のいい連中が集まったクラス。

水袋たちのDクラスが勝てるはずもなく……

「決勝はAクラス対Cクラスです！」

あっけなく負けた……

だが、水袋たちにしては好都合だ。

ターゲットの須永竜輝との対決になるからだ。

そして、決勝と3位決定戦が始まる……

十六・球技大会（後書き）

テストがもうすぐ始まるので、更新が遅くなります。
ご了承ください。

十七・地獄の攻撃（前書き）

遅れてすいません。
急展開の十七話です。

十七・地獄の攻撃

まずは3位決定戦。2 - B対2 - Dだ。

水袋、矢筈、八千代の3人は凄い殺気が出ている。

（ふふふふ……須永……お前はもう面白いことを言ったら笑の水氷心を持つものなんだ）

（そうですね。だからさっさと面白いことを言ってください！）
作者にとっては凄くハードルが高い。

試合開始の笛が鳴る。

八千代がまずボールを投げたが、とってもへによへによ。

しかし、Bクラスの男子に当たった。

結局2 - Dが勝利した。

しかし、須永の良さが見えないまま終わってしまった気がする。
4人がここまでか……と思ったその時……！

グラウンドの方からとても大きな音がした。

皆は慌てて体育館から飛び出る。もちろん4人もだ。

しかし4人は避難をせず、グラウンドへと走る。

そこにいたのは……

「矢筈。何だあれは？」

「あの黒いドラゴンは……地獄のドラゴンなのでは……」

地獄のドラゴン。

それは地獄に住むドラゴンで、とてつもなく大きな破壊力を持っている。攻撃、防御、全てがトップクラスの最強のドラゴンだ。

「もしかしたらですけど……地獄側の攻撃はもう始まってるかもし

れません」

「そんなことないでしょ？地獄の人たちは1ヵ月後に天国に攻めると言っただけだから」

「天国にはですね」

地獄の者は、天国に1ヵ月後攻撃を言ったただけだ。地上を攻撃するのは、約束をやぶってはいない。

「ひとまず……戦うしかないな」

そう言っただけで水氷輪の型になり、水氷扇を取り出した。それに続いて、矢筈は剣を取り出し、雛流はツインガンを取り出し、八千代はビー短（ビームソードの短剣ver.）を取り出した。

矢筈と八千代はドラゴンに接近し、剣を振り続ける。

水氷と雛流は、遠くから攻撃をする。

しかし、ドラゴンはやはり強すぎる。

びくともしないドラゴンは、怒りながら攻撃をしてくる。なぎ払ったり、炎を吐いてきたり、上空からの突撃だったりだ。

そこで矢筈は雛流の元へと行った。

「雛流さん！」

「OK！」

「雷剣！」

矢筈の剣に雷をまとわせた。

そして雛流のツインガンに雷を注入する。

雛流はツインガンをドラゴンに向けた。

『ツインガン
電磁砲！』

ツインガンから一直線のビームが出る。

ドラゴンに直撃した。

しかしドラゴンは、あまり食らっていない。

（電磁砲でも無理だったら……どうすれば……）

水袋は心の中で考えた。

このままだと確実に4人は死ぬ。それどころか、学校だって滅ぼされる。

この状況を切り抜ける方法は1つしかなかった……

十七・地獄の攻撃（後書き）

次話は1週間後くらいになると思います。

というのも、テストがあるので……

この1週間は勉強に専念したいと思っています。

十八・シャイニングブーメラン（前書き）

遅れてすいませんでした。

色々あってテスト終ってませんが更新しました。

十八・シャイニングブーメラン

笑の水氷心……須永をスカウトするしかない。
水氷はとつさにスカウト方法を思いついた。

「八千代！」

「ん？何？」

ドラゴンに苦戦していた八千代が、水氷の元へとやってくる。

「須永をここに連れてきてくれ」

「須永君？うん、分かったよ」

八千代は、急いで須永を呼びに行った。

そして、八千代は須永を呼んできた。

「おお、どうしたんだ？つてか何で和服？」

「説明している暇はない！天国の笑の水氷心を持つものとなれ！」

「……何言ってるんだ？天国なんてあるわけないだろ？」

須永からはそう返ってきた。

しかし、ここまでは水氷の予想通り。ここからだ！

「あるよ！なあ？八千代」

「うん、あるよ」

八千代がそう言った後、須永は少し戸惑った。

予想通りだ。須永は八千代に惚れている！

水氷は小声で八千代に言った。

「八千代。須永にお願いしろ」

「うん、分かった」

「須永君……お願いします」

何だか告白のシチュエーションみたいだ。

「分かったよ。やってみる」

まさかの大成功。さすがはバカの集まりのリーダー須永！

「矢筈！」

「了解です！ 姫！」

そう言うと、矢筈は包帯っぱいのを投げた。

「……何？ 俺に怪我しろと？」

「それを取りあえず右手に巻いてください！」

須永はしぶしぶと右手に包帯っぱいものを巻いた。意外と短かった。すると、須永の手にはブーメランが現れた。

「おお……」

「さあ！ 戦ってください！」

須永はブーメランを勢いよく投げた。

しかし、普通に跳ね返された。

須永はその場がっくりした。

（……やっぱり勝つ方法ないかも）

心の中で水袋はそう思っていた。

矢筈と八千代も体力は限界に達していた。

雖流は動かないので大丈夫なものの、電磁砲は全然効いていない。だが、突破口はあるはずだ。この世に無敵なんざいない。

水袋は矢筈が持っている天国護廷7についての本をとった。

そこで分かった、まだ1回も使ったことのない技があった。

「シャイニングブーメラン……」

ここで1つ言うが、地獄の生物は光に弱いという事を、事前に矢筈に聞いていた。ということは、ブラックドラゴンも……

「八千代！ 須永！」

水袋は大声で2人を呼んだ。

「私の言うとおりに動いてくれ！」

2人には何をしたいのかは分からなかった。

でも、何も出来ない今、言うとおりにするしかない。

「まず、八千代！ビー短をブーメランのへっこんだ部分に光を注入してくれ」

「え？ちよっと！どうやって光を注入するの！？」

八千代は凄く戸惑っている。

そこで、矢筈が叫んだ。

「ひかりけん光剣と叫んでください！」

「分かった！光剣！」

八千代のビー短は、光で覆われた。

その光を須永のブーメランに注入する。

「須永！勢いよく投げろ！」

「おう！」

須永は勢いよく投げた。綺麗に空中を通っていく。

「八千代！それを思いっきりビー短で叩け！それで完成だ！」

八千代は言われた通り、ブーメランを叩いた。

するとブーメランは、大きな光を覆いながら、はやぶさのようにブラクドラゴンに突っ込んでいった。

「これが、笑と明の共同技！」

『シャイニングブーメラン！！』

十八・シャイニングブーメラン（後書き）

次話、ドラゴンと決着です。

十九・決着（前書き）

決着です。

十九・決着

シャイニングブーメランは、ドラゴンに向かって一直線に飛んでいく。

ドラゴンも抵抗しようとするが、苦手な光になかなか抵抗できない。シャイニングブーメランは、ズバツとドラゴンを切り裂いた。

ドラゴンは、大きな叫び声をあげながら倒れた。

「やった……」

『やったー！！』

全員が大喜び！

「つたく……」

須永がやれやれといった表情でいる。

「こんなことがあるから……最近の子供はふぐもさばけないんだよ」
そう言った後、皆（八千代除いた）がクスツと笑った。

「いつの子供もふぐさばけないよ……」

面白いことをやっと言った………ということにしていた
だきたい。

こうして、ドラゴンを倒し、八千代のおかげで須永竜輝もスカウト
できた。

*

翌日・学校にて……

理科の授業中、水袋は考え事をしていた。

それは、地獄からの攻撃についてだ。

須永をスカウト出来たはいいが、まだ3人足りていない。『暗』『体』『音』の3つ。この状態では地獄には勝てない。そのうえ、も

うすぐ卒業式という時期。いいイベントになるものがない。3年生になってからでは、もちろん遅いし……

「おい！和月！」

でも意地でも集めないと……

「ここの問題解け！」

地獄には勝てないし……

「早く答えないと塩酸ぶっかけるぞ！」

「クエン酸です！」

危ない危ない。戦いの前に死ぬところだった。

残り2週間……どうやってスカウトするか……

そして、どうやって過ごすかが重要となってくる……

ちなみに、どうでもいいかもしれないが、理科の先生は田中先生だ。

水袋は生徒会室に行った。

「こんにちは！雛流君！」

「……………こんにちは、水袋君」

水袋は生徒会室にいる雛流の元へ行った。

「何の用？」

「あと3つの水氷心の事についてだ」

生徒会長なら、秘密の行事とかあるに違いない！

……というわけで、水袋は雛流のところにいるのだ。

「悪いけど……これから、卒業式準備なの」

「役立たず！」

水袋は生徒会室を飛び出していった。

「……………何なのよ、もう」

雛流はあきれていた。

その後も水袋は色々やってみたが、全然いい情報はなかった。

「姫、何だか疲れた様子ですね」

隣には矢筈がいる。

「矢筈はそろうと思う？ 3つの水氷心」

「残念ながら無理ですよね……」

矢筈はそう答えた。

とても残念そうだった。

「そっか……」

「でも、戦わなきゃいけないんです。どんな状況でも、私が姫をお守りしますよ！」

矢筈は笑顔で言った。

その姿はなんだかたくましかった。

「そうだな……ありがとう矢筈！」

水氷の心も晴れた。

そうして、時は流れ、影月学園高等学校の卒業式が終わり、地獄との戦いが始まる……

十九・決着（後書き）

次話、地獄との戦い開始です！

二十・海極（前書き）

二十話達成だ〜！

今度は三十話！

早くたどり着けるよう頑張ります！
では、二十話どうぞ！

二十・海極

さあ！天国に行こう！と、はりきっているところ悪いが、その前にやらなきゃいけないことがある。

「それで、この地獄が天国に攻めてきて……」

「そこで和月が、和の水氷輪ってやつを発動させたんだな」
須永君お勉強中。

とりあえず、地獄がせめてくるまで時間があるので、天国の事知つとけや！というわけなのだ。

しかし、八千代よりは時間はかからなそうだ。

それで、大体を説明し終わったところで……

「天国行くぞ！」

水氷が号令をする。

「ちよつと待ってください！」

矢筈がそれを止めた。

皆勉強中。

何故かって？何か、まだ皆に説明していないことがあるから聞いてほしいと言ったからだ。

「では、説明しますね。まず、戦場ですが、天国ではありません。かといって、地獄でもないんですね」

「じゃあ、どこでやるの？」

雛流の頭には疑問符が出ている。

雛流だけでなく、その他全員だ。

「なあ矢筈。天国と地獄以外だったら、どこでやるんだよ。その2つ以外考えられないぞ」

「戦場は海極かいごくです」

海極とは、天国と地獄の間にある場所で、とても自然豊かな場所。しかし、住民はおらず、長い間されている天国と地獄の戦いは、大抵ここで行われる。海というくらいだから、水も多く、そのうえ陸地も多い、安定した場所なのだ。

「ま、それだけなんですけどね。後は……」

白い球を持って、須永の方を向いた。

そして、それを須永にスパークング！

もちろん、純白の翼が生えた。

「では、今度こそ！天国へ行くぞ！」

『おー！』

そして皆は天国へと向かった。

天国に着くと、王と元姫が出迎えてくれた。

「お帰り。水裳、矢筈、雛流、八千代……誰だこいつ？」

「酷い！」

王が言っているのは須永だ。一応初対面。

それを矢筈が説明する。

「王、こちらは笑の水氷心の須永竜輝さんです」

「どうも……」

「ああ、笑の。すまんね。私は天国の王だ。そしてこっちが……」

「前姫の氷川海梨ひょうかわかりです」

それを聞くと、皆（須永と八千代除き）は驚いた表情だった。

「どうしたの？水裳さん」

「元姫ってそんな名前だったんだ……」

言われてみれば、水袋たちは元姫の本名を知らなかった。

自己紹介も終えたところで、王が話し出す。

「では、今から海極へと向かう。そこからは戦場だ。決して気を緩めるな!」

『はい!』

皆、しっかりとした返事をする。

「では、出発じゃ!」

全員、翼を広げて、海極へと向かった……………

二十・海極（後書き）

今疑問に思っただんですが……

疑問といっても僕のせいなんですけど、何で須永だけ、ナレーショ
ンで苗字なんでしょうね？

……皆須永って読んでるからかな？

ま！いっか！須永の方が読みやすいし！

次話は、海極に着きます。

二十一・地獄護廷7（前書き）

早く更新できました！
どうぞ！

二十一・地獄護廷7

水袋たちは海極についた。

そこで見た景色は、一面の海が広がっていた。だが、ところどころに陸地がある。陸地は結構荒れ果てていて、何回も争いが起きたことをあらわしていた。

そして向こう側には……

「よお！天国！」

「久しぶりだね……」

あの時、水袋を襲った地獄の使者、黒沢風定、暗上雷紋くろさわふうじょう あんじょうらいもんがいた。今回はその他にもたくさん出揃っている。

「早速始めようじゃねえか。天国護廷7VS地獄護廷7の戦いを」

「地獄護廷7！？」

矢筈が驚いた表情で聞いた。

「ああ、そうだ。天国にあつたら、こっちにあつてもおかしくねえだろ？」

矢筈の表情は、驚きから凍りついた表情になった。

それもそのはず、地獄護廷7は、見た感じで7人全員揃っている。

そのうえ、大将も万全の様子。

それに対して天国護廷7は、あと3人足りておらず、水袋は水氷心の影響で、ハードに動けない。

「ごちゃごちゃうるせーな。さつさと……始めるぞ！」

風定が一気にこっちに突進してきた。

「黒暗定紋風雷斬！」

大きな波動を天国側に発動させた。相変わらず凄い威力で、あつという間に地形を変えてしまった。

「こつちだって負けてられません！雛流さん！」

「了解！」

「雷剣！」

矢筈は雛流のツインガンに雷を注入させ、雛流は地獄の集団に銃を向けた。

「レールガン電磁砲！」

地獄護廷7の人たちに向かって一直線にビームが発射される。だが、地獄護廷7の者たちは、あっさりとかわして、こちらに向かってきた。

地獄の者は皆、剣か双剣を装備している。

よって、誰もがどこからでも黒暗定紋風雷斬が撃てるわけだ。

「矢筈君……これって結構まずんじゃない？」

「ええ、かなり」

天国護廷7は、地獄護廷7の人数や黒暗定紋風雷斬のことも考えて、2手に分かれての戦いとなった。

電磁砲を撃てる、矢筈と雛流はもちろん一緒だ。

その相手は、力の黒暗心を持つ風定、笑の黒暗心を持つ小匙、体の黒暗心を持つ菅鬼、音の黒暗心を持つ由良だった。

4対2と、かなり不利だが……

「雛流さんは援護を頼みます。僕が接近戦を担当します」

「了解。しっかりと援護するわ」

「行きますよ！」

「うん！」

矢筈は地獄護廷7の4人に突っ込んで行った……

そしてもう1つは、水袋、八千代、須永の3人だ。

相手は、知の黒暗心を持つ雷紋、明の黒暗心を持つ明莉、暗の黒暗心を持つ冬菜だった。

こちらは3対3、互角に戦える。

「さあ、始めよっか。天国のお姫様」

「望むところだよ！」

こうして地獄との戦いが幕をあげた……

二十一・地獄護廷7（後書き）

次話、水袋たちの方です。

二十二・ 暗闇を打ち砕け！（前書き）

修学旅行から帰ってきたので、更新しました。
本格的に地獄戦が始まります。

二十二・ 暗闇を打ち砕け！

水袋は、和の水氷輪の型になった。

八千代もビー短を構え、須永もブーメランを持った。

それに対して、雷紋、明莉は剣を、冬菜は双剣を装備している。

「始めよつか。天国」

そう言つて、雷紋は大きく剣を上げた。

「黒暗定紋風雷斬！」

黒色の斬撃が飛んでくる。

水袋は、水氷扇を口にあて、前に出した。

「氷の舞！」

冷たい風が斬撃を凍らせていく。

水袋は、黒暗定紋風雷斬の対策が出来ている。

「須永君！」

「OK！」

「光剣！」

すぐさま、天国が反撃を開始する。

八千代のビー短が光だし、それを須永のブーメランに注入する。光が注入されたブーメランを須永が勢いよく投げる。そのブーメランを八千代が力強く叩いた。

「シャイニングブーメラン！」

光に包まれたブーメランが、地獄の者たちに向かって飛んでいく。

光は地獄の唯一といつてもいい弱点で、当たったら大ダメージは間違いない。

そのうえ、地獄の者たちは、シャイニングブーメランの眩しさに目が眩んでいる。

地獄側で大きな爆発が起こり、砂煙があがる。

「やったか！？」

砂煙がおさまると、苦しそうに倒れている姿があった。

「これは大ダメージなんじゃないのか？」

「多分ね。やるじゃん、須永、八千代」

「たまには役にたつでしょ〜？」

「本当のたまにな」

その場で八千代がしょんぼりする。

そんな中、水袋だけが異変に気づいた。

「2人とも！伏せる！」

「へ？」

「……遅い」

後ろには、暗の黒暗心を持つ冬菜が双剣を構えていた。

「黒暗定紋二刀流斬」

冬菜の双剣が、黒く大きな双剣に変わった。それで水袋たちを思いつきり斬りつけた。双剣の技も凄い威力だ。

水袋たちは、血を流し、その場に倒れた。

「何で……あいつは光の技が効かなかった……？」

水袋が地獄に聞く。確かに、地獄の生き物は光に弱いはず。シャイニングブーメランほどの光にはどう考えても耐えられないはずなのだが……

その質問に冬菜が答えた。

「……暗闇の方が強い」

「は？」

水袋には全く意味が分からなかった。

「悪いな、天国。ちゃんと俺が説明するよ」

雷紋が立ち、言った。

「確かに地獄の者は光に弱い。実際、俺も明莉も光は苦手だ。そして冬菜も。だが冬菜は暗の黒暗心。目にとてつもない暗闇を持っている。つまり、お前らの……シャイニングブーメランだったか？が、冬菜の暗闇を打ち砕けなかったんだな」

「つまり、あれ以上の光を出さなきゃいけないと……」

「そういう事だ」

それでも、勝ち目はある。2人には効くのだ。そして、どうやって冬菜を倒していくかが鍵になる。難しい戦いになりそうだ……

＊

矢筈は、4人に囲まれながら、戦うことになった。その遠くから、雛流がツインガンで援助する。

力の黒暗心を持つ、風定が矢筈に話しかける。

「まさか矢筈、1人で俺たちに近距離戦で勝つつもりか？」

「そうですね。難しいと思いますけど」

「難しいんじゃないえ……無理なんだよ！」

風定は剣を高く上げ、黒色の気を剣にまとわせた。

「黒暗定紋風雷斬！」

黒い斬撃が、矢筈に向かって飛んでくる。

それを矢筈は、綺麗にかわした。

だが、そのほかの3人、小匙、菅鬼、由良も剣を構えている。

『黒暗定紋風雷斬！』

全員が一斉に斬撃を発射する。矢筈にかわす余地はない。

「電磁砲！」

そんな斬撃を、雛流の電磁砲が打ち碎いた。

矢筈は事前に、雛流のツインガンに雷を注入させていたのだ。

「ありがとうございます！」

「1人で無理しちゃダメだよ」

雛流はニツと笑いながら言った。

「あの女厄介だな……」

風定はそう考えた。何しろ、常に出せるというわけではないが、電磁砲はあの黒暗定紋風雷斬の斬撃を打ち碎いてしまったからだ。結構威力はあるのだろう。

「おい！小匙、由良！あの女の相手をしろ！」

『了解！』

そう風定が言うと、小匙と由良は雛流の元へと行った。

近距離戦が出来ない雛流にとっては、かなりやりづらい状況となつてしまった。

「雛流さ……」

「よそ見していると危ないぜ！矢筈！」

後ろには、黒暗定紋風雷斬を構えた風定がいた。

「しまっ……」

矢筈のところで、大きな爆発が起こる。

砂煙がおさまると、血を流した矢筈が倒れていた。

「矢筈く……」

「よそ見してたら危ないのはあんたも一緒だよ！」

雛流の後ろでも、由良が黒暗定紋風雷斬を構えていた。

その斬撃を雛流にぶつける。

雛流も、血を流してその場に倒れた……

二十二・暗闇を打ち砕け！（後書き）

次話は矢筈たちのほうをがんばりたいと思います。

P・S・

前回の予告と変わってしまつて申し訳ございません。
水袋たちの戦いだけでは、少ないと思ったので……

二十三・守り通す約束（前書き）

予告とおりです。

二十二話でござい！

二十三・ 守り通す約束

黒暗定紋風雷斬をモロに食らった矢筈と雛流は、地面に倒れたまま立ち上がることが困難な状態になってしまった。絶体絶命の状況だ。「矢筈、やっぱりお前らに地獄に勝つのは無理だ。攻撃大国の地獄にはいつになっても勝てない」

風定がそう言った。それを聞いていた矢筈は、悔しそうな表情で歯をくいしばっていた。雛流も同様に歯をくいしばっていた。

「まだ……まだやれる……」

剣を支えにして、矢筈は立ち上がった。

「そこまでやる必要ないだろ矢筈。これ以上やったら……死んじゃうよ？」

「このまま倒れたままだと……姫が殺されます……僕が……姫を守るって……約束……しましたから」

そう言つて、矢筈は剣を構えた。足がとても震えている。立っているのがやつとの状態でも矢筈は戦おうとした。姫を守るために……

矢筈は、風定に向かって突進した。スピードは全然ない。

あっさりと剣で受け止められ、弾き飛ばされた。

それでも、また立ち上がって攻撃を続ける。

そして、また弾き飛ばされる。

それから、何回も矢筈は攻撃を続けた。だが、全て弾き飛ばされた。それでもまた立ち上がる。これを繰り返していた。小匙、菅鬼、由良は、退屈そうにそれを見ていた。王と海梨姫は、じっと見ていた。全く助けようとしなかった。あの時と同様、素直に矢筈の背中を見ていた。赤色に染まった背中を……

矢筈が戦っているのを見た雛流は、意地で立ち上がった。そしてツインガンで風定に向ける。

だが、由良がすぐに反応して、雛流の元へやってくる。

「今も風丸矢筈と同様だよ。このままやり続けても勝てない。やらなかったら死なないから、諦めた方がいい」

そう言われた後、雛流はニツと笑いながら言った。

「仲間が頑張ってるんだ…… 1人の人間を…… 守るためだけに……

1人より2人の方が…… 何もかも楽でしょ……？」

ツインガンを由良に向けて、発砲しようとした。しかし、力が入らず、引き金を引くことすら出来なかった。手のひらで全力で押しても……

「やっぱり無理なんだって。勝てるわけがない。武器も使えない人間は……」

その時、引き金が引かれた。雛流が引いたわけではない。矢筈が精一杯の力を振り絞って引いたのだ。

「雛流さん…… 勝ちましょう……」

「分かった…… この1発、無駄にしない」

「雷剣！」

雷をまとわせた剣を、ツインガンに注入する。その状態で、ツインガンを由良と風定の2人に向けた。

『電磁砲！』

一直線にビームが発射された。目の前の由良と、遠くにいる風定に向かつて……

由良の前では大きな砂煙が捲き起こった。風定は距離があつたため、あつさりとかわしてしまった。

「そんな…… 電磁砲が……」

由良は普通に立っていた。パツと見、傷はなかった。

「万全の状態だと、黒暗定紋風雷斬に匹敵する威力も、死にかけじやあんなものか」

由良がそう言った。

もう、勝てることは0%になった。電磁砲より強い技が、2人にはない。

「矢筈君……やっぱり諦めるしかないのかな？」

雛流が問いかける。

「諦めるのは……早いですよ？」

「へ？」

雛流は不思議そうな顔をした。

「あの技を……出すしかありません」

矢筈の目つきは鋭かった。何かを心して決めたように……

二十三・守り通す約束（後書き）

次話は水袋たちのほうです。

二十四・変わらない絆（前書き）

水袋たちの方です。
今回は短いです。

二十四・変わらない絆

光の技に弱い地獄の生き物。シャイニングブーメランは光の技なので、一見優勢に見えたが、暗の黒暗心を持つ冬菜が、暗闇で光を遮るという予想外の事態になってしまった。

水袋は、その対策を戦いながら考えていた。

考えをしない八千代と須永は、シャイニングブーメランを連発していた。

だが、あっさりと消されてしまう。

「どうすれば……」

水袋は、考えが出てこず、焦りが募るばかりだった。

その時……

「うっ！」

水袋がその場で倒れた。地獄に攻撃されたわけではない。

「水袋！」

「和月！」

八千代と須永がこっちに寄ってきた。

だが、後ろでは地獄護廷7の3人が武器を構えていた。

「来るな！2人とも！」

「もう遅いですよ……いきますよ！明莉、冬菜！」

「了解」

『黒暗定紋風雷斬！』

後ろから、黒い斬撃が飛んでくる。

背中を後ろに向けていて、気づくのに遅れた八千代と須永がモロに食らってしまった。

そして、2人ともその場で倒れてしまった。

「はあ、やはりこんなものですか」

雷紋がため息をつく。後ろの2人も、面倒くさそうな表情をしている。

雷紋が水袋の前行き、再び口を開く。

「しかし……姫はこんな時に役にたちませんね。いきなり倒れるなんて」

「くそっ……」

手を強く握ることすら出来なかった。おそらく、水氷心の影響が出たんだろう。久しぶりに激しく動いたから……視界がぼやける……貧血かな……体が動かない……

「地獄の姫と違って、天国の姫は役立たずですね」

その言葉が水袋の心に刺さった。私が足を引っ張っている。八千代と須永は強いのに……結局ここでも1りぼっちか……

「ふざけたこと言わないで……」

水袋の前方から声がした。

「水袋は大事な仲間なんだ……私の親友なんだ……役立たずなんかじゃない！」

八千代が珍しく大きな声を張り上げた。須永以外は皆びくりした表情だ。水袋もびくりしている。

「その通りだ八千代さん……水袋は大切な俺たちのお姫様だもんな！」

須永も立ち上がった。

水袋は、声も出さずに泣いていた。

そして、また八千代に救われた気がした。今回は須永にもだ……

「天国の者たちはバ力ですね」

それは否定しない。

でも……誰にもない優しさと思いやりがある！

「勝つよ、須永君」

「OK！八千代さん」

2人は武器を構えた。

「光剣！」

光が注入されたブーメランを勢いよく空に投げた。

そしてそれを、八千代が思いっきり叩く。

『シャイニングブーメラン！』

いつもより強く叩かれ、多くの光が注入されたシャイニングブーメランが地獄護廷7の3人に向かって飛んでいった……

二十四・変わらない絆（後書き）

次話、矢筈の新技炸裂！

二十五・雷ノ鳥群

矢筈は一大決心をした目をしていた。ある技を出すということだ。

「雛流さん、ちょっと下がっててもらえますか？」

「え？どうして……」

「今からやる技……コントロールできる自信がないからです」

矢筈の表情を見ていると、相当大的な技なのだろう。

雛流は、矢筈の言う事に従い、後ろへと下がった。

「何する気だ？矢筈の奴」

風定、そして他の3人も不思議そうな顔をしている。

「では……やりますか」

矢筈は剣を持ち、刃を下に向けた。そのまま地面に突き刺した。そして、柄の部分に黄色の魔法陣を描いた。それをし終わった後、矢筈がニツと笑った。

「風定さん。これが、力の水氷心の最大の技です！」

黄色の魔法陣から、無数の黄色い鳥たちが大空へと飛び立ち、ずっと雷を落とし続けている。

「これが、力の水氷心必殺技、『雷ノ鳥群』だ！」

上空に飛び交う鳥たちが、地獄の者たちに雷を落とし続ける。矢筈も、ずっと剣を握りながら、雷のパワーを注入している。

雷ノ鳥群は、鳥が一回雷を出すと、その鳥は消滅してしまう。よって、雷のパワーをずっと注入しないと、本当の雷ノ鳥群が出来ないのだ。そうになると、矢筈はものすごい体に負担がかかるのだ。それを覚悟した上で、雷ノ鳥群をすることを決心した。

矢筈は今も、雷のパワーを注入し続けている。

「応戦しろ！絶対死ぬなよ！」

地獄側も必死で応戦を試みる。剣で防いだり、黒暗定紋風雷斬で鳥たちを一掃したりしている。だが、鳥たちはずっと出続ける。次第

に、地獄の者たちも、体力勝負となつていった。もちろん矢筈も。

そんな背景を、雛流は遠くから見ていた。

「すごい……矢筈君……」

今まであまり見なかった矢筈の本気の姿に、雛流は驚いていた。そして、本当に1人で4人との近距離戦に勝てそうという状況だったから。

だが……何だかやばい気がしている。

もちろん、今は矢筈の方が優勢だ。あまりの鳥の多さに、地獄側も混乱している。それに、何度か雷を食らっている。

でも、何だか変な感じがする……

そんな気持ちを抱きながら、雛流は戦いを見ていた……

今も鳥を出し続ける矢筈。もう体力は限界を超えていた。

やっと、鳥を出すのをやめた矢筈は、その場で倒れた。本当に苦しそうな表情だった。

地獄側では、すさまじい砂煙が巻き起こっている。

2人とも勝ったと思った……だが！

「ふいゝ。アブねゝアブねゝ」

血を手で拭いた風定が、普通に立っていた。

そのほかの3人も、普通に立っている。

「あれはびっくりしたわ。だが、それも敵わなかったな」

「うそ……だろ……！？」

「終わりだ。天国護廷7、力の水氷心、知の水氷心」

4人が一斉に黒暗定紋風雷斬をした。

ボロボロの状態の2人は動けなかった。その場で大きな爆発が起こり、2人はモロに黒暗定紋風雷斬を食らってしまった。

砂煙がおさまった時に見えたのは、矢筈と雛流が倒れた姿だった……

.....

二十五・雷ノ鳥群（後書き）

次話、水袋たちに勝機は……？

二十六・光に打ち勝つ闇（前書き）

展開がクソ早くなってしまいました。

二十六・光に打ち勝つ闇

シャイニングブーメランは、地獄側に向かって一直線に飛んでいった。地獄の者たちは目が眩み、動けない状況にあった。冬菜でさえも目が眩んでいる。

「あの技……出せるか？冬菜」

「まかせてください」

そう言うと、冬菜が一步前に出た。

「ダークアイ！」

ダークアイという技を使った冬菜は、目の色が綺麗な青色から黒色に変わり、シャイニングブーメランの光を全然感じずに立ち尽くしていた。そして、双剣を構える。

「黒暗定紋二刀流剣」

黒暗定紋二刀流剣で、シャイニングブーメランをあつさりと撥ね返してしまった。

あのシャイニングブーメランに全ての光を注いだ八千代に、もう光のパワーはなく、その場で呆然と立っているだけだった。

「そんな……精一杯のシャイニングブーメランが効かないなんて……」

「どんだけ強いんだよ……」

八千代と須永は動揺を隠せなかった。もう自分達にはこれ以上のパワーは出せない。

地獄側の雷紋は、蟻^{あり}くらいの小さな剣を取り出し、2人が動けない

隙に、水袋に技を仕掛けた。

「黒麻酔剣^{くろますいけん}」

その小さな剣を、水袋に向かって投げた。水袋の肩に命中したものの、全然痛みは感じてなさそうだ。

「勝負に終止符を打とう。明莉、冬菜。やるぞ」

「了解！」

「了解です……」

3人は、剣を構え、一緒に剣を振り下ろした。

『黒暗定紋風雷斬!』

黒い斬撃が、水袋たちを襲った。大きな爆発が起こり、矢筈たちと同様、水袋たちの倒れた姿が見えた……

*

こうして、天国護廷7は誰一人動けるものがなくなった。よって地獄の者が勝利となった。

風定たちが頭を下げながら、地獄の王と姫に言った。

「終わりました。獄等王、地奈姫」

「ご苦労だったな。皆のもの」

そう言つて、獄等王は水袋に近寄った。

「ほう……これが水氷輪か……約束通りいただ……ん？」

獄等王は、強く水氷輪を引っ張った。

「抜けない……何故だ!？」

「水氷輪は、和月水袋を選んだからじゃ」

獄等王の質問に答えたのは、天国の王、天等王だった。

「どういうことだ?天等王」

「水氷輪にも心というものがあつての。本当に認めた奴にしか見せない現象じゃな」

王はスクッと立ち上がり、地獄護廷7の方に戻った。

「……ということは、どんなことがあつても抜けないと?」

「そういうことじゃ。諦めたらどうじゃ?」

そう聞くと、獄等王は高らかに笑い出した。

「天国はおもしろいものを発明したな。だが、陽月火袋にも起こつたであろう現象なら……死んだら水氷輪は外れるじやろ?」

「まさか……!？」

「今から、天国の現姫、和月水裳を殺して、水氷輪をわしの物にする！」

それが地獄側の判断だった……

二十六・光に打ち勝つ闇（後書き）

次話、地獄が出した決断の末……

水袋は殺されてしまうのか……！？

感想・評価をください。

二十七・最後の姿（前書き）

うわわわわわ

勢いで書きちゃいました。

二十七・最後の姿

獄等王は水袋を殺して、水氷輪を奪い取るという決断をした。

王や海梨姫はもちろん、天国護廷7の皆も驚いていた。だが、体が動かず戦えない天国護廷7の皆は、どうすることも出来なかった。

「地獄護廷7、地奈姫。あの技で殺すぞ。これくらいじゃないと死なないだろう」

王はニツと笑いながらこつちを振り向いた。

天等王は、鋭い目つきで獄等王を見ていた。天等王には、どんな技が分かっているのだろうか。

「さあ！皆のもの！この剣に全ての力を注ぎ込め！」

王は黒い剣を前に突き出す。他の地獄の者は、その剣に全てのパワーを注ぎ込む。

天等王が質問した。

「本当にあの技をする気か？」

「そのつもりだが？」

天等王の目つきは更に鋭くなった。

「海梨姫！皆のものを連れて天国へ帰るぞ！このままじゃ……わしらも死ぬ！」

「はい！分かりました！」

急いで帰ろうとするものの、2人で5人を抱えるというのは、かなり時間がかかり、間に合わない状況になってしまった。

「間に合わない！」

「どうするんですか！？王！」

「どうすることも……」

天等王も頭を抱え、諦めた表情になった。

そんな時、海梨姫に抱えられていた水袋が自力で立ち上がり、みんな

なの前に出た。

「王……海梨姫……皆を下ろしてください……」

言われた通りに、皆を下ろした。

その衝撃で、皆が目を見ました。

その後に、水袋は大きく腕を開いて、皆をかばうような姿勢になった。

「まさか……水袋！やめるのじゃ！」

「水袋！」

天等王と海梨姫も、水袋の信じられない行動に、動揺を隠し切れない様子だ。

「私のせいで……八千代や須永も、あんな大ダメージを食らったんだ……私の家に地獄が攻めてきた時も、私が弱いせいで矢筈が大怪我を負うことになったんだ。色んなところで……私が足を引っ張っているんだよ」

「そんなこと……」

「そうだから……最後くらい……役に立ちたい」
覚悟をし尽くした表情だった。皆を守ると……

地獄側が、準備が出来たようで、獄等王はとても笑顔だ。

「さあ、天国の姫53代は、早くも終了だ」

黒い剣を水袋に向けた。

「ほほう。最後くらいは役に立とうと、皆を守るか……悪くない決断だな」

黒い剣を引き、一気に突き出した。

『地獄バースター！』

黒い剣の形をした剣先が、水袋に向かって突き進んでいった。

そして、水袋に突き刺さった。

皆が見た光景は、水袋が大量の血を流して、倒れた姿だった……

二十七・最後の姿（後書き）

地獄バースターがよく分からない方は、

<http://www.youtube.com/watch?v>

[UAo7iMInyaM](#)

これの黒色ver. と思ってくれたらいいです。

次話、どうなる水袋！？

二十八・ 姫の勇姿

みんなの目の前に広がった信じられない光景。血だらけになりながら、皆をかばった水裳の姿。綺麗な和服が、腹部だけ赤色に染まっていた。獄等王たちの前で、無残に倒れる水裳。あんな大技を食らったのだ。もう呼吸は困難に達しない。

しかし、その水裳には異変があった。水氷輪をつけていない。地獄が持っているわけじゃない。それに、和の水氷輪の型でもなく、色々違う箇所があった。

いち早くその異変に気づき、全てを理解したのは矢筈だった。

「まさか……」

矢筈は、王に頼んで、倒れている水裳の元へと運んでもらった。

「やつぱりか……」

矢筈の表情は、変わらず暗かった。

そのことを、矢筈は皆に伝えた。

「地獄バースターをくらったのは……海梨姫です……」

何と皆をかばったのは海梨姫だという。その証拠に、海梨姫の隣には、水裳がいる。

そのことを知らされた水裳は、すぐに海梨姫の所に駆け寄り、手前に出し、海梨姫は青いベールで包まれ、水裳は必死で回復させようとした。

「ん……全部の力使い切っちゃったし……ここで退くか」

地獄の者たちは、地獄バースターで全てのエネルギーを使い果たし、もう水裳を殺す方法がなくなってしまったため、海極にいる意味もないと判断した。

「じゃあな、天国。今度は絶対水氷輪を手に入れる」

「1年後じゃ！」

そう言ったのは天等王だった。

「1年後に、海極で戦いを申し込む。そこで、長きにわたる戦争を終わらせる！」

獄等王は、それを聞いてニツと笑った。

「楽しみにしてるぞ」

そう言つて、地獄の者たちは帰って行った。

*

海梨姫の状態は、相変わらずで、もうすぐ死が迫ろうとしていた。それでも水裳は回復を続ける。

まさかの事態に、雛流、八千代、須永はどうすることも出来なかった。ただ、呆然と立ち尽くしているだけだった。

矢筈はずつと海梨姫の状態を見ている。

ただ立っているのもダメだと思つた雛流は、天等王に質問を投げかけた。

「王……何故1年後に戦いを申し込んだんですか？それまでに天国護廷7が集まるとは言い切れませんし……」

疑問の内容は天等王が、何故1年後に地獄に戦いを申し込んだかだ。雛流の言うとおり、1年間に天国護廷7が集まるとは言い切れない。

「それはじゃな……お前らが卒業の時に、何も考えずに卒業してほしいからじゃ」

「え？」

「お前らが、地獄の事で考えながら卒業してほしくない。清々しい気持ちで卒業してほしい。ただそれだけじゃ。地獄との戦いならば、いつでも日付を変更できる。申請したのはこつちじゃからな」

その考えには、天等王の思いやりが入っていた。そして作戦も含めての言葉だった。

「それより……姫の状態はどうじゃ？水裳」

「……目を開けません。もう……無理なんじゃ……」

「水……裳……ちゃ……」

その声に皆が驚いた。この声は海梨姫の声だ。

「話したいことが……あるの……」

苦しそうに、海梨姫が言った。

その言葉を聞いて、天等王は背を向け、天国に帰ろうとした。

「水裳以外、天国に帰るぞ。わしたちはお邪魔だ」

その王の言葉に、皆は驚いた。矢筈は怒りを王にぶつけた。

「何言ってるんですか！？ずっと海梨姫の側にいてあげましょうよ！あなたそれでも王なんですか！？」

「王だ。だからこそ帰る。さっさと言う事を聞け。王の命令だ」

そう言われると、矢筈も抵抗できず、他の3人も王についていった。

海梨姫に背を向けながら、天等王は言った。

「海梨。これが、お前への最後の言葉になるかもしれないが、お前の姫としての行動は……絶対に無駄にはしない」

「王……」

「ありがとう。しっかりと水裳と話し合え」

「こっちこそ……ありがとうございました……王……」

「そして水裳、苦しいかもしれないが、話し合った後、海梨をおぶって天国まで帰ってきてくれ」

「分かりました」

そういい残して、王と4人は天国へと帰っていった。

天等王は、大粒の涙を流していた……

*

王たちが天国へと帰っていた後、苦しそうに水裳に語りかけた。
「水裳ちゃん……これが……最後のお話よ」

「……はい」

「私がかばったのは、あなたが死ぬ前にこの話をしたかったから……」

「……」

「まず、私が右手の中指にはめている指輪を……水袋ちゃんも同様に……右手の……中……指に……」

海梨姫の話し方が、だんだん苦しそうになってきた。水袋は言われた通り、指輪を右手の中指にはめた。

「それは、水氷の指輪……^{すいひょう}……^{ゆびわ}……姫が……認めた……次の姫に……渡すもの……」

「っていうことは……私を……？」

「ええ……天国を……よろしくね……」

「海梨姫……」

「あなたなら……地獄を……倒せるから……」

「……」

「じゃあね……水袋……ちゃん……ありがとう……」

そう言って、海梨姫は静かに目を閉じた。

水袋は大粒の涙を流した。

その後、水袋は海梨姫を背負って、天国へと帰って行った……

二十八・姫の勇姿（後書き）

感想・評価等お願いします。

次話は、色々話し合いです。

二十九・水氷心大作戦！

天国へと帰って来た水氷は、皆に全てを話した。海梨姫の死、かばった思い、水氷の指輪のこと、とにかく全てを……

海梨姫の死体を、王が背負い、どこかに連れて行った。どこかは分からないが、お墓だろうなと水氷は思った。

そのまま、皆はその日を終えた……

＊

翌日、春休みに入っている水氷たちは、1日中天国にいることもでき、楽に過ごしていた。そんな中、水氷、雛流、八千代、須永の4人は、矢筈に呼ばれたため、テラスにいた。呼んだ本人が1番来るのが遅いという定番のものになっていた。

「遅いな……矢筈」

水氷が腕時計を見る。約束の時間はもうとくに過ぎている。

そんな時、やっと矢筈がやってきた。たくさん資料を持っていたので、それを探すのに手間取ったのだろう。

「すいません皆さん。なかなか探してた資料が見つからなくて……」

「いいって。でさ、話って何？」

水氷が早速本題を聞く。ここに呼んだ理由を矢筈に聞いた。

「今日、皆さんには話そうと思っていることがあるんです。その内容は、残っている『音』『体』『暗』の水氷心の特徴についてです」

「なるほどな……」

「新学期が始まってくると、なかなか一緒にいられる時間がないと思いますので、特徴に当てはまる人を見つけたら、他の皆に報告を。というわけです」

新学期からが、水氷心スカウトの本格的な始動となるだろう。3月は、須永で手一杯だったが、ここからは1年という期間がある。色

んなイベントを考えると、かなりやりやすい方向にはいけるだろう。
「で、特徴は何なの？」

雛流が矢筈に問いかける。

「まず、音の水氷心ですが……絶対音感の持ち主で、リズム感がとてもある。体の水氷心は、運動神経がとてもよく、リーダーシップがある人。暗の水氷心は、ずっと静かでクール。本当に一人ぼっちで、表情に出ることは滅多にないが、どこかで助けを求めている人……以上です」

それを聞いた途端、雛流がひらめいた表情を浮かべた。

「音の水氷心は……吹奏楽部や軽音楽部、ジャズ系とかがあるから、幅広く見ることが出来るわ」

雛流の考えは、音の水氷心は、まず、音楽系の部活を見ていくのがいいと判断したのだ。普段から音に触れている人なら、絶対音感を持っている人もいるかもしれない。

影月高校は、部活動がとても盛んで、たくさんの部活動がある。

体の水氷心もそう考えると、少しはやりやすい……だが。

「暗の水氷心……これがどうにも……」

矢筈が困った表情を浮かべる。

ずっと静かな人はもちろんたくさんいる。だが、それでも1・2人は友達がいて、ちゃんとした話し相手がいる人が多い。助けを求めたりする人がいるのだろうか。

これまで考えて、音、体はイベント的にはやりやすそうだ。あとは、暗をどうするか……

「まあ、まだ時間はあるんだし、ゆっくり考えよう」

水袋がそう仕切り、水氷心の話は終わった。

しかし、矢筈は新たな資料を取り出した。

「姫。これも見てもらいたいんです」

「何の資料だこれは？」

「水氷の指輪についての本でして……」

矢筈が取り出したのは、水氷の指輪についての本だった。

「これに詳しく書いてあるそうです」

「そっか。借りていいか？」

「ええ、もちろん」

「ありがとう」

そっつい、水氷は本を受け取った。

その夜、水氷の部屋……

水氷はしっかりと水氷の指輪についての本を読んでいた。

（ここに、強くなる秘訣が載っているかもしれない……）

そう思いながら……

二十九・水氷心大作戦！（後書き）

次話、いよいよ三十話だ！

……結構早くたどりついたな……

次話、ちよつと急展開の予定です。

三十・矢筈の反抗（前書き）

三十話達成だ〜！

これからもv a zは頑張りますので、よければこれからも読んでください！

（最終話ではありません）

では、三十話どうぞ！

三十・矢筈の反抗

次の朝、皆は地上で春休みを満喫したりしているが、水袋だけは天国ですつと何かの練習をしていた。そんな水袋の姿を矢筈と王は不思議そうに見ていた。

「姫は何をしているんでしょうね？」

「さつきからずっと水氷扇を上になげてるの」

水袋はさつきからずっと水氷扇を上になげている。

それは、昨日の夜……

水袋は、水氷の指輪についての本をずっと読んでいた。でもパラパラ読みで、何かを探しているようだった。

「あつた！ こういうのが見たかつたんだよ！」

その内容は、氷の旋風陣。氷の風が、自分を包み込み、防御に使えるし、使い方によっては攻撃にも使える。そういった技だった。

で、それを今ずっと練習してるのだが……

「なかなか出来ないな……」

水氷の指輪の本の通りにやっているはずなのだが、なかなか出来ない。

やり方かというと、水氷の指輪を身につけている右手で水氷扇を持ち、高く上に上げたら、足元から冷たい風が発生するのというものだった。簡単そうで、楽にできると思っていたが、なかなか足元から冷たい風が発生しない。

そんな時、矢筈がやってきた。

「姫、そろそろ休憩しませんか？」

「ダメだ……もっと強くならなきゃ……」

「……そうですか」

水袋の返事を聞いて、矢筈はテラスに戻っていった。

一方、雛流は、生徒会室で生徒名簿を見ていた。

何故かというと、水氷心スカウトに向けて、生徒の事をよく知っておこうというためだ。これは、水氷心のためにもなるし、生徒会長としても大切なことなので、都合のいい作業なのだ。

雛流は、主に、文化クラブの音楽系を中心に見ていった。

雛流の考えでは、吹奏楽部、軽音楽部、ジャズ系の3つの部活が、絶対音感とリズム感に優れている人が多いだろう。そういう考えだ。
「……で、さつきから雛流ちゃんは何してるの？」

「へー？」

そう声をかけたのは、副会長の沢田翔子。さわだしゆうこ

「何かニヤニヤしながら生徒名簿見てるね……まさか恋？」

そう言ったのは書記の天海修也。あまみしゆうや はつきり言って2人ともドSだ。

「ね？ 誰が好きなの？」

そう言って、修也が迫ってくる。

「そんなんじゃない……」

「じゃあ、どんななの！？」

どんどん迫ってくる修也。ドSにとっては、楽しい展開なんだろう。

「ほら！ 生徒会長として、生徒の事は知っておかなきゃダメですよ？」

その返事を聞いた修也は、あっさりと引き返した。……だが！

「でもさ、雛流って生徒の名前全員知ってるよね？」

今度は翔子が迫ってきた。それと同時に、修也も迫ってきた。目がこの上ないほど輝いている。何て綺麗な目をしているんだ！ 出来れば違うときに見たかった！

「……帰る」

そう言って、雛流は猛ダッシュで生徒会室を出て行った。こう思

いながら……

（あいつらいつか殺す）

*

八千代は家でゲームをしていた。須永も家でゲームをしていた。どうやら2人はWII-FI通信で遊んでいるようだ。

「おおー！ 須永君強いね」

「八千代さんのスモークもやるじゃないか！」

どうやら2人は大乱闘 スマッシュスターズXをやっているようだ。

他の3人と違って、思いっきり春休みをエンジョイしていた……

*

水袋は、まだ練習をしていた。かれこれ5時間くらいやっている。その上、昨夜は、水氷の指輪の本を読んでいたため、2時間しか寝ていない。朝ごはんも食べていないのだ。

その時、また矢筈がやってきた。

「姫、そろそろ休まないと体が持ちませんよ？」

「ダメだ……強くななきゃいけないんだから……」

「……どうしてそんなに強さにこだわるんですか？」

「私が弱いせいで……矢筈や八千代、須永が大怪我をしてしまったんだ。海梨姫だって、私があんな行動をしたせいで死んじゃったんだろ？ それでも海梨姫は、私を姫と認めてくれた。だから、姫として強くななきゃいけないんだ……」

「……姫は必ずしも強くなきゃダメですか？」

「当たり前だろ！ 火袋姫、海梨姫、誰もが強かった。だから私ももっと強くななきゃいけないんだよ！」

「それは間違いです！」

「間違いなんかじゃない！」

「姫の本当の姿は……」

「矢筈だって、本当は私が邪魔だろ！？ お前のためでもあるんだよ！」

その時、矢筈が思いっきり水袋のほっぺを叩いた。その反動で、水袋は後ろに倒れてしまった。

矢筈は……唇をかみ締めながら、テラスに戻っていった……

三十・矢筈の反抗（後書き）

おお……急展開……
次話も頑張ります！

三十一・ 姫の役割と氷の旋風陣（前書き）

遅れてすいません。

その分とってはあれですが、いつもより少し長いです。

三十一・ 姫の役割と氷の旋風陣

矢筈に叩かれた水袋は、ひとまずその日は部屋に戻り、ご飯を食べて休むことにした。

矢筈に叩かれて初めて思う。

『姫の役割って何だろう？』

水袋は強い人であること。そう思っていた。でも、矢筈が姫に手を出すくらいだから……やっぱり何か間違ってるのか……

海梨姫と比較してみる。彼女は、明るく笑う人だった。精神的にも強い。

（やっぱり……強さなのかな……？）

考え事していると、突然眠たくなり、水袋はしっかりと寝た……

*

翌日、水袋は一旦地上へと帰った。あんな状況で矢筈とのギスギスした空気が嫌だったからだ。

久しぶりに家に帰った。何にも変わってないので、ちょっと安心した。

「ただいま」

そう言っただけで家に入ったものの、誰もいない。

水袋は今は1人暮らしだ。親は都合で長い間、他県で暮らしている。引越したという話も出たが、人見知りの激しい私は、1人でこの地域に残った。妹の袋希みきも、親について行っている。

ベッドに寝転んでみても、考えることは同じだ。姫の役割は何なんだ？ 強さしか思いつかない水袋は、何が間違ってるんだと、矢

箒への怒りを表す。

「こんなときは……」

水袋は、ベランダから屋根に登り、平らになっている部分で三角座りをした。昔から、悩みや悲しいことがあるときは、ここでリラックスするのだ。

「水袋、何か悩んでるの？」

隣の家の八千代が声をかけてきた。八千代も昔から悩みがあるときは、自分の家の屋根に登る。そして、悩んでいる方に、悩んでない方が相談に乗る。それが昔からやってきた八千代との1つのコミュニケーションだ。

「ん……まあ、ちょっとね……」

八千代が、水袋の横に座った。

*

そのころ天国では、テラスで矢箒がうつむいていた。

そこに、王が来た。

「後悔しておるのか？ 水袋を殴ったことを」

「ええ……側近が、姫を殴るという行為をとってしまった。恥ずべき行動です」

「わしは、殴って正解じゃと思うが？」

「え？」

予想外の返答に、矢箒は驚いた。王は理由を話した。

「お前が殴ったことによつて、姫の役割が理解できるじゃろう」

「……だといいんですけど……」

矢箒は、顔を上げ、空を見ていた……

*

雛流は、生徒会室から飛び出した後、図書室に行つて、最近のチ

ラシなどを見ていた。

「これ……いいんじゃないかな？」

雛流が見ていたチラシは、日向祭りというものだ。雛流たちが住んでいる町は、日向市という。そこで毎年4月に行われる、日向祭りに、影月学園吹奏楽部が出演するのだ。そこで、リズム感と絶対音感を見抜けば……

「そのためには……翔子にお願いするか」

実は翔子は吹奏楽部のフルートを担当している。怪しまれないように、楽譜を貰おう！ という事で、雛流は、生徒会室へ行った。

＊

水袋は、八千代に悩み事を話した。

「姫の役割か……」

「私はずっと強さだと思ってた。今もだけど……それで、強さだけを求めているなら、矢筈に殴られてしまつて……」

「矢筈君が！？」

信じられない表情だった。矢筈が、しかも大事な姫に手を出すとは思えないだろう。

「だから……違うんじゃないのかなって思ったんだね？」

「そうだけど……強さ以外に何があるんだよ！ 海梨姫だって、とっても強かつたじゃないか！」

水袋は屋根を叩いた。ドンと振動が八千代に伝わる。

それに対して、八千代はニッコリ笑いながら答えた。

「確かに、海梨姫は強かつた。でも、戦いでは、悪いけどそれ程でもなかつたよ？」

「……」

「海梨姫の強さって、精神的なものじゃなかったのかな？」

水袋は、少し理解したような表情を浮かべた。

「何だか分からないけど……水袋が近くにいと、凄く力が湧いて

くるんだよね。……姫って、そういうことじゃないのかな？ 何に
もしなくても、誰にでも、力と笑顔を与えてくれる。そういう存在
なんだよ」

水裳は、スクッと立ち上がり、自分の部屋に戻ろうとした。

「ったく……八千代！ その国語力を勉強に活かせるよ！」

そう言っ、自分の部屋に戻って行っ。

話の途中に自分の部屋に帰るときは、悩みが解決した。そういう
合図だ。

八千代もにこつと笑いながら、自分の家に帰っていった。

……なんだかんだで、また八千代に救われた……

*

翌日、天国に行ったとき、すぐに矢筈をテラスに呼び出した。

「あの……姫……」

「ごめん！」

矢筈が謝る前に、水裳が謝った。

「それと……ありがとう。お前のおかげで、姫の役割に気づけた」

「こちらこそ……すいませんでした」

その後、ニコツと笑いながら、矢筈が言っ。

「やってみてください。氷の旋風陣」

「役割は気づけたけど……出来ないぞ？」

「絶対出来ますよ。命を賭けてもいいです」

何なんだこの自信は？ しゅしゅ一昨日練習していたところに行
った。

「じゃあ、やってみるぞ！」

「頑張って下さい！」

右手の中指に氷氷の指輪をはめ、右手で氷氷扇を持つ。そして、

右手を高らかに上げた。すると、水氷の指輪と水氷輪が光り出し、足元から冷たい風の竜巻が、水裳を包み込んだ。

「出来た……」

「水氷の指輪は、姫と認められた者がはめるものです。姫の役割をしつかり理解してたら、水氷の指輪も反応して、力をくれるんです」

「強さを求めてたのが……ダメだったのか……」

何がともあれ、氷の旋風陣は完成した！

「水裳、ちよつといいか？」

そこに、王がやってきた。

「お前に会わせたい人がいるんじゃない」

「会わせたい人？」

王がついてこいと、人差し指をクイッククイックとした。水裳は無言でついていった。

三十一・ 姫の役割と氷の旋風陣（後書き）

次話、王が会わせたい人と会います！

感想、評価をお願いします。

三十二・魂の墓

天等王が連れてきたところは、水裳たちが暮らしている部屋、テラスの更に奥だ。

「ここだ」

「王……会わせたい人って……？」

「出て来い……火裳」

「え!？」

天等王は、確かに火裳と言った。火裳は、第16代の天国の姫だ。史上最高の姫だったと言われている。その姫は……確かに亡くなっているはずだ。

「お! 久しぶりだね王。……で、そっちのちんちくりんは？」

混乱するし腹立つし、ロクなことないな。

「こいつは、現姫の和月水裳じゃ」

「お、お姫様だったか。失礼したな。私は陽月火裳だ。第16代の姫だぞ! 先輩だからな!」

こいつの自己紹介など、今はどうでもいい。

「王! 何で彼女が生きてるんですか!？」

「死んでるけど……ここは魂^{たましい}の墓^{はか}と言ってな」

魂の墓……それは、第16代の知の水氷座（ちなみに、知の水氷座とは、知の水氷心を持つものがついている役職であり、今で言う^{よるもちるばな}と、雛流）の夜望流花が発明したもので、昔の姫全ての魂が納められている。他の水氷心の魂の墓もある。

「……というか、いつでも話せるんだったら、死んでもあまり意味ないんじゃない」

水裳がそういう疑問を抱く。それに対しては、火裳が答えた。

「残念じゃが……魂の墓で会話するのは、死んでから5回のみじゃ。他のやつらは、2回だけだな。ちなみに私はこれで4回目じゃ」

じゃあ、これを省いたら、あと1回しか会話できない。

そこで、水裳があることにひらめいた。

「じゃあさ！ 海梨姫とも話せるんじゃない……」

「残念じゃが、魂の墓に来るには、死んでから1ヶ月経たなきゃ無理なんじゃない」

何か色々都合が悪い墓だな……そう思う水裳だった。

その後、天等王は、用事で席を外し、今は、水裳と火裳だけだ。

「おい後輩。天国護廷7は完成したか？」

「いえ、まだ……」

「やつぱりの……これを完成させるのは相当困難じゃからな。特に、暗の水氷心はな」

火裳の口からは、暗の水氷心が困難と出た。物静かでクール。本当の1人ぼっちだが、どこかで助けを求めている人。高校には全然いないタイプだ。

「どの姫も、これでつまづいているからの」

伝説となっている火裳は、困難の暗の水氷心を持つ者を見つけ出せれたんだろう。

「火裳姫……ちなみに16代の暗の水氷心の人って、どこで知り合っただんですか？」

「ははは！ これを言ってしまったたらおもしろくないじゃろう！

探すのも楽しさの1つじゃ！ おっと、そろそろ時間じゃな。頑張れよ！」

そう言っつて、火裳は消えてしまった。最初から最後まで適当な姫だな……だが、姫の役割は、最高に果たせていると思える。少し憧れた。

水氷心を持つ者を水氷座につかせるために、水裳は気を引き締めなおした。

そして、地上に帰っていった……

＊

水袋は、矢筈と共に家に帰ってきた。

「明日から新学期ですね。」

「そうだな。」

新たな生活が幕を開ける。地獄との戦いに向けて準備が始まる。

今年の新学期は、今までの新学期とは違った緊張感がある。

「積極的に水氷心を持つ人スカウトだな！」

「ええ！ 頑張りましょう！」

それは、水袋、矢筈、雛流、八千代、須永、全ての人が同じ気持ちだ。

明日は、始業式だ！

三十二・魂の墓（後書き）

次話、新学期です！

久しぶりにほのぼの入れていききたいと思ってます。

三十三・新学期（前書き）

遅れて申し訳ございませんでした。

三十三・新学期

桜が満開の春……今年も新学期を迎えた。

……え？ その前に入学式はどうしたって？ はははっ、去年の卒業式と一緒に理由さ。

……え？ 新入生で新キャラ作らないのだった？ はははっ、後輩作ったら、色々やりにくいだろう？

そんなこんなで、今は始業式だ。この後は運命のクラス発表。

「では、3年生は下駄箱付近に記載していますので、そこでクラスをチェックし、各教室に向かうように」

司会の教頭が言った。頭が輝いている。

そんなこんなで3年生は下駄箱付近に集まった。やったー！ と叫ぶ奴がいたり、仲良しの子と離れて悲しんでいたりと、色々な表情を浮かべた生徒がたくさんいる。

水袋も、やっと1番前まで来れて、自分のクラスを確認する。どうせ1番最後なので、後ろのほうしか見ない。

「私は……E組か……」

水袋は、3-Eだった。かなり前には、雛流の名前もあった。それに八千代、矢筈、須永も一緒のクラスで、都合のいいクラスになった。

……え？ いくらなんでも都合良すぎるだろだった？ はははっ、『この作品はフィクションです。実在の人物・団体・事件などには、いっさい関係ありません』……だから別にいいんだ。

新しい教室に入り、担任の先生が挨拶をする。

担任は鈴木先生。ミスター・チョークと呼ばれている男だ。何か序盤に出てたチョークを投げる教師。あいつだ。ちなみにチョークを投げる速さは時速160kmだそうだ。ピッチャーになれば良か

ったのに……

水袋は1番後ろの窓側なので、いつも新学期には外を見ている。これは小学校の時からだ。すっかり咲いてすっかり散ってゆく桜を見るのが大好……

「和月！ 話を聞け！」

でこが痛い。チョークが直撃した。……ダジャレのつもりはない。……しかも赤色なので余計に目立つ。

まあ、この桜は、私たちの始まりを告げているのか……終わりを告げているのか……それは私たち次第だ。水氷心を持つ者を探し出し、万全の状態で地獄に挑む。そのための努力は……これからの生活にかかってくる。

そんな考えに気づいたのか、雛流、矢筈、八千代、須永がこつちを見て笑っている。どうやら皆は、この桜を始まりだと感じて……

「朝希！ 風丸！ 如月！ 須永！ 前を向け！」

片手で4本のチョークを投げた。あれはあれでテクニクが必要だ。全員に命中し、まじめな雛流はその場でぐったりとした。八千代は受け慣れているのか、全然平気な表情だ。

しかし……とことん空気読めない教師だな。和の水氷輪初まって以来、初めていい事言いそうだったのに……

こうして大波乱のチョーク戦争は終了し、水袋たちは雛流に呼び出されて生徒会室に向かった。

*

『日向祭り？』

全員が声を揃えて聞く。

日向祭りとは、日向市で行われる祭りで、毎年4月にあるのだ。水袋も毎年八千代と一緒にに行っているが、八千代がたこ焼きしか食べないためあまりいい思い出がない。

「そこでやる吹奏楽部の舞台で音の水氷心を集めようというわけで

すか」

「そういうわけ！ 副会長の翔子から全楽器の楽譜もらったから大
体分かるわよ。ちなみにこれを要求したら凄く変な目で見られたわ」
（（（離流……そこまでしてくれたのか……自分の身を捨てて…
…）））

同情したのか、皆が離流の頭の上にポンと手を乗せる。

そういうわけで、明日の土曜日に日向祭りに行くことにした。

三十三・新学期（後書き）

いつも和の水氷輪を読んでいただきありがとうございます。
ここで少し報告があります。

僕は一応学生でして、もうすぐ期末テストがあります。
なので、テストが終わるまで執筆をお休みします。

テスト終了後にはいっぱい書きますので。

ご理解をお願いします。

三十四・日向祭り（前書き）

遅れてすいませんでした。

前回の後書きどおり、テストがあつたので遅れました。
では、三十四話どうぞ！

三十四・日向祭り

一向は日向祭りにやってきた。屋台がいっぱいあって、今舞台では歌舞伎みたいなのをやっている。今年も大盛況の日向祭りだ。

ちなみに水袋と八千代はたこ焼きを買いに行った。（水袋は付き添い）

というわけでその他の3人が舞台を見ている。

影月吹奏楽部の出番は結構後のほうなので、今はお祭りを楽しんでいた。

*

「水袋！ 次はスーパースクールすくい！」

「はいはい」

その中でも八千代は1番エンジョイしている。たこ焼きを右手に持ち、左手にりんご飴だ。こいつは本当の目的を知っているのだからかと不安になる水袋。

八千代は今、スーパースクールすくいを楽しんでいる。救うやつをずっと水につけている。あいつはすくうの意味を知っているのだからかと不安になる水袋。

結局1個も取れずに終わってしまった。

「ひゃゝ、難しいね」

「あんなの簡単だろ」

「じゃあやってみなよ！」

何かキレられたので、とりあえずやることにした。

水袋は八千代と違ってポンポンとスーパースクールをすくった。入れ物からあふれ出しているにもかかわらず、まだ破けてない。

水袋はたくさんのスーパースクールを手に入れた。

＊

水袋たちが舞台の方に行くと、みんながご飯を食べながら待って行った。ちなみに雛流は『広島焼き』を食べている。（どうでもいい情報）

今は夕方の6時くらいだ。あと15分程度で演奏が始まる。

「そついやさ雛流。特に凄い人とか聞かなかったのか？」

「もちろん聞いたわよ。えっと……翔子によると、氷川奏さんが凄いらしいわよ。フルート担当でミスしたところみたとこないとか……」

それはとても凄いことだ。今のままだったら音の水氷心にぴったりあてはまる。絶対音感で抜群のリズム感の持ち主。

『続いては影月学園吹奏楽部の皆さんです。よろしくお願いします』司会がそついい、吹奏楽部が出てくる。ラッキーなことに奏が目の前だった。

演奏を始める。しばらくしてからフルートのソロがあった。もちろん吹いているのは奏だ。先生の指揮から全くずれずに、綺麗な音色が出ている。

「凄く綺麗な音ですね」

矢筈が目キラキラさせながら聴いている。

これはもう間違いない音楽のセンスだ。絶対音感を持ち、抜群のリズム感。

「矢筈。これは決まりだな」

「ですね」

水袋たちのなかで、勝手に決めた。

「じゃあ、この後早速スカウト……」

その時、横の方で大きな音がした。水袋たちはそこを見ると、1人の女性がいた。

「……天国護廷7の音の水氷心」

そつ言った後、その女性は舞台を破壊した。

「矢筈……まさか……」

「ええ、おそらく……地獄の者ですね」

急展開！ 地獄からの使いに勝てるか！？

三十四・日向祭り（後書き）

次話、戦います！

三十五・音の水氷心

突如現れた地獄の使いの女性。何故かは分からないがとりあえず敵なのだ。水袋たちは戦闘態勢になり、矢筈、八千代は思いつきり女性に向かって走って行った。

すると、その女性が口を開けた。舌には少し穴が開いていて、そこから音を出した。

「な……」

「何？ この音」

矢筈と八千代も戸惑った様子だ。

しばらくすると、矢筈と八千代の真下の地面が揺れ始めた。その後、爆発が起きた。

瞬間的にそれを感じた矢筈は、八千代を抱えてかわした。

「厄介な技使いますね」

どうやら爆発メインの技を使うようだ。

「これだけではない」

そう言つと女性は、後ろに隠していた翼を出し、無数のビームを繰り出した。あまりにも連続でくるものだから全くかわせない。

「これでは近づけません！」

矢筈が苦しそうになりながら言う。連続でビームが飛んでくるので後ろに下がることしか出来ず、近距離戦メインの矢筈と八千代は全く手が出せない状況だ。

「だったら遠距離攻撃をするまでよ！ 矢筈君！」

「はい！ 雷剣！」

『電磁砲！』

雛流のツインガンから一筋のビームが出る。

だが、それをあつさりと払いのけた女性。

その後も、八千代と須永でシャイニングブーメランをやってみたが、地面からの爆発で対応されるために弱点である光の攻撃も通用

しない。

何とかして攻撃を与えなければ勝てない。でも、攻撃が当てられない。どうやったら、と考える水袋。

その時……一人の女子高生が木の棒を持って、地獄の女性に突っ込んで行った。

「もしかして……奏さん!？」

「嘘だろ!？」

突っ込んで行ったのは舞台上で演奏していた奏だった。音の水氷座に着く者の最有力候補の彼女が、いきなり木の棒を持って女性に向かって走って行った。そのまま木の棒で女性を叩きつけた。

「わざわざそちから来てくれるとはな……」

女性はその言って奏を弾き飛ばした。奏は激しく地面に打ち付けられ、壊れた舞台の前で倒れている。

そこに水袋が駆け寄り、奏を起こした。

「何やってるんだ! あんなことしたら死ぬぞ!」

「だって……許せなかったんだもの……」

「え?」

「音楽は人を楽しませるもの。それを、人を傷つける為に使っているのが許せなかった」

水袋は疑問に思った。確かに音を出して爆発を出したりしているが、全て同じ音なので音楽を汚すようなものとは思えなかったからだ。無数のビームだって、ただ連続で撃っているだけのものだったから、なおさら疑問だった。

そのことについて奏に水袋は聞いた。

すると、誰も気づかないようなことに、彼女は気づいていた。

「さっきまで隠れて戦いを見てただけど……音によって爆発する位置が違った。初めは『ド』の音で、あの女の人の目の前で爆発した。2回目は『ド』。それは遠くで爆発した。あの無数のビームだって、すべてリズムが一定だったし」

全く一定には聴こえなかった。そんなのに気づくとは……凄い音

楽センスだな……

「それはそうと……あなた水袋ちゃんだよね？」

「ばれてた！」

そんなのにも気づくとは……凄い音楽センスだな……音楽センスは全く関係ない。

「だったら、私にも戦う力ってもらえる？」

「どんな事あっても驚かないならな」

「水袋ちゃんや生徒会長が戦ってる時点で驚く要素いっぱいあると思うけど？」

「はいはい。でも後で戦わな〜いは、なしだからな。矢筈！」

「あいあいさ〜！」

矢筈は一つのリストバンドを投げた。奏はそれをキャッチする。

「はめてください。そしたら、あいつを倒す力が手に入りますよ」

何だか危ない物を薦めているように聞こえるが、全然危ない物ではないのでご安心を。

奏は何の躊躇いもなくリストバンドをはめた。そこから大きな弓に変わる。

「覚悟してね〜。音楽を汚すようなやつは……絶対許さないから」

「おもしろい……これが音の水氷座に着く者が……」

奏は地獄の女性に向かって突っ込んだ……

三十五・音の水氷心（後書き）

ついに奏が戦うよ！

他も戦うよ！

次話、決着です！

三十六・空に響いた音（前書き）

というわけで、決着&音の水氷心スカウト終了です。

三十六・空に響いた音

左手に現れた大きな弓。アーチェリー部が使ってそうな弓は発射口が赤色になっていて、糸に手を添えただけで矢が出てきた。とても先端部分が鋭く、矢を持つところには穴が開いていた。何もかも貫きそうな矢だ。

それを確認した奏は思いつきり地獄の女性に突っ込んだ。天国の力を持っているとやはりスピードが上がっている。さっきよりも早くに接近できた。

女性はそれにもちゃんと反応し、奏の遠く後ろに回った。そこから無数のビームを発射する。

相変わらず水袋たちは接近できず、後ろのほうで見てるしかできなかった。

それに対して奏はまたしても突っ込んでいった。
(このビームは208のテンポの十六音符。このスピードを持っていれば……簡単にかわせる！)

次々とビームをかわしていく奏。女性も少し焦った表情でビームを撃ち続けている。

そしてついに、女性のところまでたどり着いた。

奏はすぐさま糸に手を添え、矢を出して、女性に狙いを絞った。

「いっけえええええ！」

勢いよく矢を発射させる。……だが。

「全然痛くないぞ。何だ？ このしょぼい威力の弓矢は」

全く効いていなかった。傷一つも見つからない。

「ええええ！？ ちょっと水袋ちゃん！ 全然効いてないよ！？」

「しょうがないだろ！ お前の初戦の相手が強すぎるんだよ！」

何で来たかは知らないが、とりあえず地獄の者と考えると強いのだ。その上、水袋たちが前に出れない以上、倒せるのは奏だけとなる。しかしその奏は今日戦い始めたばかり。圧倒的に不利な状況だ

った。

その後も何度か攻めたが、結果は同じだった。

（どうする…… 私たちは近づけないし、近づける奏は攻撃威力が
ない。勝てる方法が……）

そう考えたとき、水袋のポケットから1つの指輪が落ちた。
その指輪を見て水袋はひらめいたのだ。

*

それは昨日の天国での出来事……

水袋は王に呼び出されてテラスに向かっていた。内容は全く知らないがとりあえず呼び出されたのだ。

「どうしたんですか王？」

「水袋たちはこれから水氷座に着く者を探すんじゃない？ だったらこれが役に立つと思うての」

そう言つて王は、1つの指輪を出した。

「これは……？」

「銅の指輪じゃ。音の水氷心を持つ者の武器に必要な道具じゃ。持
つておいて損はないから、持っておくのじゃよ」

「はい。……で、使い方は？」

「どの指でもいいんじゃないが、その指輪をはめる。そのはめた指を矢
の穴の中に入れ、それで発射する。そしたら、結構高い威力の矢が
撃てるはずじゃ」

*

そう、この指輪は音の水氷座に着く者の必殺アイテム。そして、
この戦いを勝利に導くアイテムなのだ。

「奏！」

「ん？」

水袋は銅の指輪を奏に投げた。奏はそれを空いている右手でキャッチする。

「とりあえずその指輪をはめて」

「うん」

奏は何故だか薬指にはめた。

「じゃあ、薬指で今度撃ってみてくれ」

「でも……もう近づける体力がないよ……」

ずっと走り続けて、ずっとかわして、ずっと攻撃し続けていた奏の体力はもう限界だった。

それを聞いて、水袋がニツと笑う。

「それについても考えてある！」

水袋はやつと今気づいた。奏と水袋が協力すれば……あいつに勝てることを！

「もう終わりか？ もっと楽しませろ」

女性が言ってきた。

「言われなくても……」

『楽しませてやるよ！』

どういうことか、水袋の肩に奏が乗っている。その状態から、水袋は水氷扇を上に乗げた。

「氷の旋風陣！」

水袋の足元から冷たい風が発生する。やがてその風は竜巻となり、水袋と奏を包み込む。どんどん上に伸びていく竜巻をコントロールし、女性の目の前の地面に竜巻を当てる。

「目が見えないのか？ 私には当たってないぞ？」

竜巻が消えると、目の前には奏がいた。

つまりは、氷の旋風陣を女性の目の前の地面に当て、奏を目の前に移動させる。そして……

最後の一撃でしとめる！

「な！」

「音楽を汚し、私を怒らせたことを……後悔させてあげる！」
薬指で、思いつき矢を引っ張った。
そして、思いつきり発射する。

「これが音の水氷心を持つ者の必殺技……」

『ブロンズアーチェリー！』

銅で輝く矢は、女性を貫いた。肩からは血が溢れ出ている。

「……私の負けか……なかなかおもしろいな……音の水氷心も……」
そう言って、女性は地獄に帰って行った……

＊

その後、舞台は壊れてしまったものの楽器は無事だったようで、
影月高校吹奏楽部の演奏が再開した。

綺麗な音色が日向町に響いた。

その音は音楽を愛する者にしか出せない、高らかなフルートの音
だった……

三十六・空に響いた音（後書き）

次話、八千代に地獄の物が襲い掛かる……？
「者」じゃなくて「物」ですよ！

三十七・八千代VSテスト（前書き）

八千代はやっぱりバカです。

三十七話どうぞ！

三十七・ 八千代VSテスト

朝、水袋と八千代の2人で学校に登校した。

「すっかり、天国の事ばつかだと学校も久しぶりに感じるね」
「だな」

ここ最近、というか春休みから新学期序盤は天国の事ばかりに目がいっていた。すっかり行っではいるのだが、平和な学校が久しぶりに感じるのだ。

「これからも楽しく学校に行けるもんね！」

「まあ……そうもいかないかもな。特に八千代は」

「どうということ!？」

「もうすぐ中間テストだ」

それを聞いた途端に、八千代はその場で倒れた。水袋から見たらもう死んでいた。

凄く笑顔で倒れて（死んで）いて、ダイイングメッセージが書いてある。ちなみに内容は『須永がやった』。勝手に須永のせいになっている。

死んでるな～と思っていたら、すぐに八千代が飛び起きた。

「そうだ！ 私には矢筈君という仲間がいるじゃないか！」

「残念だが、あいつは天国で必死に勉強していて、今じゃ結構賢い」
八千代は再び倒れた（死んだ）。

水袋は八千代を引きずりながら3-E教室に向かった。

SHRが始まる。八千代は笑顔で寝ている。……おい！ 早く起きろ！ 鈴木がチョークを構えているぞ！ 席が遠いので心の中で叫んでいた。

……まあ、結局飛んできたのだが。

SHRが終わった後、雛流のところに行った。

「八千代さんの学習をみるのはいやよ？」

「何故分かった？」

前回（八・九話くらい）の出来事でもううんざりしているのだろう。何ていったって、鎌倉幕府と平安京がごちゃごちゃになっているやつなのだ。一般的には平城京と平安京がややこしくなると思うのだが。

そこで、雛流は人差し指を立て、案を提案した。

「奏さんに頼んだら？」

実は奏はとても賢いのだ。学年順位は3位で、生徒会副会長の翔子なんかはテスト前に奏にべたべたするのだ。というか、吹奏楽部にモテモテだ。

ちなみに2位は水袋、1位は雛流だ。

雛流には男子共が寄ってくる。水袋には八千代が寄ってくる。

「だが、1位は雛流なので、よろしく！」

「え……」

八千代教育係、朝希雛流。（水袋が勝手に決定）

*

放課後、八千代と雛流、水袋は生徒会室にいた。ちなみに水袋がいる理由は、「八千代さんに勉強教えるから、代わりに生徒会長の仕事やって！」と言われたので、水袋は生徒会の仕事だ。

「じゃあ、八千代さん。試しに聞いてみるけど、鎌倉幕府は何年？」

「794年！」

変わらずバカな八千代。雛流は涙目で水袋を見ている。それから、頭を抱えて「もう無理だ」と言ってきた。雛流にも手が負えないとなると……誰が出来るのだ？

その時、生徒会室のドアが開いた。

「雛流ちゃん？ いる？」

入ってきた人の姿を見て、水袋と雛流はキターの顔みたいな表情になっていた。

「いるよ！ さあ！ 入って、奏ちゃん！」

「私なんでこんなに歓迎されてるんですか？」

入ってきたのは、この前音の水氷座に着いた奏だった。雛流が歓迎するのも無理はない。

というわけで、用事のついでに八千代の教育係を任せた。

*

「そうそう。それでこれがこうなるよね」

「ふむふむ」

すっかり八千代に教えてる奏を見ると涙が出てきた水袋と雛流。あんな意味の分からないやつに、あそこまで優しく教えてあげるとは…… どれだけ心の広い人なんだ！ 水袋なら開始1秒で殴っているところだ。

八千代も案外理解しているようだ。

その勉強は夜まで続いた……

*

そして試験当日、『必勝！』と書いてあるはちまきを巻いて、八千代はテストに挑んだ！ だが、挑む前にはちまきが没収された！（…… あ！ これ昨日奏ちゃんに教えてもらったな！ 確か…… この重力は物体に……）

それから、必死で思い出しテストは終わった……

＊

それから翌日……

「やったよ！ やったよ水袋ー！」

「何？」

テスト用紙を持って喜んでいる八千代。点数が良かったのだろうか。

「３１点！ 人生初の補習ナシだよ！」

「……」

正直、３１点で喜ぶ奴は初めて見た。それで喜べるのは八千代くらいだろう。

「おいおい。水袋ちゃんは何点だったのかな？ まあ、私には勝てないだろうけど」

３１点でここまで調子に乗るやつを見たのは初めてだ。補習はなくても自慢できる点数とは思えない。

水袋は自分の解答用紙を八千代に見せた。点数は９８点。

それを見た八千代はその場で倒れた。水袋から見たら死んでいる。今回もダイイングメッセージが書かれていた。内容は『矢筈君はどうせ補習だ』だった。

ちなみに他の人は……

雛流 １００点

「まあ当然ですね！」

調子に乗っているが、抵抗できない。

須永 ７８点

中途半端。

奏 ９７点

さすが！ 雛流よりいい人だし！

矢筈 90点

「八千代さん！ 裏切ってすみません！」

こうして、中間テストは終わった……

三十七・八千代VSテスト（後書き）

次話、皆で〇〇〇〇に行くぞ〜！

三十八・修学旅行（前書き）

修学旅行です。

三十八・修学旅行

朝、今日もいつもどおり学校に登校する。何にも変わらない朝なのだが……少し3年生がはしゃいでるくらいか。

「おはようゝ水袋」

「おはよう」

教室で八千代とあいさつをかわす。その後、すぐに水袋の席にやってきた。

「もうすぐ修学旅行だね！」

「そうだな」

そう、皆がはしゃいでる理由はもうすぐ修学旅行があるからなのだ。行き先は沖縄。何で沖縄かって言うと、作者が以前行ったからやりやすいかと……。っと、リアルな話はおいておこう。

ちなみに水袋は修学旅行は全然楽しみじゃなかった。小学校や中学校でも、思い出といたら、ブランブラン歩いてただけのようなものだ。まず、そういった行事で楽しんだことがない。家で寝てるのが1番楽しいという水袋。

その時、奏もやってきた。

「おはよう、2人とも」

「「おはよう」」

「それで修学旅行のことなんだけどさ……」

出た、修学旅行だ。奏まで水袋を苦しめるつもりなのか。（もちろんそんなつもりは全くない）

「ホテル、一緒の部屋に泊まろうよ。色々聞きたいこともあるし」

「うん。いいよ」

「ありがとう！ じゃあ！」

そう言って奏は自席についた。しかし凄い笑顔だった。水袋と八千代は胸がキュンキュンしている。こんなときめいたのは初めてだ、という水袋。

＊

その日の6時限目。学活で修学旅行についての説明だ。ミスター・チヨーク（担任の鈴木先生）が説明をする。

「では、もうすぐ修学旅行だ。行き先は沖縄。初めはバスに乗って空港に行き、それから飛行機で沖縄に向かう」

それから長い間話は続くのだが、あんまり関係ないので省く。…

…ちよっ！ 鈴木先生！ チヨークを構えるな！

そして、みんなの楽しみだった部屋割り、修学旅行での班などを決める時間。

部屋は水袋と八千代と奏で決まっている。あと1人なんだが…

翔子ちゃんでも誘うか！

「流れる的に私を誘いなさい……」

「雛流ちゃん。一緒に部屋に泊まる」

雛流とは離れたかった水袋だったが、察知されたのか、すぐに捕まった。

ちなみに矢筈は、須永と須永のコンビの江田笑人^{えだしやうと}と江田笑人^{こつたわらひと}というややこしい奴らと一緒にになった。

班は6人グループ。もうこれは決まりだろう。水袋、八千代、矢筈、須永、奏、翔子の6人で……

「流れる的に私を誘いなさい……」

訂正しよう。水袋、八千代、矢筈、須永、奏、雛流（笑）の6人でやることにした。

「何で私のところに（笑）がついてるの？」

訂正し……

「訂正しすぎだー！」

チヨークが飛んできた。このチヨークはナレーションにも被害が

でるという大技なのだ。

そんなこんなで修学旅行についての説明は終わった。

＊

それから1週間後……

「よし！ 皆揃ったな！ じゃあ行くぞ！」

「おー！」

生徒はバスに乗り込んだ。

沖縄へ出発！

三十八・修学旅行（後書き）

いやゝ、沖縄だと1回行ったから楽しそうだなゝ……と。
というかやりやすいです。

ここから修学旅行！ ぜひ読んでください！

三十九・一人の力（前書き）

案外更新できました。

いやゝ、なかなか進まなかったから、正直焦ってたんですよ。非常にやりにくかったのでグダグダな場所多数です。

そこらへんは目玉にみてください。では三十九話どうぞ！

三十九・一人の力

吐きそうになりながらも（酔った）バスを乗り切った水袋。今、空港についたところだ。「飛行機だー！」と叫ぶ八千代。ちなみに飛行機は全く見えない。

興奮した八千代を隣に飛行機に乗り込んだ。

*

吐きそうになりながらも（酔った）飛行機を乗り切った水袋。生徒達はついに沖縄にやってきた。灼熱の太陽の光が水袋たちを照らしている。それは、水袋たちの住んでいるところとは比べ物にならない暑さだった。

「暑いね水袋。こんなのじゃ凍え死んじやいそうだよ」

八千代は凍え死ぬの意味を知っているのだろうか……と不安になる水袋。

初めの訪問場所は首里城だ。赤瓦で有名なあの赤い城。水袋は酔い止めという強い味方を持ったため、吐きそうにならずに首里城に着くことが出来た。

ちなみに須永はバスガイドさんにテンションが上がっている。

首里城では班行動だ。水袋、矢筈、雛流、八千代、須永、奏の6人での行動となる。須永が「この修学旅行で新技を作るぜ！」といきなり宣言してきた。まあ頑張ってもらおう。

城の中に入っても勝手な行動をする奴が多かった。ひとまず八千代は迷子でどこかに行ってしまった。須永は「つまんねー！」と叫びだした。矢筈はガラスにべたべた張り付きながら見ている。こん

なめちやくちなチームワークで地獄戦大丈夫なのか……と不安になった。

「弓矢の練習場所とかないのかな？」

奏までそんなことを言ってしまった！

——まずい……変な影響を与えてしまったのか！

そんなことを心で思う水袋だった。

*

首里城での体験も終了し、生徒は部屋へいった。

色々と疲れたのか、水袋たちはすぐにベッドにもぐりこんだ。すると、隣の部屋の女子から声が聞こえる。

「ねえねえ、恋話こいはなしようよ」

「あんたは誰が好きなの？」

「矢筈君！」

「私も！」

「私もなの。ライバル出現！」

——意外と矢筈がモテている！

そこに驚いた水袋。その後心の中で思う。

——「そーいや私たちは修学旅行に来て何早く寝ようとしてるんだ！　ここは夜遅くまでお話するべきじゃないのか！？」　何か話題を作ってみよう！

「雛流」

水袋は雛流をゆすった。だが起きない。

「雛流」

起きない。

「雛流！」

枕で顔を思いつきり殴った。そしたらやっと起きた……と思っ

たら思いっきり枕で殴ってきた。

「何？ 水袋」

「水話すいばなしようよ」

「何、水話って？」

「水氷心のお話」

「つまんね！」

——くそ！ どこがつまんないんだ！ 水氷心について1晩語り合おうじゃないか！

「いいね、水話！」

「私も……まだ分からないこといろいろあるし……」

八千代と奏も水話がしたいようだ。というわけでベッドを囲む形になり、水話を開始した。

「さあ奏君。何でもいつてくれたまえ！」

「私が音の水氷心。水袋ちゃんが和の水氷心。雛流ちゃんが知の水氷心。八千代ちゃんが明の水氷心でしょ？ 他にはどんなのがあるの？」

「残ってるのは体の水氷心と暗の水氷心。それぞれ特徴があつて……」

……
そんな話を2時間ほどやった。

もう午前1時。奏が最後の質問をした。

「じゃあさ！ 最後に強さの秘訣を！」

「まあ、私も強くはないけど……天国の技には合体技があるんだ。

矢筈と雛流で電磁砲、須永と八千代でシャイニングブーメラン。それを出来るチームワーク！ それと、個人の必殺技とか必要な」

「へえ……ありがとう！ 色々詳しくなれたよ！」

「どういたしまして」

そして4人は静かに寝た……

*

2日目、今日は海へ行った。エメラルドのように輝く海に、太陽の光が反射してキラキラ光っていた。

そこからは分かれて体験学習の時間だった。天国のメンバーでいうと、女子チームはカヌーへ。男子チームはバナナボートの体験に行った。

*

須永と矢筈はバナナボートに乗り込み、引っ張ってくれる船の運転手さんに「お願いします」といい、バナナボートは出発した。結構ゆっくり引っ張ってくれているので、安定して乗れた。

その時、須永がありえないことを言った。

「時速80kmでお願いします！」

「何言ってるんですか須永さん！ 危険ですよ！」

「別にいいけど……落ちるなよ」

運転手さんはすんなりOKサインを出してくれた。

進むスピードはみるみる速くなり、安定感を保つのに気が回らないくらいの速さだった。

目が回る矢筈に対して、須永は真剣な眼差しでまっすぐ前を見ていた。

（この速さだ。この速さが……俺のブーメランになれば……）

そんなことを考えながら……

三十九・一人の力（後書き）

次話、修学旅行編ラスト！（編っていうほど長くないけど）

四十・修学旅行終了（前書き）

四十話達成！

いや、この作品は十話くらいで終わるつもりだったけど、思いのほか楽しくて四十話までできてしまいましたwww

まだまだ続きますのでこれからもうろしくお願いします！

それと、四十話記念（？）なのにめっちゃ短いです。

あんまり書くことなくて……

なめとんのか！と思われたら、土下座します！

と、前書きで文字稼ぎをするvazでした。

四十・修学旅行終了

女子の方も楽しいカヌー体験ができたようで、満足そうに部屋に入っていた。

「いやゝ楽しかったね！」

「奏ちゃん凄くはしゃいでたもんね」

「そういう八千代もはしゃいでたじゃないか！」

そんな楽しい体験ができた修学旅行も明日でラストだ。水裳にとっては嬉しいような、悲しいような、そんな気持ちだった。

ある意味貴重な体験をしたのは須永だろう。

出来事の話で盛り上がりながら、みんなは寝た……

*

翌日、今日は海で自由行動だ。皆はしゃいで海に飛び込んでいくが、水裳はパラソルの下で三角座りをしていた。海で泳ぐのは疲れるとあって、泳ぐ気はともかく、遊ぶ気すらない。

それぞれの行動を見てみると、雛流、八千代、奏は沖縄の男共にナンプアされている。矢筈は泳ぎまくってる。須永は水切りをしている。皆エンジョイしているようだ。

「おー、和月。お前は遊ばねえのか？」

「うん、疲れるから」

「ははは、お前らしいや」

そう言っただけで須永は水裳の隣に座った。そして、こんなことを話した。

「なあ和月。1人1人の強さって必要だと思うか？」

「持っておいて損はないと思うよ」

須永は修学旅行中ずっとそのことを考えていた。須永は八千代がいないと大きな技を繰り出すことができないからだ。修学旅行でなに

かを手に入れようとしていたのだろう。

「けどさ、それほど考えなくてもいいよ」

「え？」

「そりゃあ、あつたら便利だし強化するしいいことばかりだよ。でも、それにこだわって楽しいものも楽しめなくなるのは1番嫌だ。お前は元氣だけが取り得なんだから」

「……そっか」

須永はニツコリと笑った。それとともに、何かを得た感じだった。

「それはそうと、八千代がナンパされてるよ」

「何！？ 僕の八千代さんになんてことを！」

須永は八千代の下へダッシュしていった。

—— いつからお前の八千代さんなんだよ。

水袋は心の中でそう思った。

こうして、楽しい2泊3日の修学旅行は終わった……

四十・修学旅行終了（後書き）

次話、雛流と八千代も考え事が……

四十一・自分だけの必殺技

朝、生徒たちは普通に登校してくる。友達と仲良く話しながら。

そんな様子を本館4階にある生徒会室から見ていた雛流は、修学旅行で聞いたあの言葉が頭から離れなかった。

『それと、個人の必殺技とかなきゃ』

これは修学旅行の部屋で水袋と奏の水話のときに聞こえた内容だ。これを聞いてから雛流は悩んでいた。

——私は、矢筈君がいないと強い技が出せない。地獄戦の時も、矢筈君がわざわざ戻って来てツインガンに雷を注入してくれた。私が1人で戦う力があれば、矢筈君もちよつとは威力の高い雷ノ鳥群を撃つことができたんじゃないだろうか……

実際雛流が使える技は電磁砲しかなく、それも矢筈がいないと発動できない技だ。ツインガンで簡単に弾を撃つことはできるのだが、あんな威力では地獄には通用しない。

——特訓でもしてみようかな……

その時チャイムが鳴り、SHRが始まる5分前となった。雛流はすくつと立ち、教室に向かった。

*

ここはSHR中の3-E教室。ミスター・チヨークが連絡事項を話す中、全く耳に入らず……というかいつも入れる気がないが、八千代は机と向き合ってボーっとしていた。八千代も雛流と同じで、水袋の『それと、個人の必殺技とかなきゃ』が気になってしょうがなかった。

八千代も使える技はシャイニングブーメランのみで、これは須永との合体技だ。光剣が使えるが、はつきりいつて眩しいだけだし、何かに注入するような技だ。よって八千代は相手にダメージを与え

る自分の技を持っていない。普通にビー短で斬ることも可能だが、これも雛流と同じく地獄に通用する威力ではない。

——水袋も天国の図書館で氷の旋風陣のやり方を見つけたし

……今日図書館に行つて、それから特訓を……

「如月！ 机とにらめっこしてんじゃねえ！」

必殺チョーク投げ発動！（最近飛んでくる回数多い）

——必殺技を身につけたら一番最初にこいつを殺す！

心の中でそう思った八千代だった。

*

学校が終わつた後、八千代はすぐさま天国に行った。そして天国に着くと、図書館にダッシュしていった。

「あれ？ 八千代さん？」

「雛流ちゃん！」

そこには雛流もいた。手に取っているのは資料で『知の水氷心』という題名だ。おそらく代々の知の水氷心のことについて書いてあるのだろう。

「八千代さんはどうしてここに？」

「自分だけで使える技のことについて、ここならいろいろあるかな……」

「そっか……私と一緒にね。私も、矢筈君がいなくても十分戦える技を得るためにここに来たんだ」

「そうだったんだ……」

同じ気持ちをお互いに持っていて、少し驚いた八千代と雛流。その後、雛流はある場所に指を指した。

「あそこに明の水氷心の資料もあったわ。一緒に勉強しましょ！」

「うん！」

八千代は資料をすぐに取りに行った。

しばらく2人は資料を読んだ。簡単な漢字で何度も聞いてくる八千代に雛流は少しイラツとした。

それからまたずっと読んでいた。そしたら2人ともやつと必殺技のようなページを見つけた。

「私はこれがんばってみようかな」

雛流が選んだ技は雷球銃^{らいきゅうガン}。2つの銃口を合わせて、そこから電気エネルギーを発生させ、大きな雷の球を作る。それを相手にぶつけるという技だ。

「私はこれ！ えつと……とら……ひょう……」

「虎豹短斬^{とらひょうたんざん}じゃない？」

八千代が選んだのは虎豹短斬。タガー、もといビー短を地面にこすりつけながら全力で走る。そのときにできる衝撃波を思いっきり相手に向かって振る。その衝撃波は虎のような強さで豹のような速さを持っている。

「よし！ 八千代さん。明日から一緒に特訓ね！」

「了解です！」

こうして2人の特訓が始まった。

四十一・自分だけの必殺技（後書き）

え、来そうな質問を先に答えておきます。

Q・電気エネルギーをためるのにどうして雷球銃には矢筈君は必要ないの？

A・雛流のツインガンには、多少の電気エネルギーがあります。そういう特性を持ったツインガンなんですね。お忘れかもですが、一応雷電銃という名前ですから。で、電磁砲にはツインガンでは補えない莫大な電気エネルギーが必要です。それには矢筈君が協力し、雷球銃にはツインガンの電気エネルギーだけで足りるということです。

次話、矢筈が水袋に対して気になることが……

四十二・陸上部の恐ろしい奴

今日も普通に学校だ。

最近、矢筈はあることが気になっていた。それを今日聞いてみた。

「姫つて、部活動やってないんですか？」

「部活？」

矢筈は一応帰宅部だ。雛流は弓道部。八千代は意外と美術部。須永は落語研究会。奏は吹奏楽部。天国護廷7の皆も様々な部活に入っているのだが、水袋の部活動だけは知らない矢筈は、そのことがずっと気になっていたのだ。

「何言ってるんだ矢筈。こう見えても私はその部活のエースなんだぞ！」

「ええ！？ 本当ですか！？ 一体何部なんですか？」

「帰宅部のエースだ！」

自慢げに言われても……と思う矢筈。

「最近帰るのが遅いから驚かれていまするんだけどな」

特に驚かれたのは、雛流と一緒に八千代と矢筈の勉強会をしたときだそう。あの時帰った時間は6時くらいだった。翌日には、『おい和月！ お前が6時下校なんてどうしたんだ！？』や『もしかして具合悪いの？』とか色々といわれたそう。その上影月新聞に『エースがまさかの不調！？ 和月水袋、ありえない6時下校』という見出しで載ったこともある。それほどに水袋はいつも早く下校する生徒だったのだ。

「僕も今は帰宅部ですが……ちょっと今日部活見学しようと思ってるんです。一緒に行きませんか？」

「ああ、いいぞ」

こうして放課後に部活見学が決定した。

それで放課後。ほとんどの生徒が部活動に向かう中、水袋と矢筈はどの部活に行くか考えていた。

「とうかここ、部活動めっちゃ多いですね」

「それなりに人数もいる学校だからな」

体育系では、野球部、サッカー部、バスケット部、バレー部、陸上部、ラグビー部、弓道部、アメフト部、テニス部など、他にもたくさんある。文化系だと、吹奏楽部、美術部、落語研究会（？）演劇部、家庭科部などがある。これを全て回るのは時間の問題だ。

「矢筈はどこに行きたいんだよ。文句言わずについて行ってやるから」

「ん、陸上部ですかね」

「絶対嫌だ！」

「いきなり文句言ってるじゃないですか！ 自分で言ったんだから陸上部に行きます！」

「さ、て、私も部活動するか」

「帰らないでください」

こうして水袋はむりやり陸上部の活動場に連れて行かれた。

それで陸上部の活動場にやってきた。とりあえずめちやくちや走ってる。と、水袋たちが来た途端に陸上部女子が休憩時間となったようだ。すると、水袋はもつと帰りたがった。陸上部のキャプテンが水袋の存在に気づき目をキラキラさせながらこっちに走ってきた。

「水袋ちゃん！」

「く……来るな……！！」

矢筈に捕まって逃げられない水袋はもがいて、意地でも逃げようとした。しかし逃げることはできず、キャプテンに捕まってしまった。キャプテンは水袋に抱きついた。

「水袋ちゃん！ やつと陸上部に入ってくれるんだね！」

「絶対入らん！ しつこすぎるぞ紗由里！」

「否定する水袋ちゃん……可愛い。さあ！ 入部届けはここにあるよ！」

「だから陸上部は嫌だったんだ！」

陸上部キャプテンの半田紗由里はんださゆりは、足が速くて毒舌でSで可愛い顔の水袋が大好きなのだ。つまり紗由里は、DMで女好きという変態なのだ。

——陸上部は、こういうことになるから嫌だったんですね……矢筈は心の中で謝った。

翌日。

「姫！ 陸上部の次はどこに行きます？」

「どこでもいい……陸上部以外なら……」

水袋の心は折れていた。

四十二・陸上部の恐ろしい奴（後書き）

次話も部活見学。

そこで大発見が……？

四十三・体の水氷心

水袋と矢筈は今日も部活動体験に行くことにした。矢筈は野球部にも行ってみたいといったので、今日は野球部に行くことにした。水袋からしての野球部の印象は、毎日とっても熱心に練習していて、一致団結して同じ目標に向かっていている。青春真っ盛りなイメージがある。

矢筈はつきつきした気分で野球部の練習場に向かった。

＊

2人は影月高校のグラウンドにやってきた。野球部の練習はもう始まっていて今はジョギング中のようなのだ。

「おおー！あれが野球部ですか！何か青春って感じですね！」
おそらく野球部は夏の甲子園を目指して毎日の練習を頑張っているのだろう。改めて本当に熱心だと思う。

しばらく見ていると紅白試合が始まった。大会も近いので実戦経験をつもつということなのか。試合となるとただの見学とは違ったように感じる。

試合が始まりピッチャーが渾身のストレートを投げた。だが初球打ちでボールは大きく飛んでいった。

「あっちゃー！あれは取れませんか〜」

矢筈が手で頭を軽くたたいて言った。

あれだけ飛んだら誰も取れるわけがない。下手したらグラウンドから飛び出るくらいの強さだ。どうせ1点取られると思った水袋。

……だが……

「アウト！」

「え!？」

まさかの言葉が聞こえた。今確かに審判はアウトと言った。あんな距離でキャッチできる超人がどこにいるのか……

そいつは赤色の髪の毛で少しボサボサした髪型、締まった体にスラッとした身長。

「ああ、ひいらぎ柊か……あいつ運動神経いいもんな」

ひいらぎ柊大牙、野球部のキャプテンで、足が早く体力もあり、リーダーシップもあるというばりばり体育系の男子だ。結構イケメンで女子のもモテる。

あんな球を取れるとは凄い運動神経だなと水袋は思う。

それを矢筈は目をキラキラさせながら見ていた。試合を楽しんでいるという目ではないが……

「姫」

「どうした？」

「大牙さんって体の水氷心持ってますよね!」

「お前もそう思ってたか……」

体の水氷心の特徴は、運動神経がよくリーダーシップのある人だ。大牙は運動神経はともいいし、野球部の部長だからリーダーシップもそれなりにあるはずだ。

「スカウトしてみる価値はありますね」

「そうだな」

この後終わったら早速考えようと思ったその時……!

『誰か助けてくれー!』キャプテンが何かに殴られて血が出てる!』

その声に1早く反応した水袋と矢筈はすぐにグラウンドに入ってその場所へと向かった。するとそこにいたのは……

「まったく、ピーピーうるせえな。ちょっと黙れ!」

そこにいたのはナツクルを持った地獄の者だった……

四十三・体の水氷心（後書き）

次話、突如現れた地獄の者と戦う！

四十四・地獄の使者

突如グラウンドに現れた地獄の使者。目的は何かは知らないがとりあえず生徒達を危険な目にさらすわけにはいかない。そう思った水袋と矢筈は武器を持って地獄の使者に向かっていった。

「おお、やっと登場か、天国」

その地獄の使者は振り返り水袋たちを見た。鋭い目つきで人間をカスとしか思っていないような目だ。

「今日はお前らに用はないが……こうでもしないと用がすまないんでね！」

そう言う男は一本の剣を取り出し、剣先を空に向けて構えた。その剣はやがて黒い妖気で包まれて、水袋たちに向けて思いっきり振った。そう、この技は……

「黒暗定紋風雷斬！」

黒い大きな斬撃が水袋たちに向かってはしってくる。これは現在の地獄最強の技、『黒暗定紋風雷斬』だ。地獄戦の時、その圧倒的な威力に水袋たちもすごく苦戦したのだ。水袋の記憶ではこいつは地獄護廷7の一員ではない。そんなやつでも使えるくらいに発展してきたのだろう。

——だが、発展してるのは地獄だけじゃない！

水袋は水氷の指輪をはめた右手で水氷扇を高く上げた。すると水袋の足元から冷たい風が発生し、凍りつくほどの温度になった風が斬撃にぶつかっていった。

「氷の旋風陣！」

すると黒暗定紋風雷斬の斬撃はみるみると凍っていき、水袋の目の前で止まった。そのまま斬撃は地面に落ちた。

「へー、結構やるじゃん」

「感心してる場合じゃないと思うよ？」

男が斬撃に気をとられているうちに矢筈が後ろに回っていた。そ

のうえ剣も構えている状態だ。

「雷剣！」

雷に包まれた剣で思いつきり斬った。男は肩の部分を斬られ、地面に膝をついて肩を押さえた。

「ここまでやるのは予想外だったな。おい！ 悪いが助けてくれ！」
「ったく、一人で大丈夫とか言っておきながら……」

男が空に向かって叫ぶと、一人の女性が降りてきた。その姿を見て水袋たちは驚いた。何とそいつは日向祭りで戦った女性だった。

「あの時の……女！」

「女って言うのやめてもらえる？ 瑠璃るじっていう名前があるんだから」

どうやら瑠璃という名前のようだ。

—— つくづく思うが地獄の奴って結構名前可愛いよな。交換してくれないかな。

水袋は全く戦いのことを考えてなかった。考えていたのは地獄の使者の名前のことだった。

「じゃあ瑠璃。あの技で一氣に片付けてやろう」

「そうだな裕史ゆうし。本当の目的にもこれで近づくだろう」

さつきから本当の目的といっているが一体何のことなのかさっぱりだ。地獄側としてもここで天国を潰さなくてもいいとは思っているだろう。実際、その行動が彼らにも表れている。だったら他に何の用事がある？ 地獄がここにくるのは天国を潰すことぐらいだろう。本当に謎だ。

それとあの技も氣になる。相当な技だということは会話から分かる。水袋と矢筈は攻撃に備えた。

「くらえ！ 爆発パンチ！」

瑠璃が音を出し、水袋たちの手前で爆発を起こす。その影響で

もちろん水袋たちは後ろに下がった。すると正面から一気に裕史が突っ込んできた。その裕史は剣をしまいナツクルを構えていて、そのナツクルには爆発で纏った熱気があり当たったらやけど程度では済まないかもしれない。避けたいものだがあまりのスピードにかわせない。

「氷の舞！」

水袋は咄嗟に氷の舞を発動させた。やけどは逃れたものの凄い威力のパンチを受けてしまった。水袋たちはその場でぐったりと倒れた。

「さうって、本題にいくか！」

裕史が目的地に行こうとしたとき……

「ヒーローは後から登場するものだ！ 須永竜輝参上！」

ヒーローではないが何かやってきた。何か秘策でもあるのだろうか……

四十四・地獄の使者（後書き）

次話、須永が新必殺技！

四十五・ドルフィンブースト（前書き）

遅れてすいません。

出かけっぱなしの最近で更新が遅れました。
では四十五話をどうぞ！

四十五・ドルフィンブースト

裕史と瑠璃による爆発パンチの影響を受けて、その場でぐったりと倒れこんでしまっている水袋と矢筈。その様子を見ると相当の威力のようだ。

裕史と瑠璃が目的の場所へ行こうとしたとき、ヒーローじゃないくせにヒーローっぽく現れた笑の水氷座につく須永。なにやら自信満々にブーメランを持っている。

そしてその後ろにはグラウンドにやってきてなかった八千代、雛流、奏もいた。

「瑠璃、何だあいつは？」

「笑の水氷座についている須永竜輝だ。そんなに強いわけではない。ほつとくぞ」

裕史と瑠璃は軽く須永たちを無視した。その直後に須永がニヤツと笑って、ブーメランを構えた。

「俺に背を向けたことを後悔するがいいぜ！」

須永はブーメランに力をこめた。すると青い光がどんどんブーメランに集まっていき、最終的に自分の体も青い光で包まれた。ブーメランは手のひらに念力があるかのように手の動きとシンクロしている。そしてブーメランから青い光がブーストのように噴射した。

「これが沖縄で得た神秘の技だ！」

『ドルフィンブースト！』

そのままブーメランは地獄の使者2人に突っ込んでいった。周りから見た情景は青色に輝きながら超高速で海を渡っていくよう、華麗に海を超高速で泳ぐイルカのようなだった。

「裕史、何か飛んでくるぞ」

「ふん、あんな技誰が食らうか」

ドルフィンブーストは本当に超高速だ。ちょっとした隙も大ダメージにつながる。

「な……何だこの速さは！」

もちろんかわす余地もなく裕史と瑠璃の場所で大きな爆発が起きた。煙がおさまると、見えたのは2人がお腹を押さえながら膝を付いている姿だった。

*

一方水袋は須永が新必殺技を発動させているうちに矢筈と自分を回復させ、裕史に怪我を負わされた大牙の元へと向かっていった。普通の人間が地獄の者の技を食らうと相当なダメージになる。奏なんかが例になるんじゃないだろうか。日向祭りの際、瑠璃が現れたのに対し、人間という状態のままで突っ込んでいった結果、吹き飛ばされて舞台の下敷きとなってしまった。たまたま奏は大丈夫だったが人間でいる時間が今回は長い。一刻も早く治療、回復をしなければならぬ。

「いた！ あそこで寝込んでいる」

「姫！ 早く回復を！」

「ああ」

水袋は両手を大牙にかざした。大牙は青と水色のベールに包まれながらみみると傷口が塞がっていく。すると、大牙は目を覚ましすぐに起き上がった。

「ん？ 和月じゃないか」

「またバレた！」

——ちくしょう。最近の人間は察知能力が優れているのか。奏といい大牙といい、最近の水氷心を持つものは厄介だ。

ひとまず自分も人間という事を理解してほしい。そして自分も厄介の1人だという事に気づいてほしい。それに水氷心を持つ人間は

数少ない。

「って！ 私の言っていることはどうでもいいんだ！ 柊、大丈夫か？」

「ああ、問題ない」

そのあと、大牙は地獄の使者達と天国護廷7の戦いの様子を見ていた。

「俺を殴ったのはあのナツクルを持っている奴か？」

「ああ、そうだけど」

それを知った途端、大牙は矢筈に聞いた。

「なあ、矢筈。俺でもあんな能力もらえるのか？ よく見たらあいつらは同じ学校、しかも同じクラスだ」

「もらえますけど……どうしたんですか急に？」

「何でもねえ。ただ……」

『負けっぱなしが趣味じゃないだけだ』

そして矢筈は大牙にメリケンサックっぽい物を渡し、それを大牙がはめるとメリケンサックっぽい物のでこぼした部分から爪が生えた。

「武器は爪です。都合のいい武器でしょう？」

「ああ、そうだな」

3人は地獄の使者の元へと走っていった。

四十五・ドルフィンブースト（後書き）

「おまけショートストーリー」

「八千代さんの思うこと」

八千代（以下：八）「はいはい、というわけで更新遅れちゃってごめんね」のおまけショートストーリーです。ふふふ、本編ではなくても主役に抜擢されるとは……私もマイオール・ジャクソン並みのスターじゃないか！」

水袋（以下：水）「そんなこともないと思うが」

八「はいはい無視しましょう」。ではおまけショートストーリー始めます！」

*

八「というわけで早速やっていきたいと思います。最近の私が思うことは、近頃の少年、もといボウズです」

水「そんな言い方しなくても……」

八「それで最近結構聞くのが、『天ぷらのぷらって何ですか？』と調子に乗った感じで話している奴。私は思う」

八「私には天も何か分からない」

水「……」

八「天ぷらなんて初めは『天国のプラスチック』の略かと思ってたんだよ！」

水「お前はいつ天ぷらの存在を知ったんだ！？ 最近じゃないだろうな！？」

八「じゃあ答えてみる少年共！ 天は何か分かるか！？ 言っとくがてんかすとか言うんじゃねえぞ！」

面倒くさくなつたので水袋さんは帰りました。

八「さあ答えてみる！ ふざけてこの質問を言っている少年達よ！」

*

水袋さんの解説

水「天ぷらは何の略でもなくて、天ぷらっていうポルトガル語ですよってぷらには意味ないでしょうね」

その事実を知って八千代はただがっかりした。

八「全国の少年たち……悪かった」

完

次話、大牙は地獄の使者にリベンジできるか！？

四十六・リベンジマッチ

体の水氷心を持つものとして地獄の使者達に向かって走り出した大牙。リベンジマッチの開幕だ。

地獄の使者は矢筈を除いた天国護廷7と戦っていた。地獄の2人は近距離戦だが、天国護廷7で近距離戦は八千代のみ。不利かと思われたがそうでもなかった。新しい必殺技を手に入れた須永や、さまざまの威力を持つ奏、必殺技はないものの必死で援護する雛流、この3人の遠距離攻撃で楽な戦いになっていた。

しかし、地獄側も黒暗縄文風雷斬という最強の遠距離攻撃でなおかつ近距離攻撃である技がある。それには苦戦する一方だった。

近距離で戦う八千代にとってはかわすこともかなり困難だ。確実にかわさなければ大ダメージとなってしまう。何度もかわし続けているため息もあがり、動きがだんだん鈍くなっていた。

「これで終いにするぞ！ 黒暗定紋風雷斬！」

鈍くなった体を動かすことはもう出来なかった。直撃するかと思ったその時……

「氷の舞！」

地獄の使者の後ろから冷たい風がやってきた。その風はみるみると黒暗定紋風雷斬を凍らせていく。

「水袋！」

「すまん、遅れた」

そしてその後ろから矢筈が現れる。

「雷剣！」

すぐさま斬りかかる矢筈。それにすぐに反応した地獄の使者2人は攻撃をかわした。するとその先には見覚えのない姿がある。

「やってやるぜ。負けっぱなしは趣味じゃないからな！」

「僕が言った通りにやってください！ 大牙さん！」

「ああ、そのつもりだ！」

大牙は右手を強く握った。するとメリケンサックっぽい物から炎が流れ込んでくる。それが爪を包み込み、爪はたちまち炎を上げる。右手を大きく振り上げ、大牙は突っ込んでいった。

『ファイアクロウ！』

思いつき裕史を切りつけた。裕史の肩からは大量の血が溢れ出した。その場で倒れてしまう。

残ったのは瑠璃だけだ。もちろん攻撃準備は整っている。

「行くよ！ 八千代さん！」

「うん須永君！」

須永はドルフィンブーストを太陽に目掛けて発射した。それに向かって八千代と須永はジャンプした。水が太陽の光を反射してキラキラ光っている。そう、それはまるで、沖縄の海と太陽のようだった。

「新必殺……」

『エメラルドサンシャイン！』

そのブーメランを2人で精一杯叩き、目にも留まらぬ勢いで瑠璃に突っ込んでいく。もちろんドルフィンブースト以上だ。かわせるはずもなく、瑠璃はそのまま攻撃を食らってしまった。

その後、皆は顔を合わせてニツコリと笑った。

「裕史、情報は手に入れたか？」

「ああ、もちろんだ」

「ならいい。もう用はない。さつさと帰ろう」
「ああ」

地獄の使者達は意味深な言葉を発してから地獄に帰っていった……

翌朝、今日も野球部は必死で朝練をしている。水袋が回復したため、大牙も元気良く練習している。

水袋たちの登校に気づいた大牙はニッコリ笑ってピースサインをしてきた。

「なあ矢筈」

「どうしたんですか姫？」

「私……やっぱ部活入らないわ」

「話の流れ的に入ってくださいよ！」

こうして体の水氷心を持つものはスカウト出来た。後は暗の水氷心だ！

四十六・リベンジマッチ（後書き）

次話、もうすぐ夏休み！ 水袋たちの予定は？

八「実際ではもうすぐ終わるよね」

水「余計な事言っな」

四十七・夏休み

夏真っ盛りの時期。影月高等学校はもうすぐ夏休みを迎えようとしていた。というか今日が終業式だ。そんな時の3-E教室……

「もうすぐ夏休みだし、どこか行こうよ！ 海とか、海とか、海とか！」

「分かった八千代。海はなしだな」

「酷い……」

水袋と八千代、奏と雛流の4人で夏休みの計画なんかを練っていた。とにかく遊びのことしか頭にない。

ただ、一応は受験生。夏期講習や勉強などでなかなか日にちがあわなかった。

そしてその日のHR……

担任の鈴木先生ミスター・チヨークが話をしている。とりあえずは皆帰りがたい。まあ普通のことだろう。

*

ミスター・チヨークの地獄のHR、そして校長のお話夏の1時間SPを聞いて、やっと帰れる時間になった。今日はどの部活も休みで、水袋は天国護廷7の6人を帰りに誘った。

「珍しいね、水袋ちゃんが一緒に帰ろうなんて」

「まあね」

奏や大牙といった新学期になって新しく入ったメンバーももちろんいる。そこで水袋が急にピタツと止まった。

「矢筈！ 準備は出来てるか？」

「OKですよ。奏さん、大牙さん、動かないでくださいね」

矢筈は両手に白い物体を持っている。そうぶつかったら背中から白い翼が生えてくるやつだ。奏と大牙はまだ天国には行ったことがないので、とりあえず1度は連れて行っておこうという水裳の考えだ。

矢筈は白い物体を思いっきり2人に向かって投げつけた。すると白い翼が背中から生えてくる。もちろんしまうことも出来るので学校に行くにも生活にも困らない。

「よし！ 今から天国に向かう。2人とも気絶しないように！」

「アイアイさー！」

水裳たちは翼を広げ、天国に行った……

*

どんどんと上空へと進んでいく水裳たち。そしてやつと見えてきたところで「あれが天国だ」といい皆がそこに着地する。そこには天等王が出迎えてくれた。

「おお、久しぶりじゃな。水裳、お前は六話で約束したことを簡単に破りおつて……」（もちろん六・学校に戻ろう 参照）

「ああ、そういやそんなのあったな」

「はあ……まあいいじやろう。その2人が音の水氷座に着く者と体の水氷座に着く者か……ってその男気絶しとらんか？」

よく見ると大牙が気絶している。天国にやってきた途端に気絶したそうだ。このまま魂の墓に入れるか……

大牙はほつといて、皆はテラスに行つて話し合いをした。王が話し始めた内容は残った水氷心についてだ。

残る水氷座は暗だ。実はこれがすごい難題なのだ。天国護廷7が完全に完成したのは第16代の火裳姫の時代のみ。その他の姫たちは暗以外は集まったものの、暗の水氷心を持つ者が集まらなかった。その例が海梨姫である。海梨姫は暗の水氷心を持つ者のみ集められ

なかった。そう考えるとやはり火災姫は特別に感じる。

「そこで聞きたいんじやが、暗の水氷心を持つ者の特徴を満たすものはお主らの学校にいるか？」

暗の水氷心を持つ者の特徴は、本当の1人ぼっちで物静か。だが心のどこかで助けを求めている人だ。前からも言っているように、影月高等学校には本当の1人ぼっちという人がいない。物静かな人はもちろんたくさんいるが、心のどこかで助けを求めている人もいない。ということは……

「暗の水氷心を持つものは外部の人っていう事になる」

「そういうことよね……」

「それってかなり難しくない？」

雛流、水袋、奏の天才3人が悩んでいるのを新鮮だな〜といった感じで見ている八千代と須永。

「そこでじゃな。お主らの中に夏休みに旅行に行く人もいるじゃろう。その時に特徴に当てはまる人物を見つけたらすぐに皆に連絡するよつに！」

今年はずただの夏休みが送れなさそうだな……と思う皆だった。

四十七・夏休み（後書き）

ハ「次回予告。ついにやってきた夏休み！　そしていきなりの日曜日！　皆でプールに行くことに！　次回、和の水氷輪、四十八・プール。絶対読んでね！」

奏「というか最近後書きで八千代ちゃんよく出るよね」

ハ「後書き王に私はなる！」

四十八・プール（前書き）

旅行に行つてたため、更新が遅れました。
すいません。

四十八・プール

影月高等学校も夏休みを迎え、部活で頑張る人や生徒会の仕事などで残る生徒はちよくちよくいた。だが初日は日曜日で、どこも休みが多かった。そこで八千代は天国の関係者みんなとプールに行くことを提案した。ほとんどはもちろん快くOKを出したのだが、1人だけOKを出していない人がいた。

八千代はその人と一緒にプールに行くために電話で交渉していた。「ね、お願いだよ。一緒に行こうよ」

「無理！ プールだけは無理！ というか海も無理！」

「もしかして奏ちゃんカナヅチ？」

「……………」

電話相手は音の水氷座につく奏。吹奏楽部の部長でフルートを担当している。その奏がプールは絶対行かないと言い切っているのだ。先程の会話からして奏は泳げないのだろう。

「そんな事言わずに行こうよ。須永君も楽しみにしてるんだよ？」

「いや、あの人は女子の水着姿が見たいだけでしょ（特に八千代ちゃんのこと）」

すると電話の奥から「ちょっと私に代わって！」という声が聞こえた。瞬間的に水袋ちゃんだろうなと奏は思った。しかし、電話に出たのは雛流だった。

「そういえば、天下の部長様が泳げないんだって？」

「だからなにさ。そんな事言ったって、悔しくなって行ったりしないよ？」

「これは翔子にバカにされるね」

「行きます」

簡単に生徒を操ってしまう生徒会長。さすがの一言しかない。

簡単に釣られてしまった奏はベッドの上で四つん這いになってシヨックを受けていた。

＊

そして当日。１人ずば抜けてテンションの高い須永をシラツとした目でみんな見ていた。八千代にいたってはゴーグルをしてバスに乗っていた。大牙は普通の格好……と見せかけて普通の半ズボンだと思っていたのが海パンだった。奏はすでにがっちり浮き輪を装備している。普通の格好は水袋と雛流と矢筈のみ。もうただのバカの集まりだ。

入場券を買い、男女に分かれて更衣室へと入っていった。須永は「向こう側は楽園だろうな」といいながら男子更衣室に入っていた。

プールに出てもトラブルは続く。まずは大牙がいきなりプールに飛び込んで、監視員のお兄さんに怒られた。その後、須永が八千代の水着姿を見て大量出血（鼻血）。八千代はゴーグルしすぎて目が痛いとしばらくプールに入らず。奏は水に足をつけただけでビクビクと恐れている。

（（こいつらは一体何しに来たんだ？）（））

そう思う四十八話のツツコミ担当の３人だった。

しばらくすると、やっとみんなが落ち着いてきた（須永は今も出血中）。ここからがツツコミ担当の出番である。翔子にバカにされないよう、奏に泳ぎを教えるのだ。何でも出来る生徒会長雛流、運動神経のいい水袋、色々出来そうな矢筈。これだけのメンバーがいれば大丈夫だろうと思ったとき……

「おいおい。何のための体の水氷心だと思ってるんだ？　ここは俺に任せな！」

色々と危なっかしい大牙が出てきた。

ということで、大牙のレッスンがスタートしたのだが……

「よし！ バタフライやってみる！」

「レベル高っ！」

レベルがいきなり高すぎるので大牙はそこら辺で泳いでってもらうことに。

次は須永。だが……

「えへへへ…… 奏ちゃんもなかなか……」

変態まるだし&奏の身が危険&プールが赤色になるので須永は病院に連れて行くことに（精神科）。

次は八千代。

「ではまず顔を水に…… ってギャアアアアア！ 目が！ 目がアアアアアアアア！」

目が痛いので八千代は病院に連れて行くことに（眼科）。

で、結局水袋。

「泳ぐ前に顔は水につける？」

「出来るよ。もぐることは出来ないけど」

「じゃあ、ここを掴んでバタ足から始めよう」

「はい」

水袋のレッスンは順調に進んでいるようだ。雛流と矢筈はカキ氷を食べながらその様子を見ていた。

最終的にはバタ足だが25mは泳げるようになり、満足して帰ることが出来た。

*

そして帰り道、帰る方向が一緒の雛流は奏と今日のプールについ

て話していた。

「どうだった？ 楽しかった？」

「楽しいわけないじゃん。でも……」

「でも？」

「水袋ちゃんって、すごく接しやすい人だね」

「周りが変人ばかりだから、向こうも奏さんみたいな真人間は楽だ
と思うよ」

「そうかな」

ちよつと奏は嬉しそうだった。

こうして奏は泳げるようになって、翔子にバカにされずにすんだ。

ちなみに須永は……

「診断結果は、驚くほどバカです。頭が逝ってます」

「ここの精神科酷い！」

四十八・プール（後書き）

〽八千代のプロフィール！〽

身長：154cm

体重：これを書こうとした作者死ね！

髪型：ピン止めつけたショートヘア。色は紫。

3サイズ：これを書こうとしたvaz死ね！

雛「色々と罵声があるわね」

八「仕方ないじゃん」

次話、暗を探せ！です！

四十九・暗を探せ！（前書き）

遅れてすみません。

理由は宿題だったり宿題だったり宿題だったり……
宿題です！

その上短いですが、どうぞ！

四十九・暗を探せ！

プール以降、部活があったり、旅行に行ったりとなかなかみんなで会う機会がなかった。相変わらず引きこもっている水氷は八千代とマリ○カートをやっていた。

「しっかし暇だな」

「そうだね。そんな事言つてると赤こうら投げるよ？」

「ああ！ ちよつと待て！ ってもう投げてるじゃねえか！」

しばらくすると何もかもが退屈になった2人はとりあえずショッピングモールに向かった。アイスを買うついでに暗の水氷心を持つ者を探そつかということになり、2人はショッピングモール「NEON」に向かった。

とりあえずハーゲンダックスを買って食べながら、暗そうで1人ぼつちな人を探していた。だが……

「よくよく考えると1人ぼつちでショッピングモール来ないよね……」

「八千代の癖によく気づいたな」

2人はもう1つ「あつ、爽」というアイスを買って帰った。

その後家に帰り、暗の水氷心を持つものがどういうところにいるかを考えた。その結果、暗の水氷心を持つものは引きこもりなんじゃないかという事になった。

「八千代は明日から旅行だよな？」

「うん、ごめんね。あまり役に立てなくて……」

矢筈は天国で色んなことを調べてくれているが、他の天国護廷7のみんなは、雛流は生徒会の仕事で忙しい。奏は吹奏楽のコンクール間近ということで練習に熱心。大牙も同様に野球の大会真っ最中で水氷心探し所じゃない。八千代さっきの会話通り旅行へ。須永は

入院中。（大量出血のため）ということは……

「しばらく私と矢筈だけでか」

「ごめんね」

「いいって。それより土産くれよな」

「うん。分かってるよ」

暗の水氷心……夏休み中に集めないと厳しくなる。集められるだろうか……

*

そのときの某所での出来事……

周りは真っ暗で目の前にはその国の国王がいる。王に呼び出された人は普通にやってきた。

「何の用でしょうか？」

「貴様を呼んだのは他でもない。お前に言わなければいけないことがある」

「言わなければいけないこと？」

その人は普通に疑問な表情を浮かべる。すると王はニヤツと笑って、横に男を出す。

「紹介しよう。彼の名は恭賀^{きょうが}。お前の代わりに職に就く男だ」

「それって……！」

「ああ、お前は……首だ」

「そんな……ちょっと待ってください！ 何故いきなりそんな……」
「必要のないやつは首にする。当たり前だろ？」

そう言って王はその人を突き落とした。その人は翼を広げようと
するが翼が出ない。

「役立たずに翼はいらん。じゃあな」

そう言って王は戻って行った。

その人はそのまま落ちていってしまった……

四十九・暗を探せ！（後書き）

ハ「私はこれから旅行に行く！ 海だ！ その間、後書きでの会話、次回予告は水裳に任せる」

水「任されても困るな……」

ハ「では、どうぞ！」

水「はいはい。次話、私の所にあるものが……？ 記念すべき五十話、お楽しみに！」

五十・落ちてきた少女（前書き）

五十話達成！

早いな。もう五十話か……

これからよろしくです！

五十・落ちてきた少女

天国護廷7のほとんどのみんなは旅行や部活やらで日向町にいるのは水裯と矢筈と雛流くらいだった。雛流は生徒会の仕事で忙しいし、矢筈は天国での仕事や地上での仕事の疲れが出て、今は寝込んでいるらしい。どうやらしばらくは水裯だけの暗の水氷心探しとなりそうだ。

今は夜の10時くらい。扇風機だけで過ごすにはなかなか難しい暑さだった。

そのまま眠れず、時間は0時になっていた。とりあえず起き上がった水裯は、眠たくなるために小説を読み始めた。しばらく読んでいると……

「ん？ 何か外で大きな音がしたような……」

外でドシン！ と大きな音がした。しぶしぶ窓を開けてみると、信じられないものが落ちていた……というか倒れていた。

「あれって……人じゃないか!？」

黒い服をきた可愛い女の子だった。おそらく日向町の住人じゃない。長い間日向町に住んでいる水裯だったが、1度も見たことのない少女だった。

ほっとくわけにもいかないので、水裯はとりあえずその少女を部屋の中に入れた……

*

しばらくすると目を覚ました少女はすぐに起き上がり、辺りをきよきよとして、水裯の姿を見て驚いた表情を浮かべた。

「天国の……姫……」

「!?! 何でその事を……」

水裯もその発言には驚いた。ということは……天国に関係がある

人という事になる。水袋はじーつとその少女を見た。するとどこかで見覚えのある顔だった。綺麗な銀髪のアトレートに長くのびた髪キラキラ光る碧眼……

「もしかして……地獄の暗の黒暗座に着いていた人じゃない？ 出来れば名前教えてよ」

「まあ……間違っ**あ**てはい**い**ないですね。名前は愛沢冬菜あいざわふゆなです。あなたは和月水袋でしたよね？」

「うん、そうだよ」

そう、この少女は暗の黒暗座に着いていた者だった。黒眼などの技でとても苦戦した相手だ。

「で、あんな夜中に、しかも道の真ん中で何で倒れてたんだ？」

その質問を聞いた冬菜は少し悲しそうな顔をして、普通に答えた。「捨てられたんですよ地獄に。私みたいな力不足は必要ないという事でしょう」

水袋は普通に驚いた。あんなに強かった冬菜が捨てられたという事実に。それを聞いた後に冬菜を見ると、なんだか弱々しく、今にも綺麗な碧眼から涙が出そうだ。

するとスクツと冬菜が立ち、水袋の家から出ようとした。

水袋は無言で冬菜に着いていった。

「本当に行っちゃうの？ 何なら私の家で休んでもいいけど？」

「いえ、これ以上迷惑をかけるわけにはいきません。助けてくれたことを感謝します。和月姫」

「別にいいけど……」

そう言っ**て**冬菜はドアを開けて外に出て行**っ**た。ドアを開けた瞬間に太陽の明るい光が差し込んでくる。

すると、冬菜がその場でバタリと倒れた。

「おい！ 大丈夫か！？」

水袋が駆け寄る。意識はあるようで「大丈夫です……」と小さな声で言**っ**た。このままほ**っ**とくわけにもいかず、自分の部屋に連れ

て行き、部屋を涼しくしてベッドに寝かせた。
そこで水袋は心の中で思ったことがあった。

（捨てられた1人ぼっち……クールで物静か……助けを求めているかは分からないけど、もしかして……！）

ほとんどが当てはまった。暗の水氷心を持つ者の条件に……

五十・落ちてきた少女（後書き）

水「え、次話、逃走です」

五十一・ いらない迎え

何もかもが暗の水氷心に当てはまる……しかも地獄の者が。

水氷にとつては考えられないことだった。水氷心つて地獄の者にも当てはまる物なのか……そういった疑問を持たざるを得なかった。今、冬菜は水氷のベッドで寝ている。外に出た途端に倒れて、それっきり目を覚まさずただ寝ていた。大量の汗が冬菜から出ていた。——しかし……何でいきなり倒れたんだ？ 倒れていたにしろ、顔色は決して悪くなかった。外に出た瞬間にいきなり倒れだす……確か冬菜は地獄の中では光に強かったはずだ。光の影響じゃないのか……？

そんなことを考えていると、ゆっくりと冬菜が起き上がった。さつきと同じようにきよるきよるしている。

「びっくりしたよ。いきなり倒れるんだから」

「……すいません」

「別にいいって。まだ苦しいんだったら家にいなよ」

「いえ、体は大丈夫なんですが……光が……」

「光？」

冬菜によると、地獄の者は黒暗座に着くことで力を得る物らしい。水氷座みたいに着いても強くはならないの真逆だ。冬菜は今、黒暗座についていないがために、光の強さに負けてしまったと。

「てことはさ、冬菜って外に出られないんじゃないじゃ……」

「夜に出れます。街灯くらいの光なら大丈夫です」

そう言つて冬菜は夜に出て行くことを決めた……

*

あつという間に夜が来て、今度こそ冬菜は出て行くことにした。「では、改めてお世話になりました」

「いって別に。気をつけてね」
「はい」

小さく返事をして冬菜は水袋の家を出て行った。
その後に水袋が大きな声で冬菜に呼びかけた。

「冬菜！ 苦しくなったらまた来いよ！」

それには返事をせず、冬菜は暗い道を歩いていった。

*

——これからどうしよう……

冬菜は道を歩きながら考えていた。

もちろん行く場所なんて無く、ただ水袋に迷惑をかけたくなかったから出ただけだ。

それに敵である天国に助けてもらうというのは、地獄にとっては恥じるべき行為だ。捨てられたはずなのに地獄の事を引きずってしまっている。冬菜は本当の1人ぼっちだ。

冬菜は店などに行くことも出来ずに、お腹が空き、眠たくなる。

これこそが本当の地獄だ。今まで普通にやってきたことが何1つ出来ない。

——やっぱり泊めてもらえば良かったのかな……

そんな甘いことも考えてしまった。それほどに苦しかった。（こんなのただのやせ我慢だ）と冬菜は思った。そんな自分が嫌で嫌で仕方がなかった。

「お！ こんなところにいたか」

突如、後ろから声が聞こえた。普通に振り返ったが、信じられない人がそこにいた。

「恭賀……！」

冬菜の後についた暗の黒暗座に着いている男、恭賀だった。

「……何しに来たんですか？」

「決まってるでしょ。冬菜さんを迎えに来たんだよ」

「迎えに？」

「そうそう。俺ってさ、自分より弱い先輩って嫌いなんだよね。それなのに以前の天国戦では大活躍をしている。自分より弱いくせにそっちの方が名に残る。これが1番嫌だからさ……死んでもらいます」

そう言っただけで、1本の剣を振り下ろしてきた。何とかかわした冬菜だが、以前よりもだいたい体が重い。勝てる気がしなかった。

それでも戦うしか道が無いと思った冬菜は、双剣を取り出して、戦う覚悟を決めた。

五十一・ いかない迎え（後書き）

水「次話、戦いの果てに冬菜が恥じるべき決断を……？」

五十二・捨てたプライド

双剣を構えた冬菜は早速、恭賀に斬りかかる。

しかし、今までの何倍……それほど大袈裟にいつていいほどに体が動かなかった。今まで相当軽かったことを考えると、まるで何十キロの重りを全身に巻きつけている、冬菜にはそういった感触だ。もちろん恭賀に傷をつけることは出来ず、あっさり避けられてしまった。

「鈍いね。黑暗座に頼っていたのがとっても分かるよ。先輩」

「……………」

恭賀のいう事は一理あった。今まで自分はこんなにも黑暗座に頼っていたのか……と自分が恥ずかしくなる冬菜。

あの時はどれだけでも動けたのに、1回の攻撃でこんなに体が重く、疲れたのは初めてだった。

動こうとしても体が抵抗して動いてくれない。そんなことが今まであっただろうか。

色んなことを頭の中で考える冬菜。そして自分の弱さに気づいた表情で恭賀をにらむ。それは悲しかったのか、嫌だったのか、冬菜自身も分からなかった。

ただ、とりあえずは攻撃するしかないということだ。

冬菜は再び双剣を構えて恭賀の方に走っていった。

だがあっさりかわされてしまい、恭賀が後ろに回って、剣を冬菜に向ける。

「本当に弱いな。今までこんなやつが黑暗座についていたとはね

」

「……………」

冬菜は無言で立ち尽くすだけだった。下手に動くと刺されて死ぬのがオチだ。何故か分からないが自分の中に生きたい自分がある冬菜。

「……殺したい割に刺さないんですね……」

「ん、まあ一応先輩への敬意ってやつかな？」

「殺そうとしてる時点であなたに敬意はないですよ」

「まあ、そうかもしれないけど……だからある人と呼んでるんだ」

「ある人？」

「お願いしまゝす」

すると、空から漆黒の翼を広げて冬菜の元にやってきた。そいつはよく見覚えがある奴で、冬菜は正直こいつが苦手だった。

「風定……」

「よ！ 捨てられた冬菜」

恭賀は何故風定を呼んだのか。それは簡単だった。単に1番力が強いし、風定は冬菜の事が嫌いだからだ。

冬菜はもう戦う気はなかった。というか戦えなかった。自分には力がない、その事が分かってしまったから。

だから冬菜は……

逃げることを選択した。

冬菜の考えでは、おそらく風定は、黒暗定紋風雷斬でとどめを刺そうとするに違いない。その時に発生する砂煙と冬菜の技で……うまく逃げるしかなかった。

そして展開は思うようにいく。

「じゃあな、冬菜。黒暗定紋風雷斬！」

大きな黒い斬撃が冬菜に襲い掛かる。しかし想像以上の砂煙に、しっかりと斬撃の姿が確認できない。

だから冬菜はいちかばちかで技を放った。

「黒旋風！」

黒い旋風が冬菜を包み込み、自分を側にあつた家の屋根に移動させる。そして砂煙がおさまる前に逃げた。

「ちっ、逃がしたか」

「まあいいでしょう。すぐに見つけれます」

「そうだな」

冬菜は昔から、仲間には戦いの時に頼るな。そういったことを教えられた。戦士たるもの、敵に背中を見せるな、仲間に頼るな。冬菜の家の家訓だった。

しかし今の冬菜は、自分のプライドを捨ててでも勝とうとしていた。

あの言葉を思い出してしまっ……

『冬菜！ 苦しくなったらまた来いよ！』

五十二・捨てたプライド（後書き）

八「ただいま」

水「あ、帰ってきたんだ」

八「これからまた活躍するよ」！

水「悪いけど冬菜たちの戦いが終わるまで出番ないよ」

八「泣」

水「次話、冬菜がとった行動とは？」

五十三・頼る

ひたすらある場所を目指して冬菜は走り続けた。勝つために。目的地についたところで、インターホンを押そうとする。来たのはある人の家だ。

そのときにはもうすでに先回りされていた。

「先輩。こんな家に何か用ですか？」

「和月……天国の姫か」

顔が熱くなってきた。地獄の知り合いに、天国の姫に頼っているなんて知られるのは恥ずかしいに決まってる。最大の敵である天国に頼る元黒暗座に着いていた地獄の使者。向こうからしたらこれほどおかしいことはないだろう。

「こんなのに頼っても何もないぞ。天国護廷7に頼っているただの弱虫だ。それは冬菜、お前が1番知っているだろう」

「……………」

確かにあの時の地獄戦では簡単に勝ってしまった。風定の言うとおり、冬菜にとって水滸は天国護廷7の仲間に頼っている、権力だけを持っている人だと思っていた。

だけど、今回の事で冬菜の考え方は変わったのだった。

「彼女が頼っている天国護廷7は、必死で彼女を守ろうとしている。それは天国護廷7も彼女を信頼し、頼りにしているということです」

その答えを聞いて、風定がニヤツと笑って、冬菜のほうを見た。

「変わったなお前。あんなに人を信頼しないお前が人を信頼するとはな……だったら、本当の信頼を見せてみる」

「本当の信頼……？」

「ああそうだ。今日の前にあるインターホンを押してみる。本当に信頼してるなら、自分の羞恥心を捨てても頼ってみるんだな。まあ、向こうが頼ってくれてとは限らないけどな」

冬菜は一瞬戸惑った。押すか押さないか。自分のプライドが大切

か、初めて出来た頼れる人が大切か。

冬菜の答えは決まっていた。

冬菜は人差し指でしっかりとインターホンを押した。ピンポーンという音が水袋の家に響き渡る。

そして水袋が話しかけてくる。

「あれ？ 冬菜、どうした？」

「……苦しくなったからここに来ました」

「……………」

そこからは冬菜は涙を流し、涙声で水袋にお願いした。

『助けてください……！』

その言葉を聞いたとき、外から笑い声が聞こえた。「本当に恥ずかしい姿ですね、先輩」といった笑い声が。

それに対して水袋は当たり前のように答えた。

「分かった。私の出来ることは絶対にやりきる。それで、今冬菜を馬鹿にしたやつを叩き潰してやる。それと……頼ってくれてありがとうね」

そう言って水袋は表に出た。

外に出ると冬菜と2人の男がいた。風定のことは水袋は知っている。さっきの笑い声は風定でなかったことぐらいもすぐ分かる。

そうだとしたら、もう見るのは1人しかない。

「お前か」

「初めましてお姫様。暗の黒暗座に着く恭賀と申します」

「天国の姫、和月水袋」

そう言って水袋は和の水氷輪の型になる。

水氷扇を恭賀たちに向けて、冬菜に語りかけた。

「冬菜、倒そう。冬菜を足手まとい扱いする奴を」

「……はい！」

こうして再び戦いは始まった。

五十三・頼る（後書き）

次話開戦！

八「作者！ 私の存在忘れてないか！？」

五十四・水神打撃と二刀流剣

水裳が加わり、再び戦闘は始まった。

冬菜が先ほどの戦いで傷を負ってしまったので、戦闘では珍しく水裳が前の方に出て戦闘を開始した。

すると、やはり攻撃国の地獄は、しっかり水裳たちの陣形を崩す体制をとってくる。もともと水裳たちの作戦は、冬菜に負担がないように水裳がカバーするというものだったのだが……最悪な状況になってしまった。なんと冬菜を倒すのに上がってきたのは風定だった。そして水裳は恭賀に進路を塞がれた。

「ほーら、僕を殴るんでしょ、お姫様？」

「なめやがって……！」

とかいいつつも、水裳には対策があった。親もおらず、実質1人暮らしの水裳は、みんなと違って旅行なんかに行かないのである。つまりは……天国に引きこもっていたのだ。

「ちゃーんと殴ってやるよ！」

そう言つと水裳は胸の前で腕をクロスし、そこから勢いよく両腕を広げた。すると水裳と動きがシンクロする魔人が後ろに現れた。そこから空へ飛び、手を握った状態で上に挙げて殴りかかる格好になる。

「天国引きこもり生活で身につけた技！」

『水神打撃……！』

その魔人をコントロールして、恭賀を思いっきり叩きつける。

地面がめちゃくちゃになり、大きくへこんでしまった。

恭賀からは大量の血が溢れ出した。そしてその場で倒れてしまった。

＊

逆に冬菜は苦しい戦いとなっていた。力を失った自分と、地獄最強の力を持っている風定。敵わないなんて冬菜は理解していた。

それでも冬菜は戦い続ける。死んでも変わらないはずなのに生きるために戦い続ける。

ボロボロになりながらも、双剣を落とすこともしまうこともなく立ち向かい続ける。そして……

冬菜は決して風定に背中を見せなかった。

それで冬菜は覚悟を決める。今の体には負担が大きい技、それを使わざるを得ないと考えた。

「黒暗定紋二刀流剣！」

黒い大きな双剣へと化した冬菜の双剣。あの時楽に持っていた双剣は、今の体にはずっしりと重く感じた。

それでも双剣を落とすことなく、背を向けることなく冬菜は攻め続けた。

その行動にイライラし始めている風定は、さっさとケリをつけてしまおうと思い、剣に黒い妖気を纏わせた。

それに反応した冬菜も、双剣に黒い妖気を纏わせる。

そして2人同時に攻撃を放った。

『黒暗定紋風雷斬！！』

黒い2つの斬撃同士がぶつかり合い、大きな爆発が起こる。

煙がおさまったときに見えたのは、冬菜の倒れた姿だった……

五十四・水神打撃と二刀流剣（後書き）

ここで、重要なお知らせです。

この作品、和の水氷輪を、作者の事情により、しばらく更新停止、休載いたします。

少ないとは思いますが、読んでくださっている方にはご迷惑をおかけすることをお詫びいたします。

再開は10月中と考えています。

それまで待つてくださると嬉しいです。

五十五・水氷黒暗の旋風陣（前書き）

これまでのあらずじ

普通の高校生活を送る水裳の前に突如現れた天国の使い風丸矢筈。彼女を脱走した天国の姫と勘違いし、天国へ連れて行ってしまふ。

やがて、誤解は解けるのだが、天国の姫が重病に！

再び矢筈は水裳のところに現れ、姫を助けて欲しいと告げた。水裳には姫を救う和の水氷心をもっていたからだ。

姫の危機を救った水裳は天国の第53代姫に命じられ、天国の姫としての生活が始まる。

すると話は地獄との対決の話になっていき、その他の水氷心を持つ者を探すことに。

雛流、八千代、須永、奏、大牙といった5人が仲間になり、残り
は1人！

しかしその1人がどの代も苦勞した暗の水氷心。地上にはまず存在しないものだった。

夏休みに入り、みんなは旅行に行く中、水裳は現在1人暮らしのため、家にいた。

すると1人の少女が落ちてきて、ほっとけなかったので保護をした。

その少女は暗の黒暗座についていた冬菜という人だった。地獄護
廷7をクビになり、行き道がなかった冬菜。

そんな時、新たに暗の黒暗座についた恭賀と、力の黒暗座につく
風定が冬菜を取り返しにやってきた。

力がなくなった冬菜は、地獄に戻りたくない思いと、水裳の思い
が合わさり、恥を忍んで助けてくださいとお願いをした。

再び戦いは始まり、水袋&冬菜VS風定&恭賀の対決が幕を開けていた……

更新遅かったから話し忘れたわ！ このポンコツ！ という方が多いかと思ひまして、ざっくりとあらすじを書いておきました。
更新再開いたします。

……が、作者に義務教育のラスボス、受験が襲いかかろうとしていまして、また長期活動休止に入らせていただきます。
多大なご迷惑をおかけしてすいません。

この話と次話は更新出来ると思いますので、よろしくお願いします。

五十五・水氷黒暗の旋風陣

「冬菜……」

自分は勝利したものの、肝心な冬菜が大きく傷ついてしまった。

水袋はすぐさま冬菜の元に駆け寄り、水氷輪の力を使って回復させる。その様子を見た風定が水袋に言った。

「ロクに人も守れない姫か。本当にお前は天国護廷7に頼ってばかりだな。地奈姫とは大違いだ」

「……………」

水袋はそれに反論しなかった。なぜかという、それが真実だからだ。水袋もどこかで思っていた。自分は弱い。人に頼っている力なき者。ただ権利を持っているだけの人。その言葉が水袋の全身を駆け巡る。

水袋は勝てるかもしれない勝負を投げようと今思った。力ではなく、精神面でやられたのだ。

「そうかもしれない。私……力も心も弱いな……」

そう言ったとき、水袋の足元から声が聞こえた。

「それは……間違いです……」

何と冬菜が精一杯の力を振り絞ってそう言った。冬菜は自力で立ち、震える足に耐えながら水袋の肩を持ちながら、まっすぐに見つけて言い放った。

「あなたは敵である私を信じてくれた！ 畏かもしれないのに助けた！ そんな人の心が弱いなんてありませんか!？」

水袋には分かった。冬菜は自分の体を心配するよりも水袋の方を気にした。これは冬菜なりの恩返しだと。冬菜の目は「これはあなたから学んだものです」と語っていた。

「そういうことで、死んでもらうぜ」

風定はすでに剣を振り上げ、水裳に斬りかかろうとしていた。

「黒旋風！」

それを冬菜の黒旋風で弾く。手からでた爆風が剣を飛ばし、拾えないところまで飛ぶ。背中を見せたら危機一髪という状況を風定に突きつけた。

その技を見て水裳はあることにひらめいた。

それは天国で引きこもり特訓をしていたとき、休憩中に図書館により、本を読んでいたときのことだ。

少しでも暗の水氷心のことについて知っておきたかった水裳は、色々とそれに纏^{まつ}わる本を読んでいた。そのときに見つけた技がある。

『水氷黒暗の旋風陣』

暗の水氷心を持つ者と和の水氷心を持つ者との連携技。2人で旋風陣を放ち、真っ黒な旋風陣と水色の旋風陣が合わさってできる暴風の必殺技。その威力は計り知れないと書いてあった。

それをこんな不利な状況で思いついた水裳。

恭賀も起き上がり、「殺してやる」といつて近づいてくる。風定も力の黒暗座につく者。剣を弾いたところで戦力は変わらない。

（やってみるしかないか……）

水裳は冬菜の手を握り、水氷扇を高らかに上げた。

「和月姫……？」

「倒そう、あいつら」

「……はい！」

冬菜もしっかりと水裳の手を握り、左手を大きく上に挙げた。そして2人で旋風陣を発動させる。真っ黒な旋風陣と水色の旋風

陣が合わさり、綺麗な紺色の爆風へと姿を変える。そしてそれを2人に目掛けて発射する。

「おいおい、何ですかあれ!？」

「……………っ!」

「暗の水氷心と和の水氷心の連携必殺技!」

『水氷黒案の旋風陣!!!』

大きな爆風が2人に襲い掛かった……

五十五・水氷黒暗の旋風陣（後書き）

ハ「お久しぶり！ みんなのアイドル、八千代だよ！」

水「ストレスの塊、八千代だよ」

ハ「地獄に落ちるがいい！ 水袋！」

水「生憎私は天国の姫だ。地獄に落ちない」

ハ「ぐぬぬ…… やつと更新再開したかと思えばポンコツ作者がまた長期活動休止するだど！？ 私の出番なしに活動休止するつもりか！？」

v a z「はい、そうです」

ハ「おのれ……」

水「まあ、いいじゃないか。後書きでさえ出してもらえないやつが5人ほどいるんだから」

ハ「そ……それに比べればましか……」

水「ああ、むしろ恵まれている。さあ、次回予告を！」

ハ「次回、（五十六・入ってきた少女）。作者は少女をタイトルに入りたいようだ！」

水「では……」

ハ&水「次回もよろしくお願いします！」

五十六・入ってきた少女（前書き）

臨時復活期間を使つて書きました。

もしかしたら12月中は書き続けるかもしれません。

五十六・入ってきた少女

水色と黒色の混じった藍色の風が風定と恭賀に襲い掛かった。

その旋風は空を渡り、二人に天罰を与えているかのようだった。

あまりの風の強さに、二人は吹き飛ばされてしまう。服はびりびりに破れ、傷もかなり大きな物だった。

「……なんであいつらあんなに怪我してるんだ？」

水袋はそれが不思議だった。

水袋が発動させる『氷の旋風陣』はただの吹雪と違っていい技だ。その中に小粒の氷が何個も入っている。そして相手に襲い掛かる、まさにブリザードなのだ。なので、体が冷えて固まることは普通にあるが、服が破れたり切り傷が出るようなことは一切ない。

そんな疑問に対し、冬菜があつさりと答えた。

「私の黒旋風には小粒程度の刃が入っているのだから」

「ああ、なるほどね」

その刃が二人を切り裂いた、ということになる。そして二人は凍ってしまつて動かない。まさに最高のコンビネーション技なのだ。

しばらくすると風定が動けるようになり、恭賀を抱えて水袋たちに言った。

「今回は俺たちの負けだ。だが、次の戦争では負けねえぞ」

そう言つて風定は暗黒の翼を広げ、地獄へと帰つていった。

「一件落着……だね」

「そうですね」

二人は顔を見合わせ、少し笑った。すると冬菜が急に頭を下げ、お礼を言った。

「助けていただいてありがとうございます。……では」

冬菜は水袋にそう告げ、水袋から離れていった。

「ちよーつと待て！」

水袋が大きく手を広げ、そう言った。

それに驚いて冬菜は振り返る。水袋はニツと笑って、提案をした。

「暗の水氷座に着け！」

「……は？」

まさかの提案に冬菜はクエスチョンマークを浮かべる。そして少し俯いて考え出した。

「どうせ行くとこないんだろ？ だったら、私たちの仲間になれ！」

「……ですが、私なんて何の役にも立ちませんよ。必要ないですよ、今の天国に私は」

「必要だから誘ってるんだ！」

「……………」

そう言われて冬菜は再び俯いて考え出した。

——初めて………と喋っていいほどに心が揺らいでいる。絶対に存在しないであろうと思っていた人が目の前に存在している。自分を必要とする人。

冬菜の心は、完全に偏っていた。一つの意見に。

冬菜は綺麗な白い手を前に差し出し、決意の言葉を言った。

「よろしくお願いします。私が、姫を守ります」

それに水袋はニツコリと笑って答えた。

「こつちこそ、よろしく」

こうして、最後の水氷座、暗の水氷座も埋まって、一番寒い夏は明日を迎えた。

五十六・入ってきた少女（後書き）

ハ「やつと次から私が出るんだな！」

水「まあ、そうだね」

冬「何ですか？ このテンション高い人は」

ハ「てめえこそ誰だよっ！！」

次回、「五十七・八千代さんが帰ってきた」よろしくお願いします！

五十七・八千代さんが帰ってきた

「お……おおおお？」

ついさつき旅行から帰ってきた八千代は水袋の家に入ったとき、ただただ驚いた。まさかの光景が目の前に広がっている。綺麗な銀髪のストレートで、沖縄の海のように透き通った青い目。この脱力感あふれる少女を見て、八千代は驚いていた。

「……産んだの？」

「産むか！」

八千代の問いかけに全力で水袋はつつこんだ。

「じゃあ何さ！ 産む以外にどうやったら家に少女がいるようになるんだよ！」

「拾った」

「……………」

ずばつと冷たい回答に八千代は凍りつく。

「そういう方法があったのか……」

また、拾ったという事実には違和感を持たないあたりが八千代である。

そんな意味の分からないプロローグも終え、八千代は水袋の部屋にある座布団に座り、冬菜をまじまじと見続ける。

冬菜は一切表情を変えず、まっすぐに八千代を見つめている。

「……で、この子の名前は？」

「やっと聞くんだな。愛沢冬菜。暗の水氷座に着く者だ」

「どうも」

またまたその事実には驚く八千代。無理もないだろう。以前戦った相手がこうして目の前で仲間になっているのだから。

「前に……出会ったこと、あるよね？」

「はい。私があなをボコボコにしました」

「こいつ嫌い！」

八千代は泣きながらそう叫んだ。おそらく冬菜も八千代が嫌いなのだろう。テンションが高い人が苦手そうな顔と性格しているからそれに、明と暗。水氷心の名前からして相性が悪い。

こんなので大丈夫か、と、水袋は心配になるが、とりあえずあることを提案した。

「じゃあ冬菜、八千代。天国に行つて紹介しに行こう。この事實はまだ私と八千代しか知らないんだし」

「……それはお断りします」

何とその提案を冬菜は断った。

その言葉に水袋は驚いた。八千代は少し笑顔になりながらも、頑張つて驚いた表情を作り出した。

「地獄の者が受け入れられるか怖いかな？ 大丈夫だよ、みんな優しいから」

「いえ、そうではなくてですね……」

「どうということ？」

「私自身が、天国の光に耐えられないのです」

以前の戦いからも分かるように、地獄の黒暗座は、その黒暗座に着くことによって力を発揮する。水氷心にはそんな力はなく、今の冬菜は本当の自分の力しか持っていない。地獄からすると、天国はとても明るいところで、目が耐えられないそうだ。ダークアイという冬菜の技も、かなり大きな負担があるので、そう簡単に日常的には扱えない。

「……どうしたらいいんだ……」

水袋も真剣に悩む。どうしたら冬菜に害がなく天国に入れるか。

「水袋。とりあえず矢筈君呼んだら？」

「ん。ああ、そうだな」

そう言つて水袋は天国特有の携帯電話らしき物を取り出し、矢筈

と会話をした。

もちろん、こっちに来て欲しい、とだけ言った。

しばらくすると矢筈がやってきて、また驚いた表情を浮かべる。

「地獄の者が……暗の水氷座ですか。考えもしなかったことですね……」

誰よりも驚いていたが、すぐに了解し、事情も大体把握した。

「そういうことですか……てことは、ついにまともな出番が来たわけですね」

「まともな出番？」

「ええ、この状況を解決できるのは……離流さんです」

離流が鍵となる。一体どういうことなのか……

五十七・八千代さんが帰ってきた（後書き）

雛「えええええ！？ やつと出番かと思ったらこんなにでかいことなの！？」

矢「はい。よろしくお願いします」

次回、「五十八・知の本業」よろしくお願いします！

五十八・知の本業

「雛流が鍵となるってどういうことだよ？」

矢筈の言ったことをもう一度繰り返し確認して、水袋は言った。

「まあ、知の水氷座に着く者の本業というやつです。元々知の水氷座に着く者は開発等をメインにやっていた人たちです。魂の墓を発明したのも、火袋姫時代の知の水氷座の者が作ったものですし」

知の水氷座の本業という物は、開発をメインとしている。それを象徴するように、魂の墓を作り上げたのも知の水氷座だ。

矢筈は知の水氷座に着いている雛流に、冬菜が害なく天国へ入れるような道具を作ってもらうという考えを示したのだ。

「だけどさ……雛流にそんなことできるかな？ 確かにあいつは賢いけど……えぐいほど機械音痴だぞ？」

水袋は昔から雛流と遊んでいた。いわゆる幼馴染というやつだ。

水袋が、雛流が機械音痴なのを知ったのは六歳ごろ、小学一年生のときだ。

そのくらいの時期の子供はゲームにはまり出したりする。無論、水袋と雛流もそうだった。

そのころはゲームガールアドバンスというものが流行っていた。その中でもペケモンというゲームが流行っていた。その流行に乗って水袋と雛流もペケモンを買ってプレイしていた。

ボタンはA Bボタンに十字ボタン、スタートボタンとセレクトボタンという、少ない操作で楽しく遊べるという利点があった。そう、水袋も操作自体は簡単に覚えることができ、序盤から楽しく進めることに成功した。

しかし雛流はというと、移動はどんな初心者が考えても十字ボタンなのに、A Bボタンで移動すると思っていられない。また、決定ボタンは明らかにAボタンなのにスタートボタンだと思っていたり、

とにかく心配なほどに操作ができなかった。

それ以来雛流はメディア関連の物には関わらずにやっている。

生徒会の仕事も紙にシャープペンシルと、現代人とは思えない装備である。

「……そうだったんですか。何でも出来そうな人でしたけど」

「メディア系は全くダメだな」

そう言っただけで水袋は立ち上がり、受話器をとり、電話番号を押した。もちろん、雛流の電話番号だ。

「もしもし？」

「おお、雛流か。ちょっとお願いがあるんだが」

「何？」

「作れ」

「何を！？」

「冬菜が天国に害なく入れる装置」

「ちよっ……誰！？ 冬菜って！？ 色々状況が掴めなんだけど！？」

ちっ、頭の悪いやつめ、と水袋は思った。

そして今すぐ水袋の家にやってくるように言い、電話を切った。

雛流がやってきて、状況を説明し、雛流は一回で理解した。そこから辺が八千代と違って楽だ。

「つまり、知の水氷座の本業である開発を活かして、地獄の使者の冬菜ちゃんが苦しいことなく天国へ入れる装置を作って欲しいと」

「ああ、そういうことだ」

「でも……水袋は知っているとおり、機械系は全く持って無理よ？」

「バカヤロー！ ここでやらなかったら出番がなくなるぞ！」

「やるわ」

あっさりOK。やはり十話ほど出ていないと出番が欲しいそうだ。

こうして開始された開発。果たして雛流は完成させることが出来るのか？

五十八・ 知の本業（後書き）

雛「ここで大切なお知らせをします」

水「あれ？ 何で雛流？」

雛「八千代さんと重要なお知らせを任せられないという作者の考えによって」

水「なーる」

雛『というわけで、お知らせをします

この和の水氷輪を定期更新にします。毎週金曜日18時に更新されます。本格的に受験に入る前に3月分まで投稿できるよう頑張ります、と作者が言っていました』

では、次回もよろしくお願いします。

五十九・意外な共通点

雛流は天国にある科学技術室へと入り込み、図書館から持ってきた資料などを活用して、開発を進めていた。

「いつても、何から、どういう形、という、初歩的な設計が全く思いつかないのだ。」

「どんな物が逆にいいのか、という参考もないままに始まる開発。まるで手本がなく日本が初めて作った炊飯器のようだ。」

目の前にある物は、機械的な物ばかりで、雛流が一番苦手としている分野に取り囲まれていた。

雛流は端に置いてあった小汚いイスを簡単に拭いて座り、しばらく考え込んだ……

一方、水袋たちは、奏、大牙といった冬菜をまだ知らない人たちを家に呼び、紹介していた。

二人とも、最初は地獄の者が暗の水氷座という事実に驚いてはいしたが、すぐに受け入れてくれた。

そこで水袋たちはたくさんのかことを話した。夏休みにどこに行ったか、そこでどうしたか、とにかく思い出に浸っていた。

みんながみんな、忘れられない充実した夏休みになったようだ。冬菜はいろんな意味で重要な夏休みとなっただろう。

そんなことを話していると、奏がふとこんなことを言い出した。「そっついや冬菜ちゃん。冬菜ちゃんは学校に行ったりしないの?」

「学校……? ああ、勉強するところですか?」

地獄にいたとはいえ、学校については知っているようだ。

奏に言われて初めて水袋は考えた。これから冬菜をどうするかだ。雛流が開発の成功を前提として、ずっと水袋の家に置いておくわ

けにはいかない。まだ普通感覚をうまく掴めていないため、いつ地獄の者が攻めてくるか分からないこの状況で一人にするのは危ない。そして何より、水袋の親は「いつ帰ってこれるか分からない。あはははは」というので、もし冬菜が一人の時にタイミング悪く帰ってきたら説明がつかない。

そういうことを考えると、学校に入るか、雛流の開発を信じて天国に置いておくかのどちらかになる。

「それは雛流の出来次第だな」

そう水袋は言い、雛流の開発成功を待った。

そして雛流はというと……

「ああゝ！ 全く思いつかない！」

相変わらずこのとおりである。

苦手な機械作りや操作に入る前に、なかなか設計案が思いつかない状況だった。

図書館から漁ってきた物にも、作る方面ばかりで、設計の参考になるものは全然なかった。

最初の段階から全く進んでいない。車でアイドリングだけをしているような状況である。

ずっと悩んでいると「精進しておるの」と、天等王がやってきた。雛流は、「すいません、精進してません」と、思いながら、どうもと簡単に返した。

「何に悩んでおるんじゃ？」

「せ……設計です……」

「なんと……」

さすがに天等王は驚いた。全然精進していなかった事実ではなく、雛流ともあるう天才がここまで苦勞していたことについてだ。

すると天等王が、ピンツ、と人差し指を立てて、ヒントを与えた。
「水袋や奏といった二人は戦闘に共通してつけている物があるんじゃない。手軽だし、身動きもとりやすいな」

それで雛流はまた考え出す。

——水袋と奏が共通している戦闘に使うもの……

雛流は記憶を絞り、思い出す。

——水氷輪、水氷扇、弓矢、ブロンズアーチェリーの指輪……

そしてひらめいた答えは……

——アクセサリー……

五十九・意外な共通点（後書き）

ハ「次回は六十回だぜ！」

水「そうですね」

ハ「主役は私か!？」

水「雛流だ」

水「次回もよろしくお願いします！」

ハ「ちよつと！まとめるな！」

六十・純白真珠のネックレス（前書き）

六十回達成です！

だらだらとやり続けてここまでやってこれました！

もう少し続きますのでよろしくお願いします！

六十・純白真珠のネックレス

——アクセサリー

そう考えがついた雛流は、アクセサリーの中でもややこしくならないように、ブレスレットと指輪以外を考え出し、構想も考えていた。

アクセサリー自体は日常生活につけていても違和感はない。あとは構想を練るだけだ。

といっても雛流は残りのアクセサリーと言われ、ネックレスしか思いつかなかったので、ネックレスの形を中心に開発を開始していた。

小学生でも作れるようなネックレス作りの道具を用意する。細い糸に真珠のような丸い球。この丸い球に遮断するような物質を入れ込む。雛流は、考えは達者である。

図書館から色々と貸し出してきた資料を参考に作り出す。超絶機械音痴の雛流だけでは心配と、天等王が側に座っていた。これなら安心して作ることができる。

雛流は真珠の球に集中し、作業を黙々と進めていった。

「サングラスかけたら何とかなるんじゃないか？」

天国で順調に開発が進んでいることを知らない水袋たちは、もしも、の時のために違った解決方法を考え出していた。

水袋が考えたのは単純にサングラスをかける、そういう事だ。普通人間は眩しいとサングラスをかけたりする。八千代にいたっては遮光板だが。

「天国の光はサングラス程度じゃ防げませんよ」
淡々と矢筈が答えた。

「天国の光は色々と特殊でしてね。地上の人間の道具は何一つ効かないんですよ。光の割合としては地上と全く変わりませんが」
そんな不思議な効能がある天国の光。青い目をしている冬菜にとってはもつと苦しい物である。

「……結局、雛流を信じるしか方法はないのか……」
水裳が、マジかよ、といった表情でそう呟いた。

そんな話をしている中、奏と八千代は冬菜に興味津々だった。

「冬菜ちゃんは楽器って興味ある？」

奏が優しく聞く。さすがだ。いきなり変なやつが集合してびっくりにしている冬菜を落ち着かせようとしている。

「楽器……ですか。やったことはありませんね」

「じゃあさ、今度わたしの家来なよ。一緒にフルートやろ」

眩しい笑顔の奏。こういうところお姉さんっぽいな、と水裳は思った。

「私の家にも来なよ」

「死んでください」

「目の前で光剣したるか!？」

対象的に即嫌われている八千代。パツと見た感じで冬菜の苦手なタイプだろうな、と、水裳は思った。矢筈や大牙も、この状況には笑うしかなかった。

冬菜を知ること盛り上がり、方法は雛流の完成を待つだけになった。

「ここをこうして……」

真珠の球に物質を入れ込むのにも慣れたのか、雛流の作業ペースは上がってきていた。

そして――

「完成！」

両手を上に挙げ、伸びをする。

出来たネツクレスは純白の真珠に包まれている。

それを嬉しそうに見つめながら、雛流はすぐさま翼を広げ、地上に降り立った。

六十・純白真珠のネックレス（後書き）

大「おお、やっと後書きに出れた！」

水「出番少ないからせめてね」

大「……泣いていいか？」

次回、冬菜がついに……！

六十一・最後の夏

雛流は白い翼を羽ばたかせながら地上に降り立った。白い雲を突き抜け、住宅で並ぶ日向町へと近づいていく。

そして薄い茶色の水袋の家についた。

「出来たよ」

「不法侵入〜！」

完成を報告してきた雛流に水袋がドロップキックをかました。そこでようやく水袋は入ってきた人が雛流であることに気づいた。

「ん？ 何だ雛流か」

「いきなり何すんのよ……」

「人の家に入るときはインターホンを押せ」

「はいはい。すいませんでした」

雛流は適当に謝って家に入り、水袋の部屋に向かって歩いた。

雛流がコトンと机の上にネックレスを置き、冬菜に説明を始めた。
「これが、作り出したネックレス。ダークアイのような遮断機能をつけたからフィットもしやすいと思う」

冬菜は無言でネックレスを首につけた。

それと同時に水袋がカーテンを開ける。

三日ぶりくらいに水袋の部屋に光が差し込む。夏の厳しい日差しが差し込む。

「……どう？ 冬菜」

水袋はカーテンを開けながら聞いた。

見る限り、冬菜には何の害もないようだ。余裕で日差しのほうを向いている。

「何の害もないです。とても楽ですね」

その感想を聞いたとき、雛流の表情が明るくなった。

「よし、天国に行くか！」
『おー!!!』

水袋たちは翼を広げ、天国へと向かった――

水袋たちは天等王の前に集合して話を聞いた。

冬菜は天国でも害はなく、通常と変わらずにいた。

「今ここに、天国護廷7が集結した。力、風丸矢筈。知、朝希雛流。明、如月八千代。笑、須永竜輝。音、氷川奏。体、柊大牙。暗、愛沢冬菜。お前達が活躍することを祈る」

天等王がそれぞれの名前を呼び、そう言った。

天国護廷7のみんなはただ頷いた。

これで地獄戦への準備が整ったわけではない、という思いをかみ締めながら。誰もが、ここはスタートラインと思っている。

揃っただけでは地獄と同じだ。しかし、それぞれの弱点が多すぎるのは天国である。

矢筈は力を持っているが、責任感が強すぎるため、すぐに個人戦に持っていつてしまう癖がある。雛流と八千代は、他の人の協力がないと本当の強さを発揮できない。奏と大牙はまだ戦闘にそこまで慣れていない。冬菜は普通の体に感覚が戻りきっていない。須永はバカすぎる。水袋は個人の力を最大限には活かせていない。

それぞれの弱点を見据えての特訓した。

天国にも夏の日差しが降り注ぎ、汗を流しながら、過ごした。

奏や大牙も最後の夏の大会を終え、天国に引きこもり生活となる。

こうして全てを注いだ夏は終了し、世間は秋を迎える――

六十一・最後の夏（後書き）

八「次回はついに新学期だぜ！」
水「秋か〜」

次回、新学期です！ よろしくお願いします！

六十二・二学期／最初の関門／

——秋。

その季節にはいろいろある。読書の秋、スポーツの秋、食欲の秋、花粉症の秋、枯れる秋、だるい二学期の秋、暑いと寒いの間で結構うつとらしい秋……

「って、姫はどれだけ秋に好感がないんですか」

水袋がいろいろな秋について考えていると、一緒に登校中の矢筈が話しかけてきた。

そう、水袋は秋が大嫌いである。鼻がむずむずするし、目がかゆいし、初めは暑いのに後は寒いし——とにかく、嫌いなのだ。

また、二学期の始業式である今日は特にだ。今まで夏休みで緩んできたことを、再び引き締めなければならぬ。

そして、初めの引き締めの大イベントといえば……

「続きは後ほど！」

「情景描写と会話でCMしないでください」

とにかく、その行事の話があるであろう、学校に向かった。

久しぶりの教室にみんな楽しそうだった。「久しぶりだね」とか「元気にしてたか」とか「須永君はもう出血大丈夫なの？」とか色々聞こえてくる。

ちなみに須永の夏休みは病院で幕を閉じた。興奮しすぎて一ヶ月入院とは哀れである。

すると、すっかりモブキャラのミスター・チヨークこと鈴木先生が入ってくる。相変わらずチヨークケースが眩しい。

教卓に名簿を置き、話し始める。

「え、大きな連絡が二つある。まず、転校生……というか、しばらく用事で休んでいた生徒が帰ってきた。入りなさい、愛沢さん」
その名前を聞いたとき、一斉に天国を知っている人間（須永省き）同士でアイコンタクトが行われた。この名前は明らかに――

「再び登校することになりました、愛沢冬菜です。よろしくお願いします」

やはりそうだ。夏休みに天国護廷7の暗の水氷座についた少女、冬菜。まさかこんなタイミングで入ってくるとは思ってもいなかった。

しかし、それよりも気になることが一つあった。

「な……なあ冬菜。お前、帰ってきたって――」

「HR中だ！ 和月！」

「ぐはっ！」

時速150kmのチヨークが水氷に直撃した。そうだ、こいつはこういう教師だった……と、水氷は思い出した。

幸い、冬菜は水氷の後ろの席となり、手紙を送ってもらった。

『元々、ここの生徒だった時に地獄からスカウトされたんです。地獄では一切の外出を禁じられているので、休んでいる、という形にしてもらっていたんです』

その手紙に少々驚いたが、再び登校できるようになって良かったな、とも思う。

そんなところで安心してると、ミスター・チヨークが淡々と二つ目の事を話し始めた。

「それで、今日の本題に入る。もう一週間後には体育祭だ」

そう、夏休みの緩みを引き締める大イベントとは体育祭である。熱き友情でみんなが優勝を目指す、青春の醍醐味。

しかし、水氷にとっては面倒くさいイベントである。熱き友情？

こんなクソ暑いのを余計に熱くしてどうする？ とか、インドア派の水袋は思う。

それとは対象的に燃えるやつもいる。

[illegible]

そう言って大牙が立ち上がる。

こういうスポーツ好きは最高の見せ場である。まあ、こいつに至っては単純に走りたいという考えられない思考からなのだろうが。

またそれとは違って、萌えるやつもいる。

「冬菜ちゃん……可愛いな」

須永がじーっと見てくる。とりあえず冬菜に注意人物として教え

そして、地獄の練習の日々が襲い掛かる――

六十二・二学期／最初の関門（後書き）

ハ「ちくしょー！ 最近全然出番がない！」

水「ああ、そう」

ハ「どうしたら出番が増えるんだー！」

水「誰もが忘れているであろう、必殺技を完成させるとか」

ハ「！？」

水「……忘れてたのか」

次回もよろしくお願いします！

追記

過去の和の水氷輪を読み返しておりますと、何やらバグか何かが発生し、うまく行が開けていません。

ぎゅうぎゅうで読みにくいかもしれませんがよろしくお願いします。

m (——) m

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1674r/>

和の水氷輪

2012年1月13日19時03分発行